

軸は東西でN - 65° - Eと耕作痕2と同様、北に振れている。時期は埋土の状況から、近世以降のものとの推測できる。

#### 9 遺構に伴わない遺物（第63・64図、P.L.23）

調査区内からは縄文時代から中世の遺物が出土している。ただし、遺物の半数以上が現代の土地造成の際に盛られた客土部分からの出土であり、厳密にはこの調査区に伴う遺物であるとはいえない。しかし、この客土は灰褐色土や黒褐色土、AT、赤褐色ローム、黄褐色ロームなどで構成されており、これらは河岸段丘の上段部分を掘削した際の土と考えられることから、遺跡内からの出土遺物として捉えることが可能である。このことから、客土から出土した遺物に関しても図化できるものについては積極的に掲載した。

137～139は弥生土器の甕である。137は口縁端部が上下に肥厚し、その外面に2条の沈線文を施す。138は口縁端部が上下に拡張し、その外面に4条の沈線文を施す。器面調整は内外面ともに縦方向のハケメを施した後、頸部付近まで横方向のナデを施す。139は底部で外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはナデを施す。

140～142は須恵器であり、140は蓋坏の坏身で古墳時代のものである。141は底部のやや内側に高台の付く坏である。142は壺であり、底部は回転糸切りである。

144～149・158は土師器の坏である。144の底部は糸切り後、ナデを施す。145・146・148は外面体部との境に段を有する。147は内外面ともに煤が付着し、外面底部には赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。158の底部は回転糸切りであり、内面には靱殻の圧痕が付く。150～159は土師器の皿である。150の底部は回転糸切りで、体部との境には糸切りの際に失敗した痕跡が認められる。151・154の底部は糸切りであるが、器面が摩滅しており詳細は不明である。152・153・155の底部は回転糸切りである。156の切り離し方法は不明だが、底部切り離し後ナデを施す。157の底部は回転ヘラ切りである。159は手づくねによって成形されたもので、口縁内外面には横方向のナデを施す。

160～163は鍋である。160～162は口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプのもので、土師質である。口縁部は160・161がやや内湾しており、162は直線的である。163は瓦質で受け口状の口縁部をもつ。口縁端部は面取り状のナデを施し、内側が突出する。器面調整は外面がナデ、内面は横方向のハケメを施し、口縁部は内外面ともに横方向のナデを施し丁寧に仕上げる。

164は瓦質の羽釜である。口縁部は内湾して立ち上がり、端部はナデにより明瞭に窪む。口縁部直下には鏝が付く。165は瓦質の鉢で、口縁端部が外傾し、外面はナデ、内面には横方向のハケメを施す。166は土師器の風炉で、球形の胴部に直立する口縁部をもち、胴部との境に突帯が付く。口縁端部は水平で、口縁部外面には連子文が施される。

167～169は須恵器の甕である。167は「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、外面頸部にハケメを施す。このような形状や調整方法をもつものは当地域において珍しい。168・169はともに外面に格子状の叩きを施す。なお、169については胎土分析を行っており、勝間田産との結果が得られた（第5章第4節参照）。

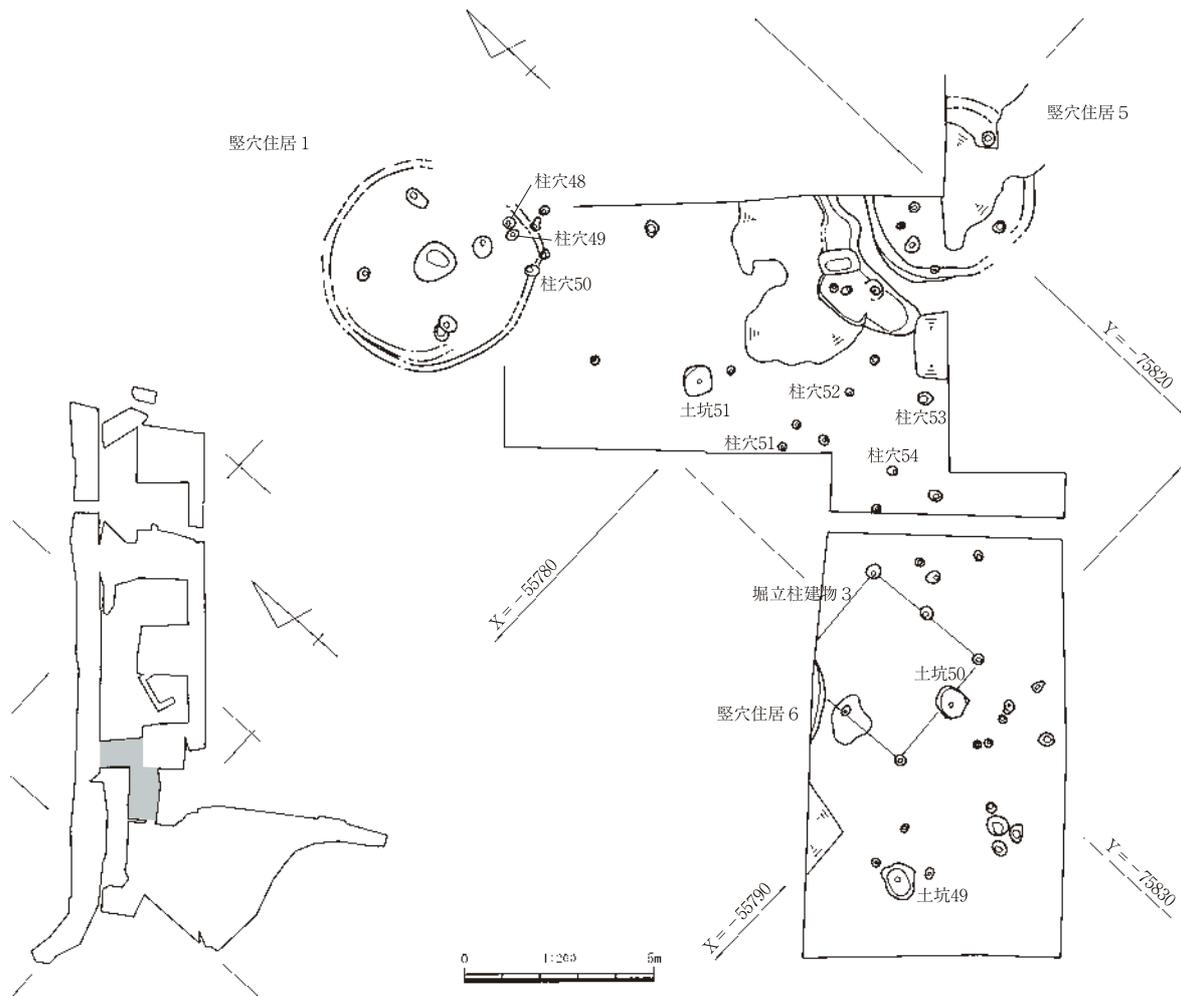
170～173・175は白磁で、171・172は白磁碗類、172は皿で櫛状の工具で施文される。173は白磁碗類、175は合子である。174・176～178は龍泉窯系青磁で、174は碗、176・177は皿類、178は碗D類である。179は青花の端反皿である。180・181は唐津の碗である。

## 第6節 12区の調査

### 1 調査区の概要

遺跡の西側に位置している。北側は7区、東側は9区、南側は10・13区と接している。調査前は東側が耕作地、西側が宅地となっており、西側では家の基礎となるバラスが1mほど盛られていた。地形はほぼ平坦であるが、北側に向かって緩やかに下っている。層序は調査前の状況が耕作地や宅地となっていたためか、調査区全体が大幅な削平を受けており、表土の直下はAT及び赤褐色ロームとなっていた。このため遺物包含層は残っておらず、遺物の出土量は極めて少ないものであった。

遺構の検出はAT及び赤褐色ローム上面で行った。このため近世に至るまでの各時代の遺構を同一面で検出することとなった。これらは埋土によって大きく古代以前と中世以降の2時期に分けることが可能であり、埋土が層に由来する黒褐色土となるものが古代以前、～層に由来する灰褐色土となるものが中世以降の遺構として捉えることができた。このことから、本節では古代以前と中世以降の2時期に分けて報告していく。



第65図 遺構配置図(古代以前)

2 古代以前の遺構と遺物

この時期の遺構としては、竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、柱穴7基、土坑3基、ピットを確認した。遺跡内では比較的遺構密度が高いといえるが、これ以西の8・10・13区ではこの時期の遺構が希薄となることから、集落の縁辺部にあたると思われる。検出した竪穴住居のうち2棟は弥生時代中期後葉のものであり、他は時期不明である。これらはそれぞれ10mほど離れており、とりわけ近接するものではなかった。掘立柱建物は古代以前のもと考えられるが正確な時期は不明である。この時期において掘立柱建物としてまとまるものは15区で掘立柱建物5・6が確認されているにすぎず、遺跡内では珍しいといえる。柱穴は竪穴住居ないしは掘立柱建物としてまとまらなかったが、柱穴48～50の付近にあたる平成16年度の調査箇所において、同形・同規模の柱穴が幾つか確認されていることから、今後の調査によってまとまる可能性が高いといえる。土坑3基は底面ピットを有する落とし穴であり、第4節でも触れたが、これらは列状に配置しているようであり、10・13～15区のものとの関連性がうかがわれる。遺物は黒曜石製の石鏃のほか、古代の須恵器、緑釉陶器が出土した。

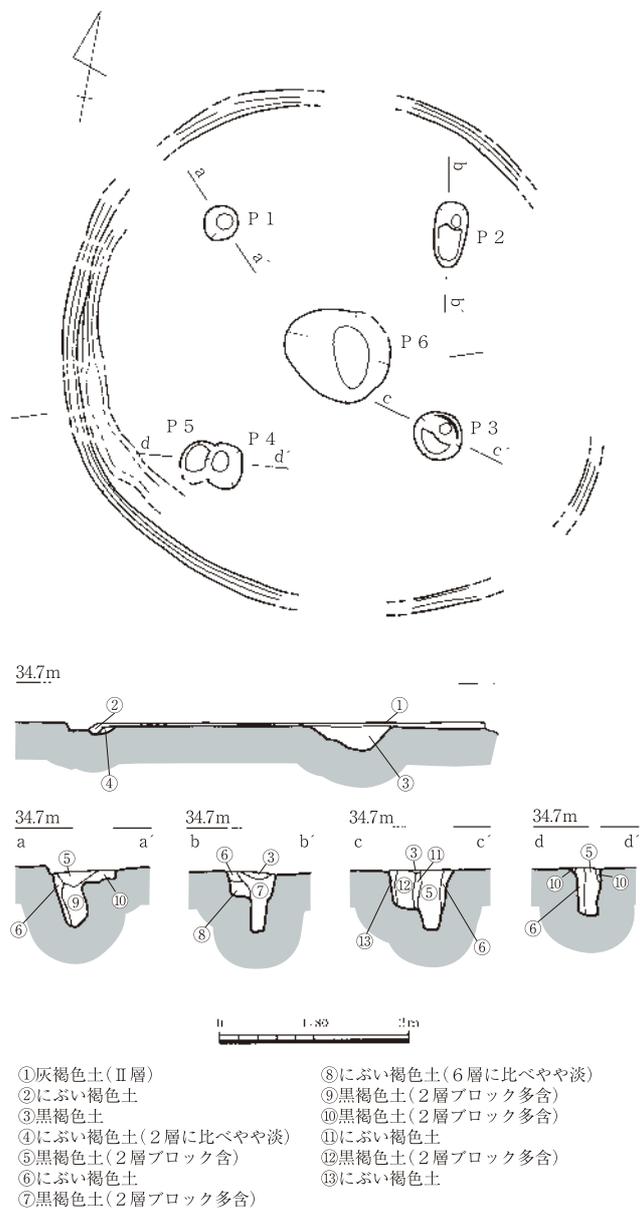
(1) 竪穴住居

竪穴住居1 (第66図、P.L.10)

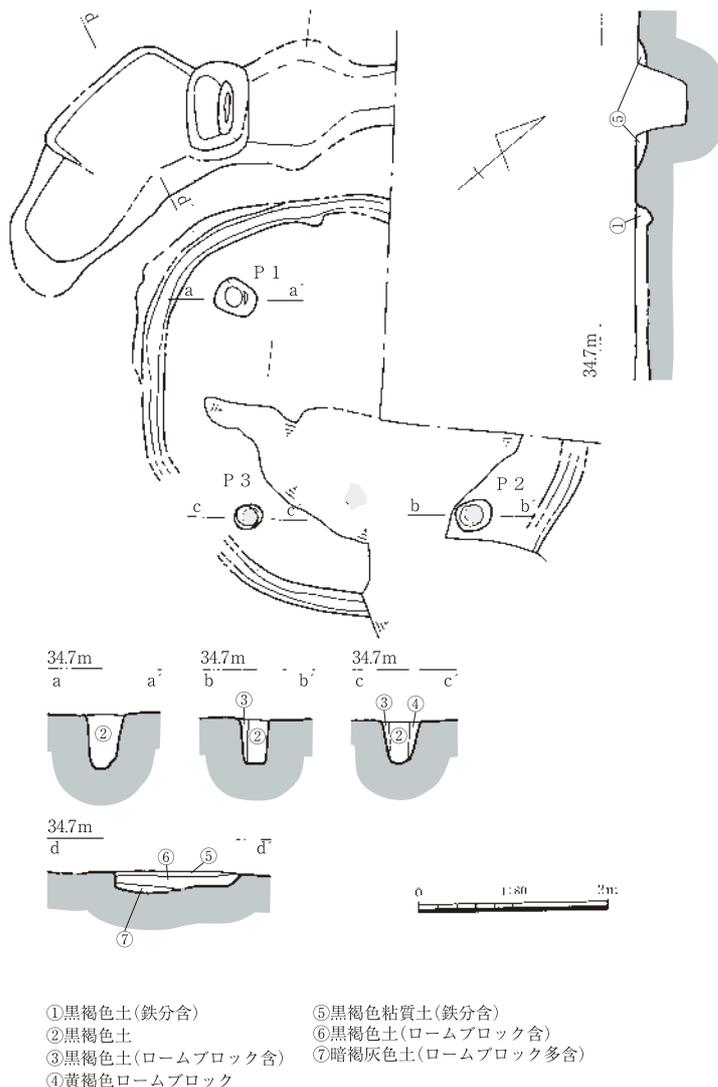
調査区北側に位置している。平成16年度に調査した続きにあたり、全体の1/8ほどを調査した。第66図に掲げているものは前回調査した成果を合成したものである。

竪穴住居1は後世の掘削を受けており遺存状況は悪い。平面形は不整形な円形を呈し、規模は長さ554～600cm、深さ8cm、床面積25.1m<sup>2</sup>を測る。掘り込みは赤褐色ロームまで達しており、床面の周りには幅14～20cm、深さ16cmを測る周壁溝がめぐる。さらに内側には幅12～22cm、深さ7cmを測る溝が西側部分において断片的に認められ、建て替えが行われていたと推察される。

主柱穴は全部で5基検出され、このうちP5はP4によって切られており、建て替え前のものと考えられる。柱穴はそれぞれ周壁溝から54～122cm離れた位置にあり、柱間距離は東西245～247cm、南北230～253cmを測り、その主軸はN-8°-Wとほぼ南北となる。掘り方は円形を基本とするが、P2のように楕円



第66図 竪穴住居1



第67図 竪穴住居5

する周壁溝がめぐり、中央やや南東側では風倒木によって浮いた状態であるが焼土が検出された。主柱穴は3基確認されており、その配置状況から4本柱の竪穴住居であったと推察できる。これらは周壁溝から14～32cm離れて位置しており、柱間距離は約230cmを測る。主軸はN-55°-Wと西に振れている。柱穴の掘り方は円形ないしは隅丸方形を呈し、規模は長さ31～40cm、深さ44～56cmを測る。このうちP2・3では長さ21cmを測る円形の柱痕跡が認められた。

竪穴住居5の北側から35cm離れたところには、住居に沿うにして断面形が皿状ないしは逆台形状を呈する幅62～146cm、深さ11～24cmの溝が認められた。当初、風倒木と考えていたのが、方形を呈する掘り込みないしは土坑が認められたことから、人為的に掘られたものと判断した。ただし、この溝は竪穴住居に近接しすぎるため、これに伴う施設であるのかについては不明である。

遺物は弥生土器182～215、土製品C7、石鏃S20、ガラス小玉J2・J3が出土した。182・184・208～210は壺であり、208は外面に櫛状工具による4条1単位とする沈線文及び波状文を施す。209は脚付壺、210は底部である。183・185～207・211～215は甕で、207の頸部には焼成前に穿孔が施される。C7は円盤状の土製品で、紡錘車の未成品と考えられる。甕の胴部を打ち欠き円形に整形した

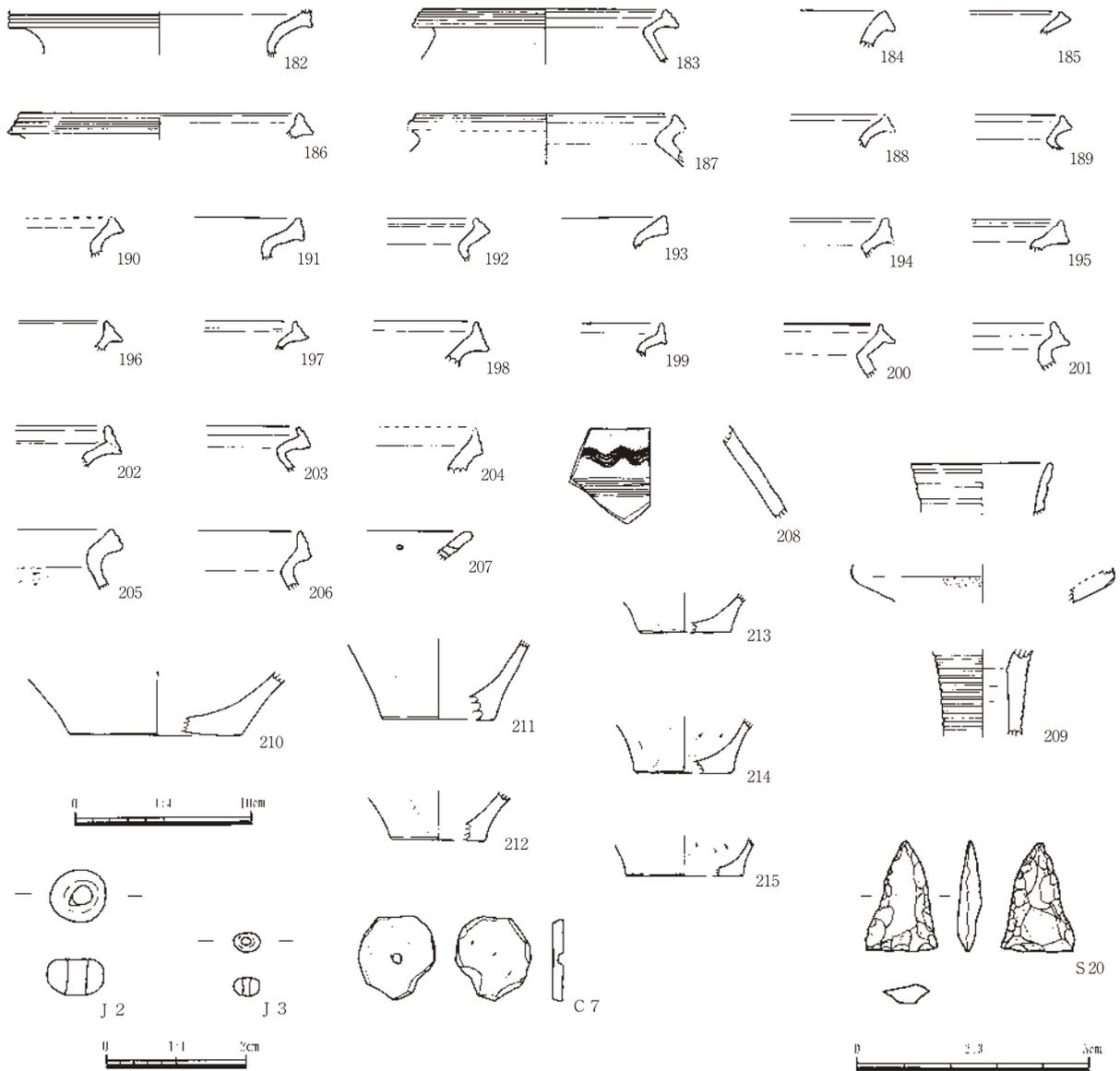
形を呈するものもある。規模は長さ25～68cm、深さ58～64cmを測る。この他、床面のほぼ中心において平面形が不定形な円形を呈し、長さ117cm、幅96cm、深さ16cmを測る中央ピットを検出した。

遺物は前回の調査において甕、高坏が出土している。時期はこれらの遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

竪穴住居5（第67図、P.L.10）

調査区東側に位置しており、遺構の半分は9区で検出した。全体の1/4は調査区外にのび、調査した約1/3は風倒木によって壊されていたため全容は不明瞭である。遺構の検出は漸移層にあたる暗褐色土及びAT上面で行った。

平面形は不定形な円形を呈しており、規模は長さ446～473cm、深さ15cm、推定床面積16.5㎡を測る。遺構の掘り込みはATまで達しており、床面には貼り床が認められなかった。床面の周りには幅14cm、深さ6cm、断面形が「U」字状を呈

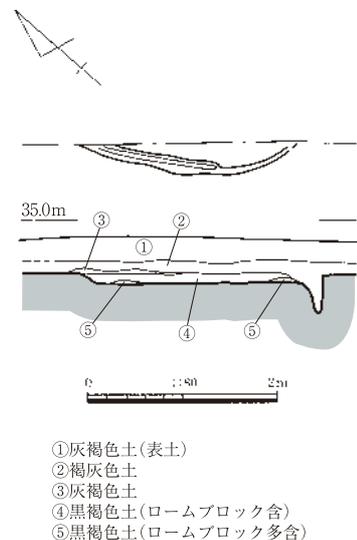


第68図 竪穴住居5出土遺物

後、外面に径5mmほどの孔を穿つが途中で終わる。遺構の時期はこれらの遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

竪穴住居6（第69図）

調査区西側に位置しており、掘立柱建物3と重複する。遺構の大半が調査区外にのびており、その全容は不明である。検出箇所から平面形は円形を呈するものと推察でき、規模は残存長228cm、深さ14cmを測る。掘り込みはATまで達し、床面には貼り床と思われるロームブロックを多く含む層が部分的に認められた。また、その周りには幅12cm、深さ5cm、断面形が「U」字状を呈する周壁溝が一部にめぐっていた。遺物は出土しておらず時期は不明である。

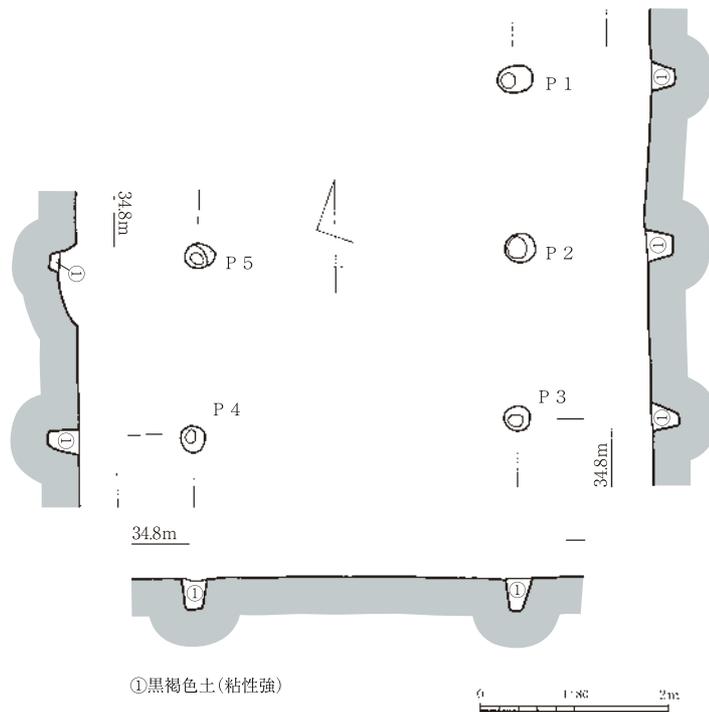


第69図 竪穴住居6

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物3 (第70図、P L .10)

調査区西側に位置しており、遺構の一部は調査区外にのびる。竪穴住居6と重複する状態で検出したが、その切り合いは不明である。検出した状況から桁行2間、梁行1間の掘立柱建物と考えられ、規模は桁行き362cm、梁行352cm、柱間距離は180～190cmを測る。平面形は方形を呈し、主軸方向はほぼ南北となる。柱穴の掘り方は円形を基本とし、規模は長さ24～38cm、深さ24～34cmを測る。埋土は層に由来する黒褐色土の単層であり、ここから古代以前のもので判断できるが、遺物が出土していないため詳細は不明である。

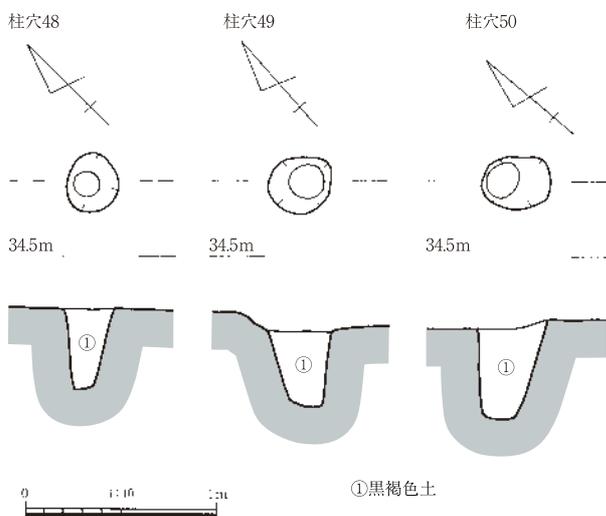


第70図 掘立柱建物3

(3) 柱穴

柱穴48～50 (第71図)

調査区北側に位置しており、竪穴住居1と重複する。竪穴住居1の埋土除去後、その床面で検出された。埋土が黒褐色土と竪穴住居1のものと判別がつかなかったことから、その前後関係は不明である。掘り方は円形を基本としており、規模は長さ26～38cm、深さ39～47cmを測る。遺物は出土しておらず時期は不明である。なお、平成16年度の調査部分において、これとほぼ同じ形状・規模のピットが幾つか確認されており、掘立柱建物ないしは竪穴住居としてまとまる可能性が高い。



第71図 柱穴48～50

柱穴51～54 (第72図)

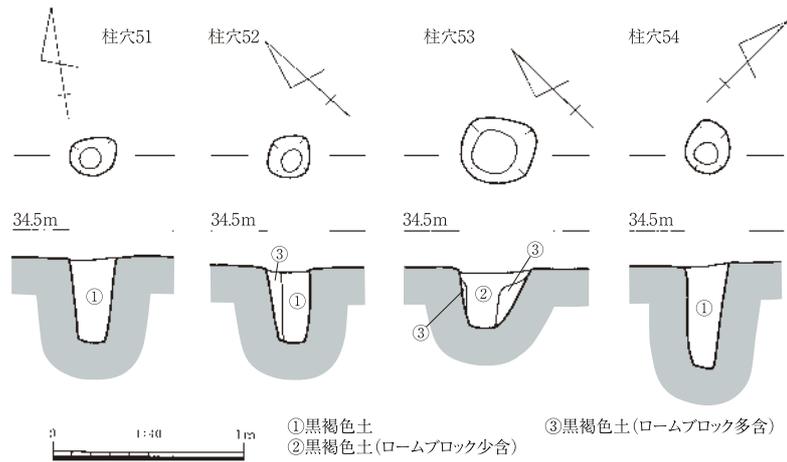
調査区のほぼ中央に位置している。柱穴は全部で4基確認しているが、竪穴住居ないしは掘立柱建物としてまとまらなかった。

柱穴の掘り方は円形を基本とするが、一部に隅丸形状のものも含まれている。規模は長さ32～39cm、深さ30～56cmを測る。このうち柱穴51・52からは、幅15～18cmほどの柱痕跡が認められた。遺物は出土しておらず時期は不明である。

(4) 土坑

土坑 49 (第73図、P L .11)

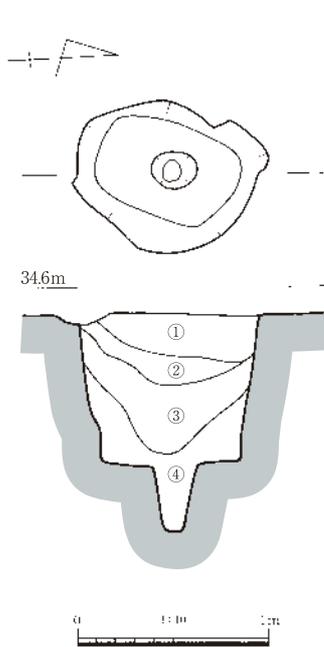
調査区西側に位置しており、赤褐色ローム上で検出した落とし穴である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 95cm、幅 76cm、深さ 77cmを測る。底面は平坦であり、その中心において長さ 22cm、深さ 35cmを測る円形の底面ピットを検出した。遺物は出土しておらず時期は不明である。



第72図 柱穴51 ~ 54

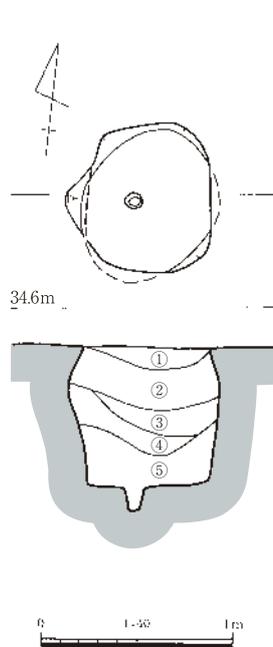
土坑 50 (第74図、P L .11)

土坑 49 の東側 4 m に位置し、掘立柱建物 3 と重複する落とし穴である。検出面は A T 上面であり、遺構の掘り込みは赤褐色ロームまで達していた。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長さ 79cm、幅 65cm、深さ 73cmを測る。底面は平坦であり、中心よりやや東側において長さ 20cm、深さ 24cmを測る底面ピットを検出した。埋土は 5 層に分層でき、このうち底面直上においては壁面を構成する赤褐色ロームに由来する浅橙色土が厚く堆積する。土坑の壁面には挟まれた箇所があることから、この層は崩落土として捉えることができ、使用中もしくは廃棄直後に壁が崩落したものと考えられる。



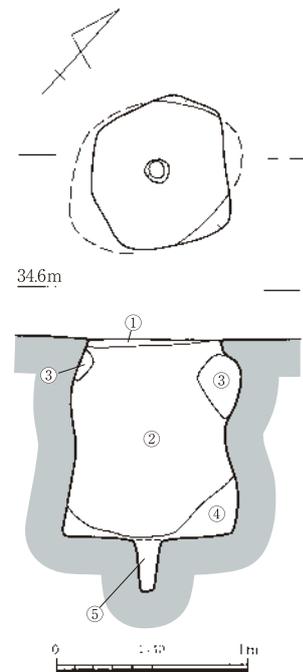
- ① 黒褐色土(炭少・鉄分含)
- ② 黒褐色土(黄橙色粒・炭・鉄分少含)
- ③ 黒褐色土(黄橙粒少含)
- ④ 黒褐色土(浅橙色粒含)

第73図 土坑49



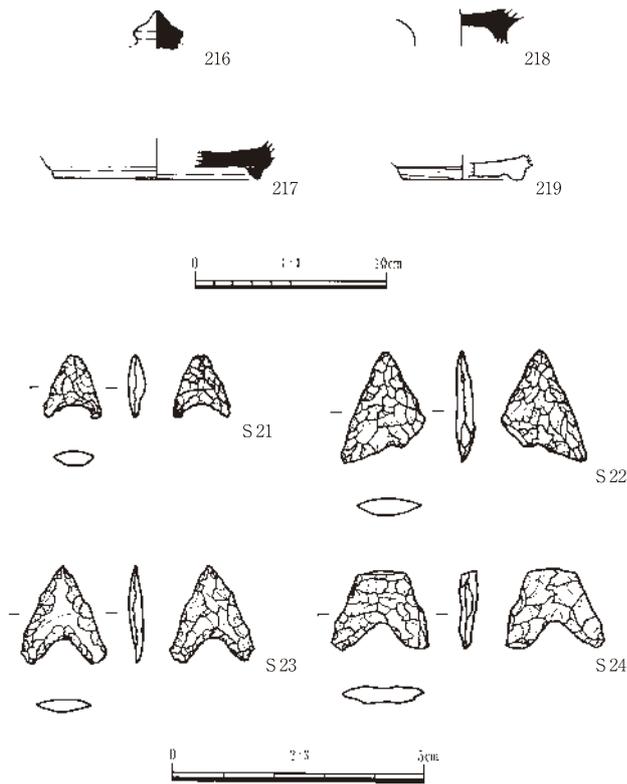
- ① 黒褐色土(炭少・鉄分含)
- ② 黒褐色土(ロームブロック少含)
- ③ 黒褐色土
- ④ 黒褐色土(ロームブロック含)
- ⑤ 浅橙色土(しまり弱、崩落土)

第74図 土坑50



- ① 灰褐色土
- ② 黒褐色土(上面鉄分沈着)
- ③ 黄褐色ロームブロック(黒褐色土少含)
- ④ 黒褐色土(ロームブロック含)
- ⑤ 灰褐色土

第75図 土坑51



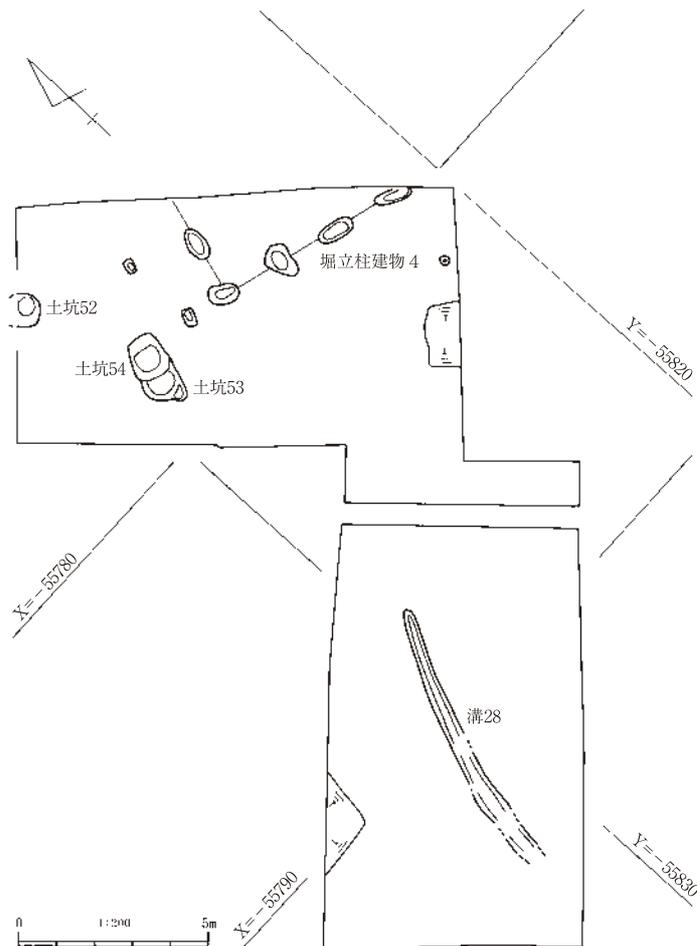
第76図 遺構に伴わない遺物

土坑 51 (第 75 図、P L .11)

土坑 50 の東側 10 m に位置し、A T 上で検出した落とし穴である。平面形は不定形な隅丸方形を呈し、規模は長さ 82cm、幅 70cm、深さ 105cm を測る。底面は上面に比べてやや広くなり、その中心部において長さ 14cm、深さ 26cm を測る円形の底面ピットを検出した。遺物は出土しておらず時期は不明である。

(5) 遺構に伴わない遺物 (第 76 図)

遺物は主に表土中から 216 ~ 219、S 21 ~ S 24 が出土した。216 ~ 217 は須恵器であり、216 は蓋のつまみ部分である。217 は高台の付く坏、218 は高坏である。219 は緑釉陶器であり、坏か皿の高台部分である。S 21 ~ S 24 は凹基式の石鏃であり、黒曜石製である。



第77図 遺構配置図 (中世以降)

### 3 中世以降の遺構と遺物

確認した遺構は掘立柱建物 1 棟、土坑 3 基、溝 1 条である。このうち掘立柱建物と溝は中世、土坑は近世以降のものと捉えている。掘立柱建物は、主軸を東西方向にもち、区画溝と想定した溝 3 と直交する。これらを同時期のものとする根拠は乏しいが、区画された空間ないしはこれを踏襲して形成された地割に従って建てられたものと思われる。溝 28 は 層を埋土にもつ浅い溝であり、9 区の溝 22 ~ 25 に並行ないしは直交し、15 区の水田 1・2 や畠 1 ~ 3 の区画に即した配置をしていることから、水田や畠を区画する溝もしくは耕作に伴う溝と思われる。土坑 52 ~ 54 はこれと同様のものが 7・8 区においても確認されており、これらは比較的まとまって分布していることから、一連のものと考えられる。

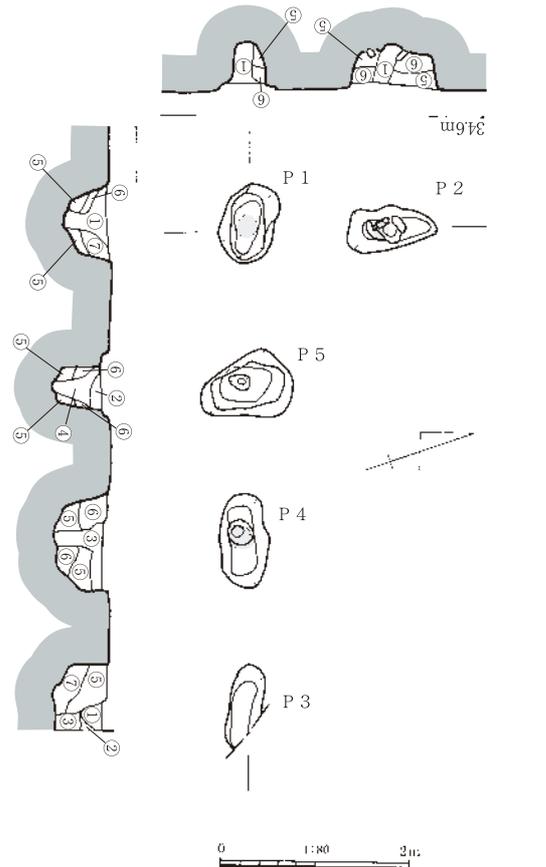
(1) 掘立柱建物

掘立柱建物4 (第78図、P.L.12)

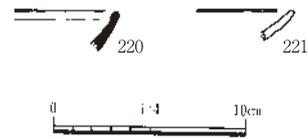
調査区北側に位置しており、竪穴住居5と重複する。遺構の半分以上は調査区外へのびており、その全容については不明である。

遺構は桁行3間、梁行1間部分を確認した。主軸方向はN-72°-Wと西に振れており、柱間距離は144~182cmを測る。柱穴の掘り方は不定形な楕円形を呈しており、規模は長さ83~93cm、幅48~56cm、深さ40~54cmを測る。検出した全ての柱穴において径20~28cmを測る円形の柱当り痕跡が確認され、このうちP2では一辺20cmを測る扁平な石が柱を囲うようにして配置されていた。

遺物はP4より220が、P5より221が出土した。220は須恵器の坏であり、口縁端部が若干内側に肥厚する。221は陶器の皿で内外面に緑色の釉がかかる。時期は出土遺物より、中世の範疇に収まるものと考えられる。



- ① 灰褐色土
- ② 黄橙色ロームブロック (褐灰色土少含)
- ③ 灰褐色土 (ロームブロック含)
- ④ 灰褐色土 (ロームブロック多含)
- ⑤ 灰褐色土 (ロームブロック含)
- ⑥ 赤褐色ロームブロック (褐灰色土少含)
- ⑦ 灰褐色土

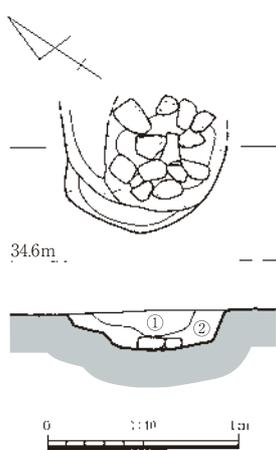


第78図 掘立柱建物4・出土遺物

(2) 土坑

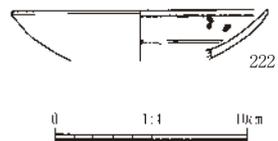
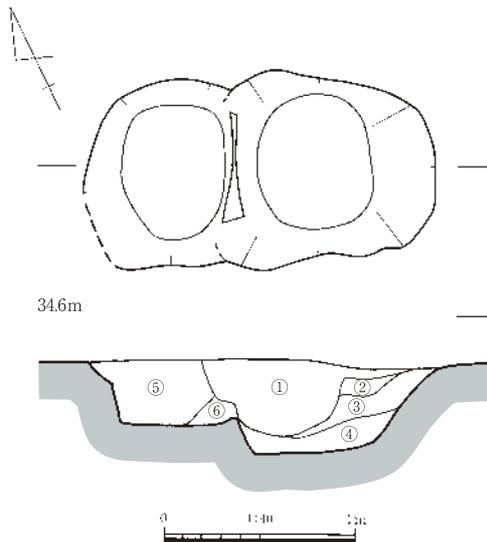
土坑52 (第79図、P.L.12)

調査区西側に位置しており、竪穴住居1を切っている。遺構の北東部分はずでに消失しており、全容は不明である。平面形は幾つかの掘り込みがあるため、不定形な円形となる。規模は残存長88cm、深さ21cmを測る。底面は平坦で、そこには一辺6~20cmの礫が敷き詰め



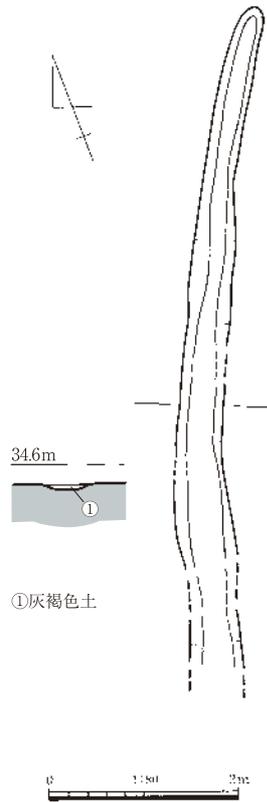
- ① 灰褐色土 (ロームブロック多含)
- ② 灰褐色土 (ロームブロック、白色粒少含)

第79図 土坑52



- ① 灰褐色土 (ロームブロック僅含)
- ② 灰褐色土 (ロームブロック少含)
- ③ 灰褐色土 (ロームブロック多含)
- ④ 灰褐色土 (ロームブロック含)
- ⑤ 灰褐色土 (ロームブロック多含)
- ⑥ 灰褐色土 (ロームブロック含)

第80図 土坑53・54・出土遺物



第81図 溝28

られていた。遺物は出土しておらず時期不明であるが、埋土の状況から近世以降の可能性が高い。

土坑 53・54 (第80図、P L .12)

土坑 52 の南側約 2.5 m に位置している。これらは切り合っており、土坑 54 が新しい。ともに平面形は隅丸方形となっており、断面形は逆台形状を呈する。規模は土坑 53 で長さ 98cm、深さ 35cm を測り、土坑 54 では長さ 124cm、深さ 50cm を測る。遺物は埋土中より 222 が出土している。222 は肥前系磁器の皿である。

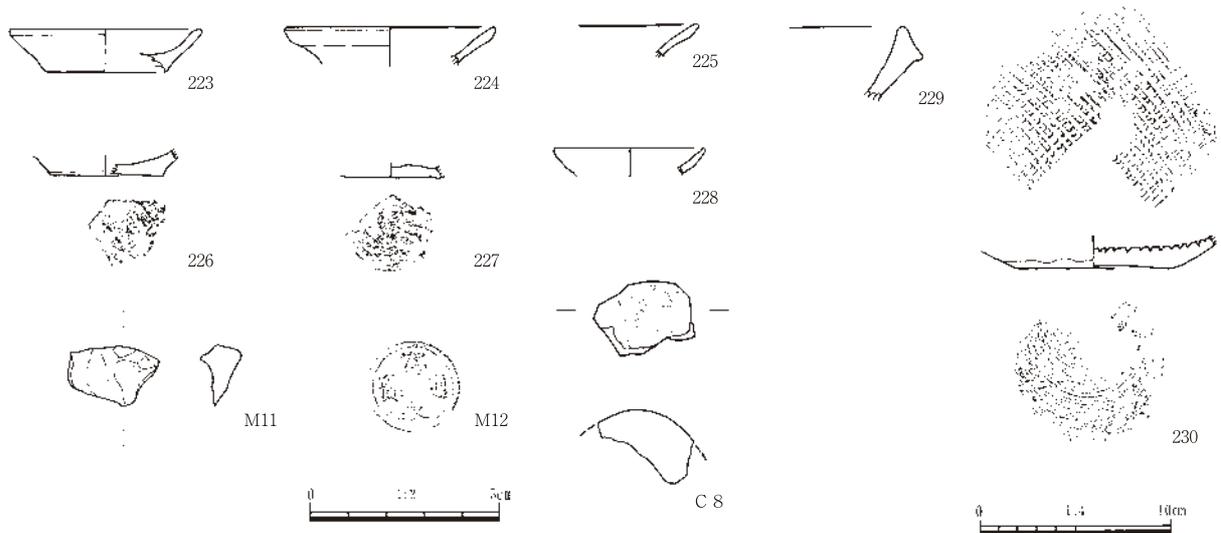
(3) 溝

溝 28 (第81図)

調査区西側に位置している。南北方向に直線的にのびる浅い溝であり、軸は N - 25° - E と東に振れている。断面形は皿状を呈しており、規模は幅 56cm、深さ 6 cm を測る。埋土は 層であり、耕作に伴う溝と考えられる。

(4) 遺構に伴わない遺物 (第82図、P L .24)

遺物は主に表土中から出土した。223 ~ 228 は土師器であり、226 は坏で体部との境に段がみられ、底部は糸切りによって切り離される。223 ~ 225・227・228 は皿で、227 の切り離しは回転糸切りである。229 は備前焼の 期の播鉢であり、内面に卸目がつく。230 は卸皿で内面に格子状の卸目を施し、底面は回転糸切りによって切り離す。古瀬戸中期に属する可能性が高い。M 11 は青銅塊、M 12 は寛永通寶、C 8 は鞆の羽口である。



第82図 遺構に伴わない遺物

## 第7節 14・15区の調査

### 1 調査区の概要

門前上屋敷遺跡14・15区は、後述する門前鎮守山城跡に接する調査区で、遺構検出面は造成土上面から地山ローム層上までの4面あり、縄文時代から中近世にかけての遺構が密な状態で検出された地区である。

第4遺構面は、層（黒褐色土）を除去しローム層上面またはAT（始良・丹沢パミス）層上面の検出面で、縄文時代から弥生時代中期にかけての落とし穴、竪穴住居跡を検出した。検出面は同一であったが、本来は層中で遺構が掘り込まれ、層位的にも前後関係があるものと考えられる。

第3遺構面は、層を除去し検出した遺構面で、出土遺物から古代から中世前期に当たるものと考えられる。古代の段状遺構・掘立柱建物跡、中世前期の掘立柱建物跡群などを検出した。

第2遺構面は、造成土除去後の層上面の検出面である。良好な状態で田畠が検出された。15世紀代のものと考えられる。

第1遺構面は、造成土上面に当たり、中世後期（15世紀）から近世・近代にかけて建物が作られている。造成に伴う建物は、後世の削平でほとんど検出できなかったが、一部掘立柱建物が複数重複した状態で検出されている。これらは、隣接する同時期の門前鎮守山城跡出土墨書土器の存在から、寺院に関連した建物の可能性がある。

### 2 古墳時代以前の調査

検出した遺構は、落とし穴5基、竪穴住居跡2棟である。

落とし穴は、正確な時期は不明であるが、縄文時代のものと考えられ、層中で検出された縄文土器が、晩期ごろの特徴を有すことから、この時期になる可能性がある。

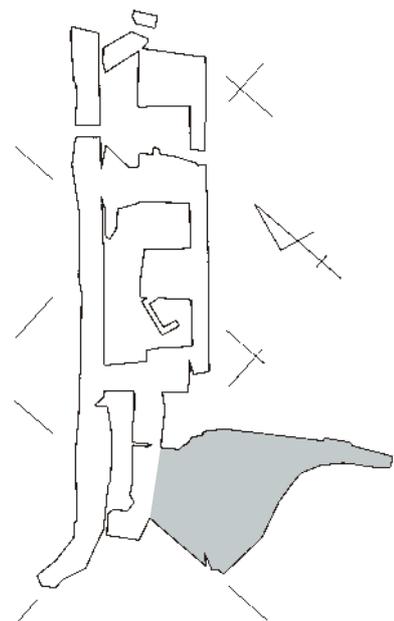
形態的には底面にピットを有す同一のもので、西側で比較的近接して見つかっている。土坑55がやや離れて立地している。12区に向かって2列状に延びるものと考えられる。

竪穴住居跡はいずれも弥生時代後期前葉のもので、小型・中型のものが比較的近接した状態で検出されている。セット関係を見る上で良好な資料である。竪穴住居8には外周溝が巡っており、周提の存在が窺われる。

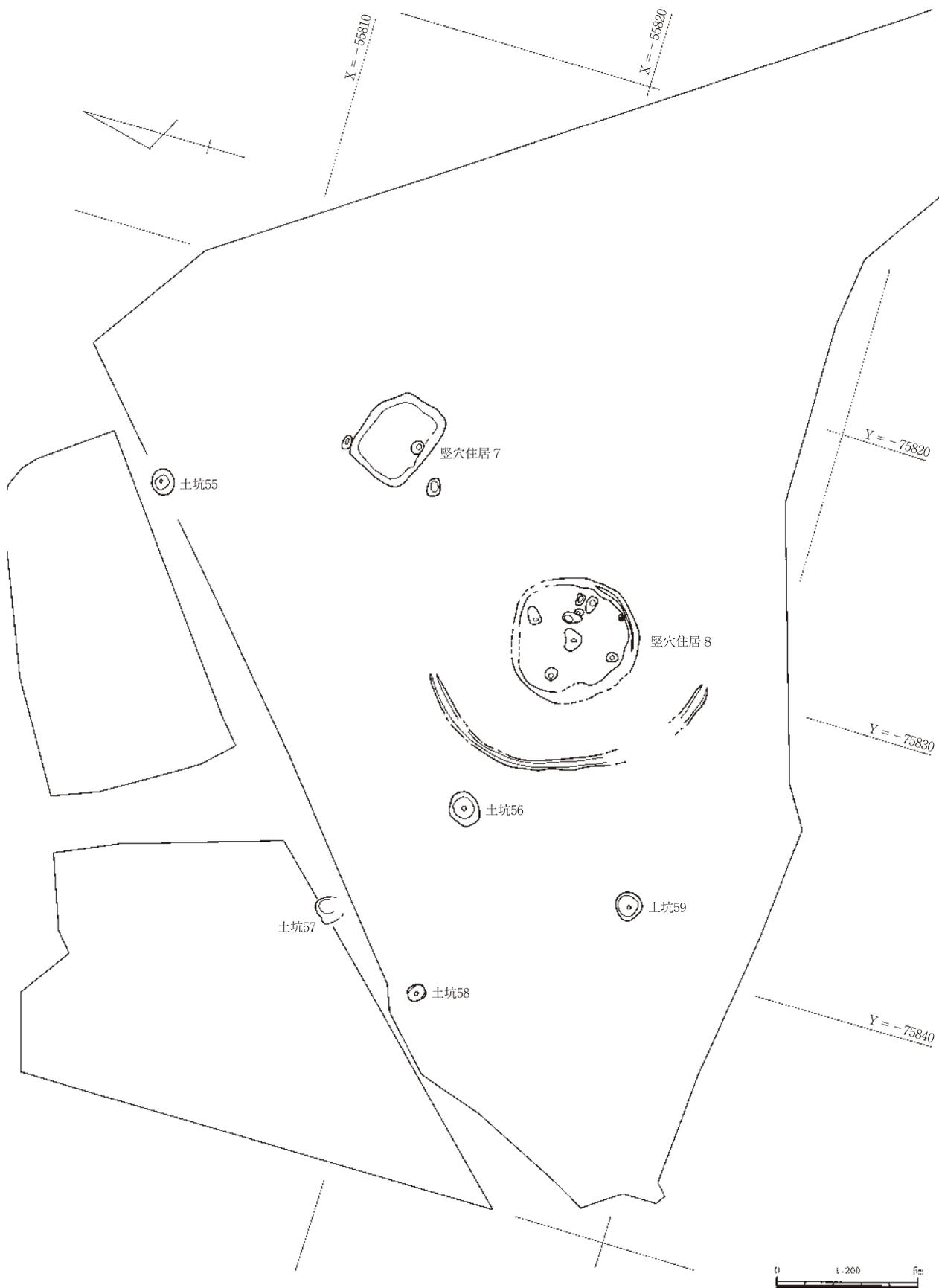
#### (1) 竪穴住居

竪穴住居7（第85・86図、P.L.14・25）

15区北側のI8グリッドにあり、標高34.8m付近の平坦面に立地する。灰褐色遺物包含層を除去し、ローム層上面で検出したが、本来は遺物包含層から掘り込まれたものと考えられる。



第83図 調査区配置図



第84図 遺構配置図（古墳時代以前）

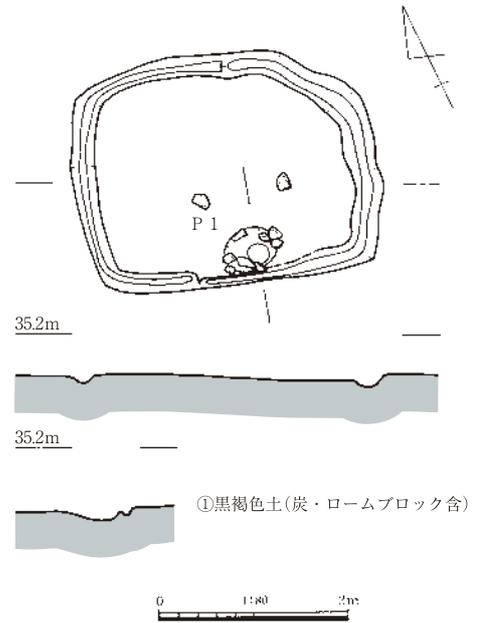
平面は不整長方形を呈し、長軸 3.2 m、短軸 2.44 m、床面積 4.9m<sup>2</sup>と小型である。壁際には、幅 12 ~ 24cm、深さ 8 cm 程度の壁溝が全周する。

主柱穴はない。南壁際で (56 × 44 - 10) cm を測る P 1 が検出された。このピットの周辺で人頭大の自然礫がまとまって検出されている。

埋土はほとんど確認できなかったが、炭化物を含む黒褐色土系の埋土である。

出土遺物には、埋土中で出土した弥生土器壺 231、甕 232 ~ 238、底部 239 ~ 241 がある。

出土遺物等から清水 - 1 様式、弥生時代後期前葉ごろと考えられる。

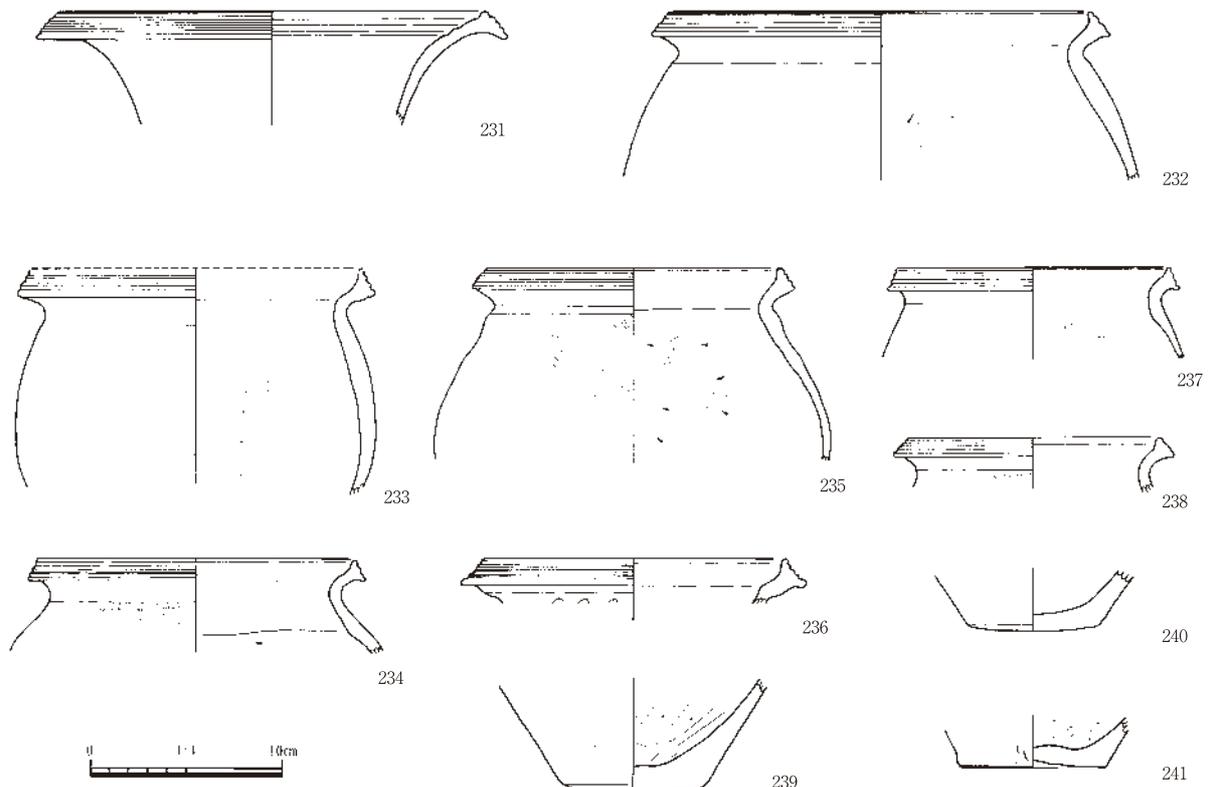


第85図 竪穴住居7

竪穴住居8 (第87・88図、P L.14)

15区中央のJ8・9グリッドにあり、標高 35.2 ~ 35.3 m 付近のほぼ平坦面に立地する。灰褐色遺物包含層を除去し、ローム層上面で検出したが、本来は遺物包含層から掘り込まれたものと考えられる。

平面は不整楕円形を呈し、長軸 4.57 m、短軸 4.4 m、床面積 12.0m<sup>2</sup>とやや小型である。壁際には、幅 12 ~ 24cm、深さ 8 cm 程度の壁溝が全周する。壁溝は一部複数認められ、建て替えがあったものと考えられる。主柱穴は P 1 ~ P 4 の4基である。主柱穴間距離は P 1 - P 2 間から順に 2.1、2.2、2.0、



第86図 竪穴住居7出土遺物

2.1 mである。P 2、P 3は重複した状況を示し、やはり建て替えの根拠となろう。床面上では、中央ピットP 5を挟んで2箇所焼土面が検出された。

周壁から約2.5 m離れて、同心円状に幅40cm前後、深さ4～10cm程度の外周溝が地盤の高い側に掘り込まれている。外周溝の間には、周提が巡っていたものと考えられる。

埋土はほとんど確認できなかったが、炭化物を含む黒褐色土系の埋土である。

出土遺物には、埋土中で出土した弥生土器甕242～247、脚部248、底部249がある。

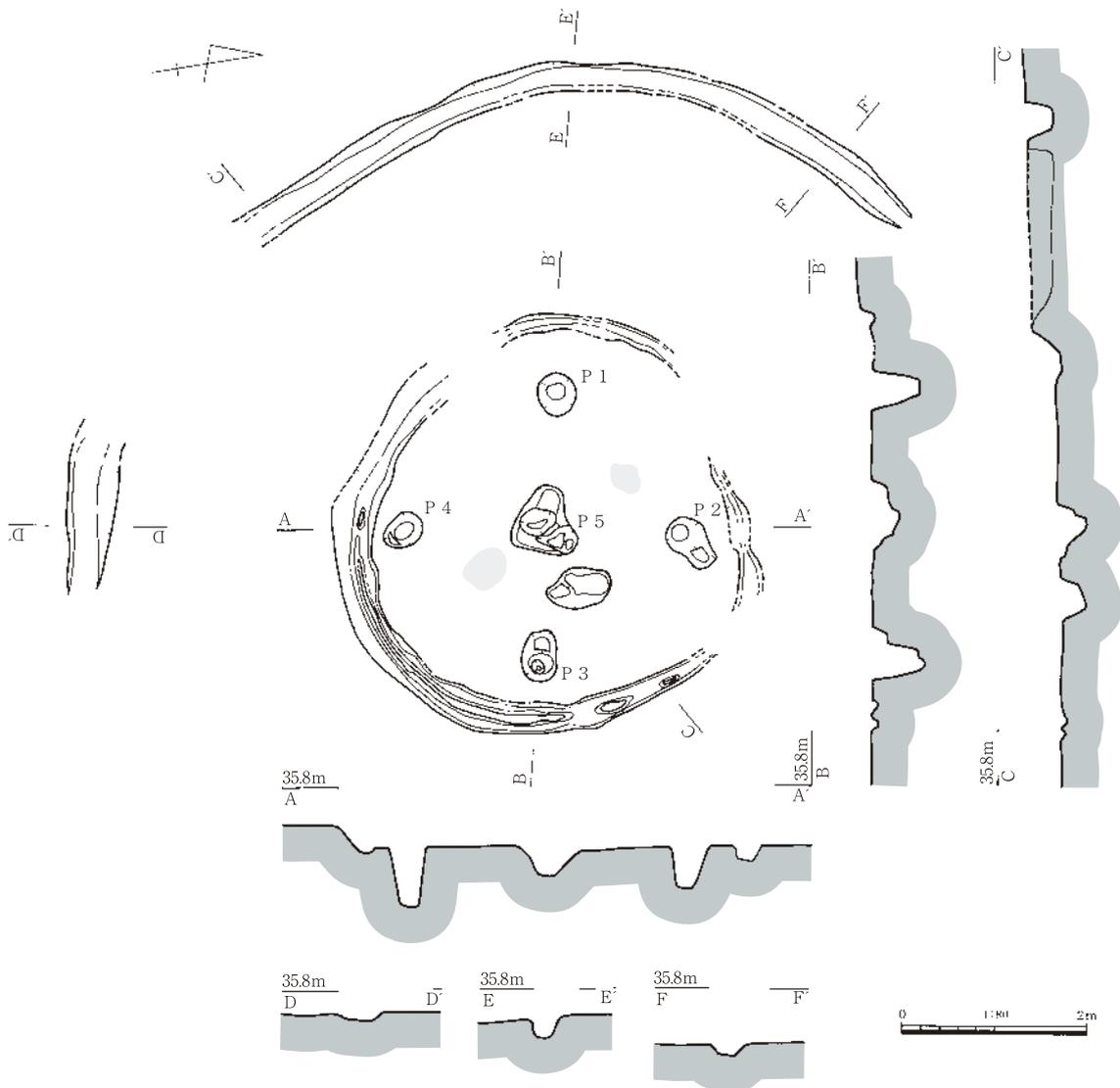
出土遺物等から清水 - 1様式、弥生時代後期前葉ごろと考えられる。

(2) 土坑

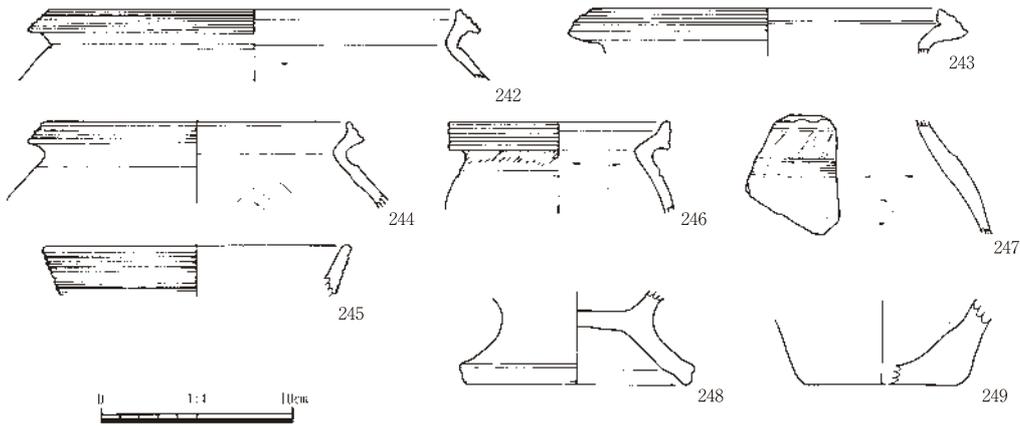
土坑55 (第89図、P L.15)

15区H 8グリッドにあり、黒褐色土包含層を除去した後に検出することができた。

平面は不整楕円形を呈し、長軸0.9 m、短軸0.8 m、深さ0.95 mを測る。底面中央に、(20 × 13 -



第87図 竪穴住居 8



第88図 竪穴住居8出土遺物

26) cmを測るピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと思われる。

埋土は2層に分層できた。

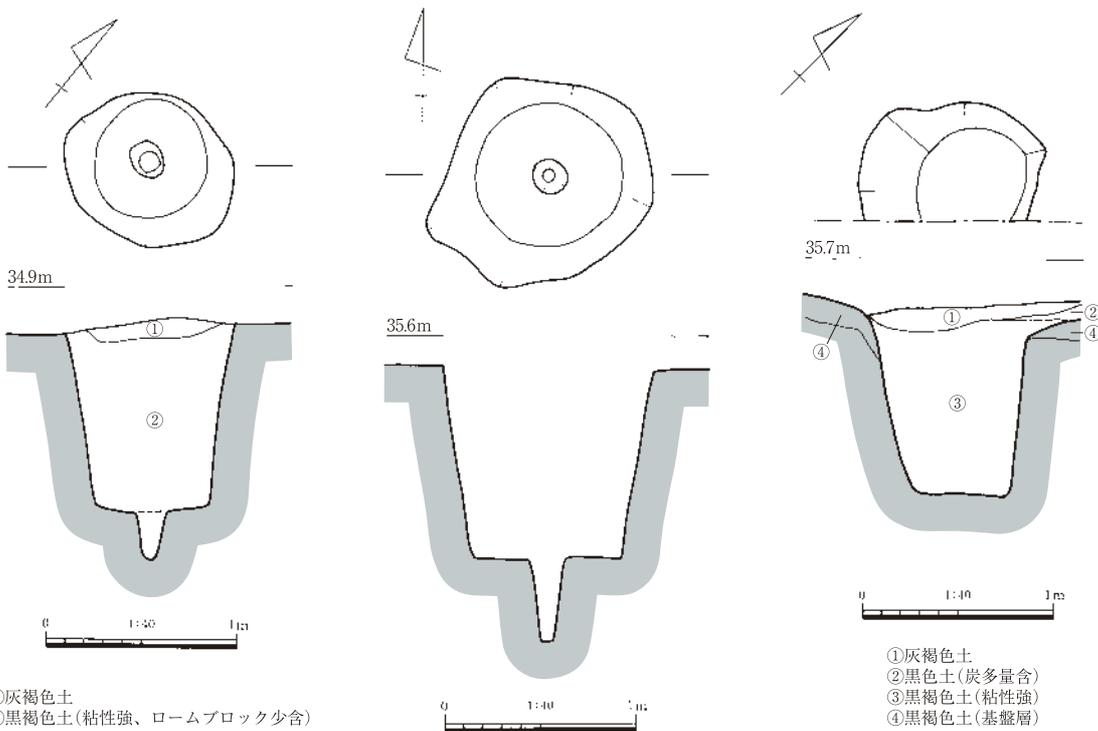
出土遺物がなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

土坑56 (第90図、P L.15)

15区J9グリッドにあり、黒褐色土包含層を除去した後に検出することができた。

平面は楕円形を呈し、長軸 1.17 m、短軸 1.09 m、深さ 1.0 mを測る。底面中央に、(19 × 18 - 44) cmを測るピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと思われる。

出土遺物がなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



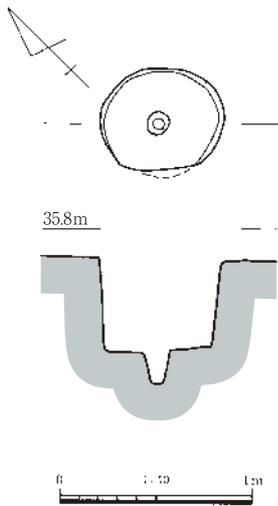
①灰褐色土  
②黒褐色土(粘性強、ロームブロック少含)

①灰褐色土  
②黒色土(炭多量含)  
③黒褐色土(粘性強)  
④黒褐色土(基盤層)

第89図 土坑55

第90図 土坑56

第91図 土坑57



第92図 土坑58

土坑57 (第91図、P L.15)

14区 10グリッドにあり、造成土を除去した後に検出することができた。東側は調査区外へ延びている。埋土上層は、水田2に伴う溝が掘り込んでいる。

平面は不整楕円を呈し、長軸 0.92 m、短軸 0.7 m 以上、深さ 0.87 m を測る。

埋土は黒褐色粘質土単層である。

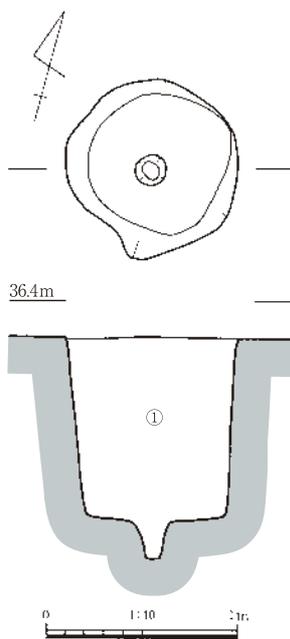
出土遺物がなく時期、性格は不明であるが、黒褐色土層を掘り込んでいる。

土坑58 (第92図、P L.15)

15区J 10グリッドにあり、黒褐色土包含層を除去した後に検出することができた。

平面は楕円形を呈し、長軸 0.64 m、短軸 0.53 m、深さ 0.46 m を測る。底面中央に、(12 × 11 - 17) cm を測るピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと思われる。

出土遺物がなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



①黒褐色土(粘性強)

第93図 土坑59

土坑 59 (第 93 図)

15区J 9グリッドにあり、黒褐色土包含層を除去した後に検出することができた。

平面は不整楕円形を呈し、長軸 0.9 m、短軸 0.83 m、深さ 0.94 m を測る。底面中央に、(18 × 16 - 19) cm を測るピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと思われる。

出土遺物がなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

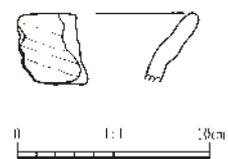
(4) 遺構に伴わない遺物 (第94～98図、P L.25～28)

ここでは、層中で出土した、遺構に伴わない遺物について触れる。

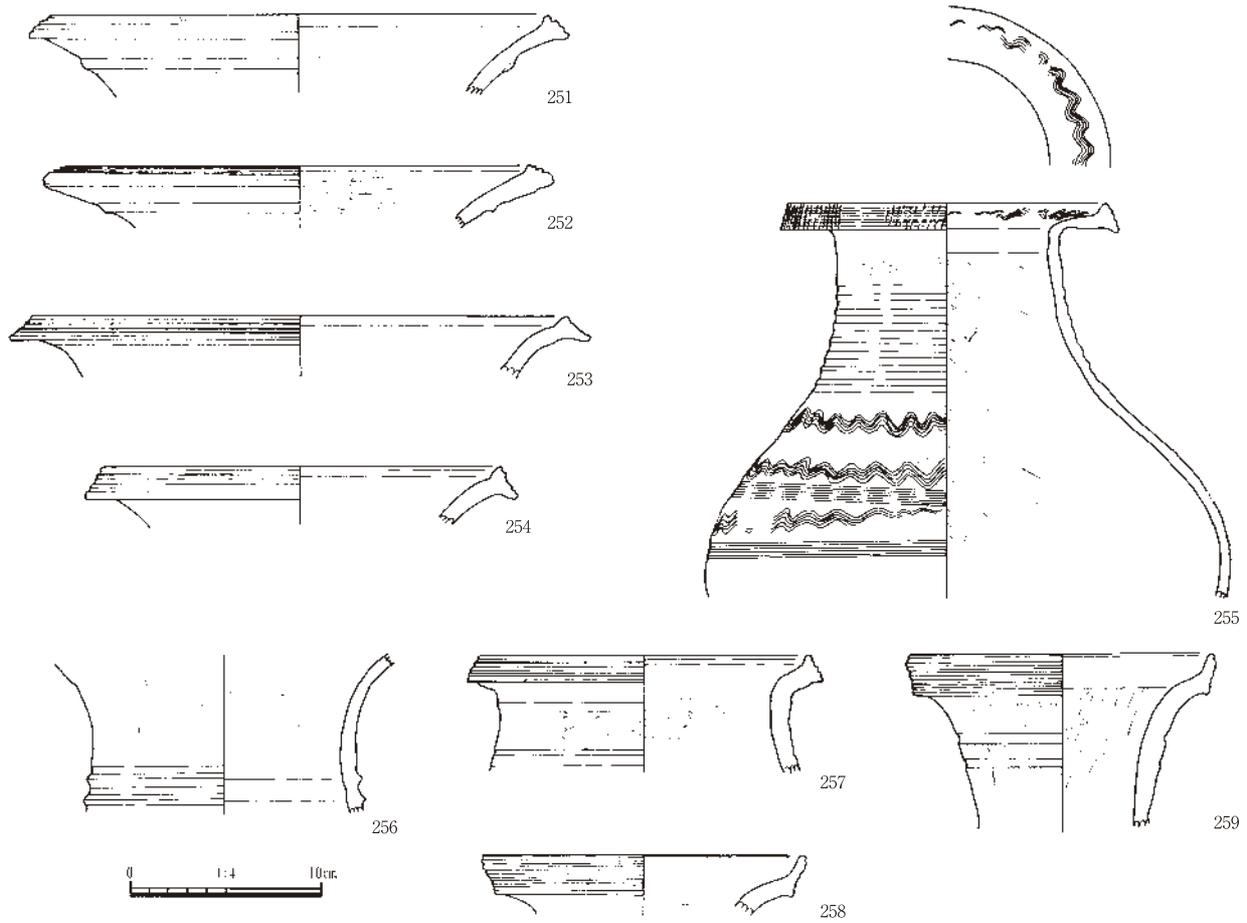
図化したもののうち、縄文土器鉢口縁部 250 は、手法上の特徴から、縄文時代晩期ごろのものと考えられる。

また、弥生土器壺 251～259、甕 260～289、土師器甕 290・291、弥生土器鉢 292、脚部 293、高坏 294・295、器台 296・297、底部 298～311、注口部 312、黒曜石製楔形石器 S 25、サヌカイト製異形石器 S 26、黒曜石製スクレイパー S 27、安山岩製磨製石剣茎部破片 S 28、安山岩製磨製石斧基部 S 29、安山岩製磨石 S 30、敲石 S 31 である。

弥生土器壺 251～256 は、口縁端部が拡張し凹線が施され、頸部には



第94図 遺構に伴わない遺物



第95図 遺構に伴わない遺物

貼り付け突帯が巡るもので、256のように口縁内面にも波状文が施され、体部肩部が加飾されるものもある。内面は頸部上半以上ハケ目調整が施される。

257～259は、口縁部が更に発達し、外面に平行沈線が施される。259は、頸部外面にタテハケ後2条沈線が施される。

弥生土器甕260・261・264は、口縁部がくの字に屈曲し端部がやや拡張気味になるもので、体部の調整は外面タテハケ、内面ハケ目調整である。

262・263・265は、口縁端部が更に拡張し2条凹線が施される。体部の調整は前述のものと同じでない。

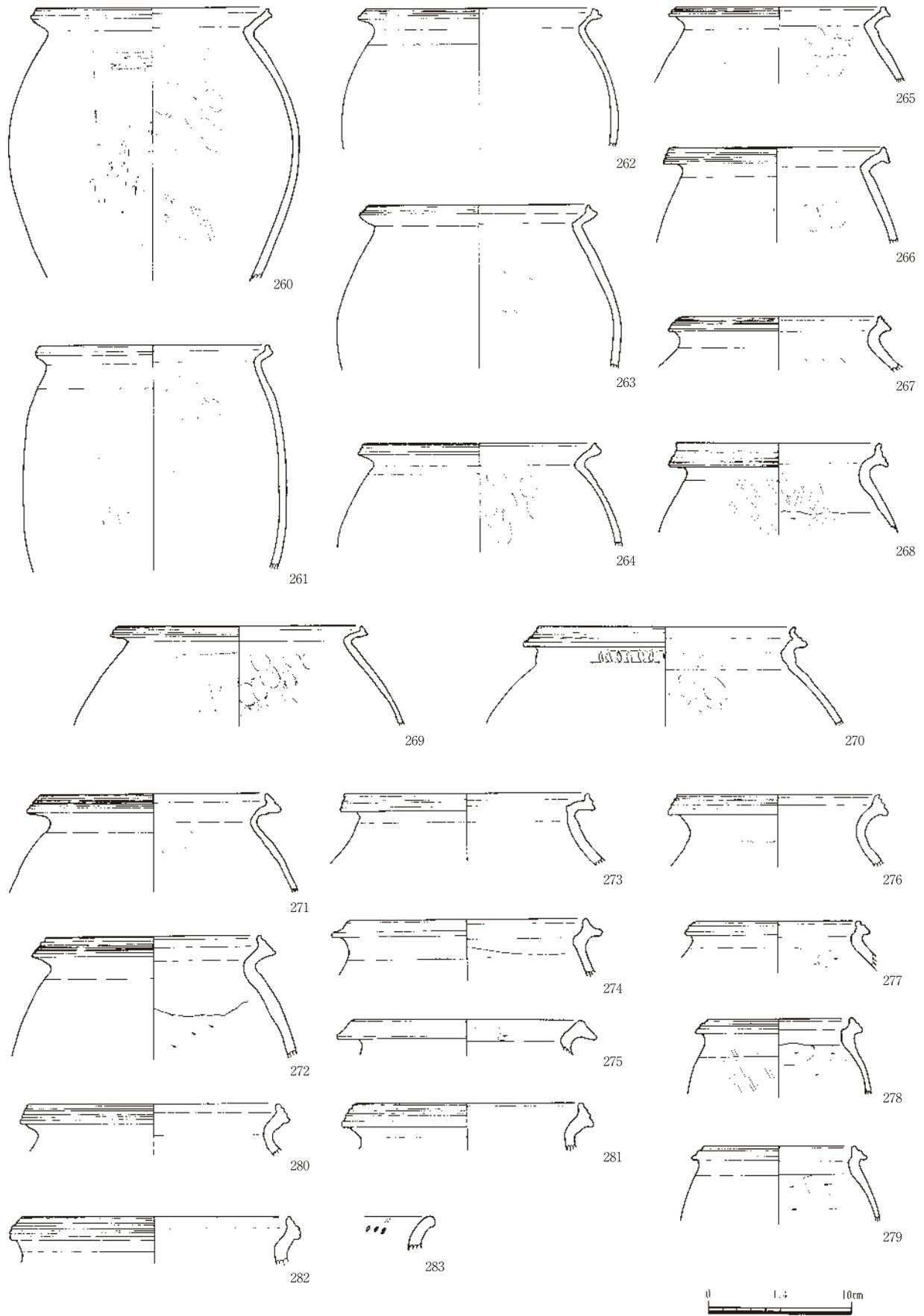
266～272は、口縁部が更に拡張するもので2～4条の凹線文が施される。270は、頸部に貼り付け突帯をもつ。

273～284は、口縁部が内傾気味に立ち上がるもので、2～3条の凹線が施される。体部外面はタテハケが主流で、内面は頸部付近までケズリが施される。

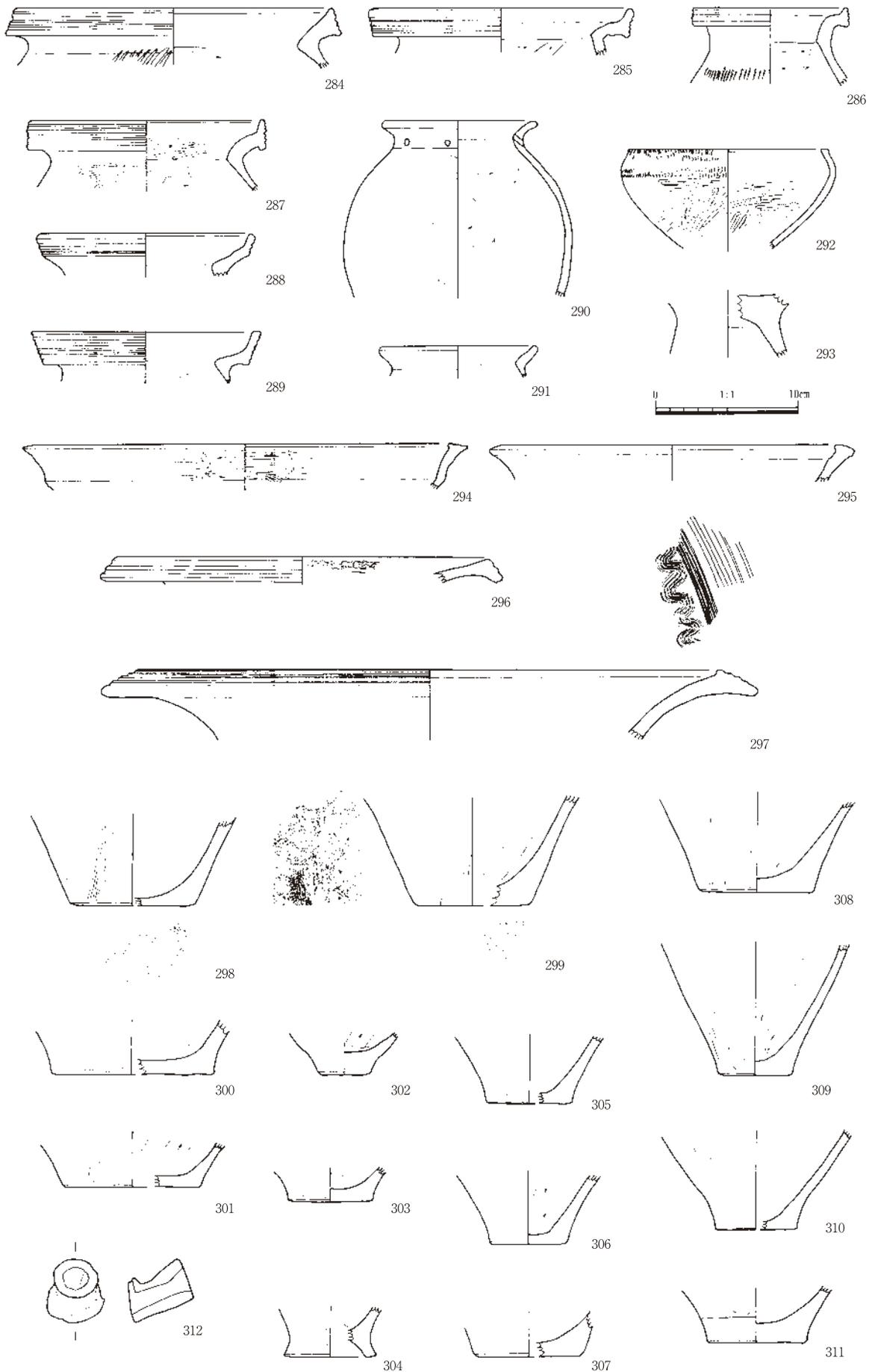
285～288は、口縁部が直立気味に拡張し複合口縁となるもので、平行沈線文が施される。

289は、更に拡張した複合口縁をもち、多条化した平行沈線文が施される。

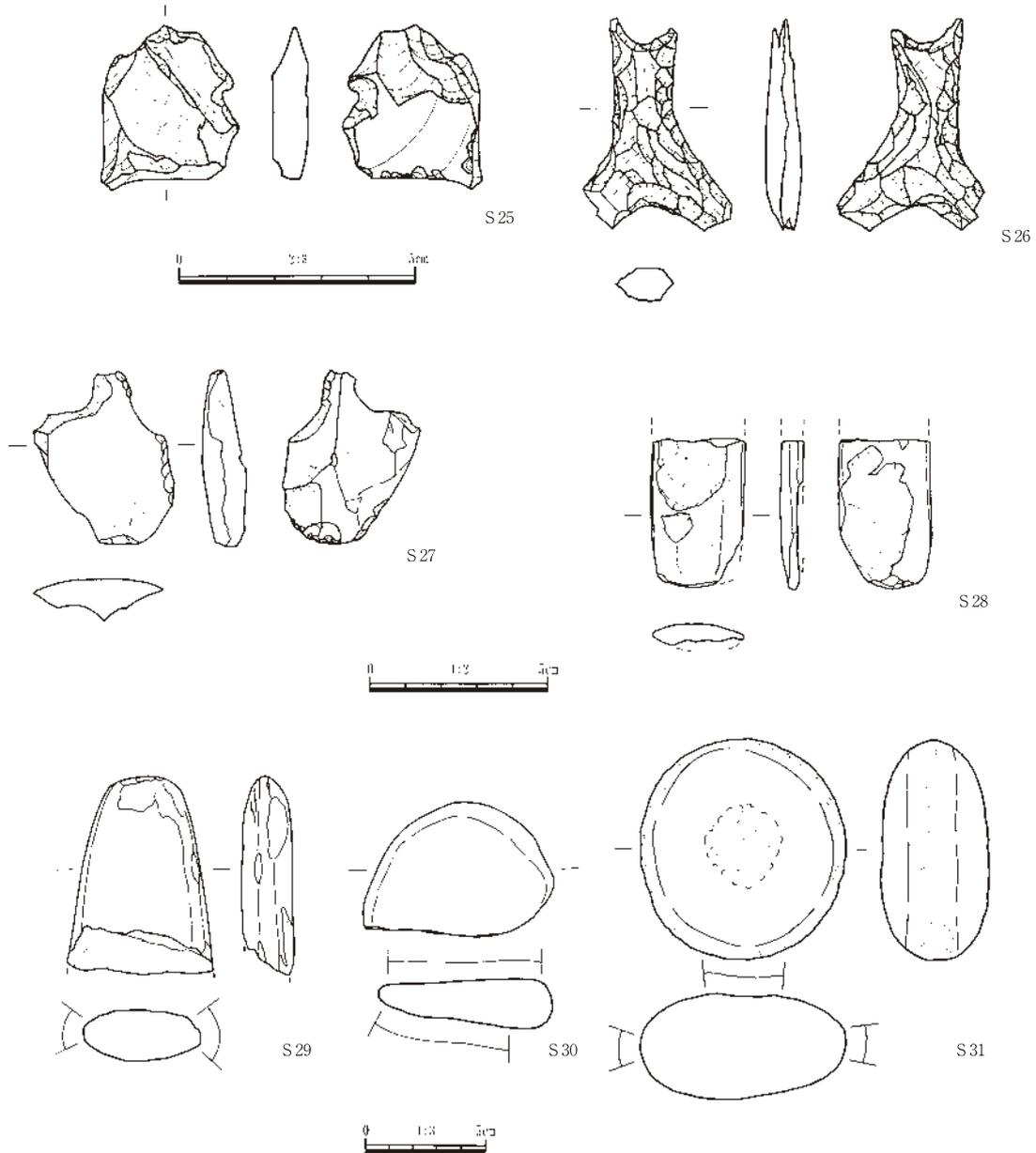
弥生土器鉢292は、椀状の深い体部に脚をもつものである。口縁部付近には連続した刺突文が施される。体部内外面はハケ目後ミガキが施される。



第96図 遺構に伴わない遺物



第97図 遺構に伴わない遺物



第98図 遺構に伴わない遺物

弥生土器高坏 294・295 は、有段の坏部を持つものと推定される。口縁端部は内方へ肥厚する。

弥生土器器台 296・297 は、大型の器台に復元できるもので、口縁部には凹線文・波状文により加飾される。

土師器甕 290 は、外反する単純口縁をもちやや球形の体部となるもので、体部外面はやや粗いタテ八ヶ後斜方向八ヶ目調整となる。頸部には2箇所の穿孔があり、吊り下げられていた可能性がある。

これらの遺物は、251～254・260・261・264・296・297は清水編年 - 1様式期、弥生時代中期後葉初頭に当たる。255・256・262・263・265は - 2様式期、弥生時代中期後葉中ごろ、266～272は - 3様式期、弥生時代中期後葉末ごろと考えられる。257～259・273～284・294・295は - 1様式期、弥生時代後期前葉ごろ、285～288は - 2様式期、弥生時代後期中葉、289は - 3様式期、弥生時代後期後葉ごろと考えられる。290は天神川 期、古墳時代前期前葉のものと考えられる。石器は、S 25～27は縄文時代、S 28・29は弥生時代のものである。

### 3 古代の調査

古代遺構面は、層（黒褐色土）を除去して検出した面である。

15区西側のJ9・10、K9・10グリッドで検出した段状遺構とそれに伴う掘立柱建物からなる。標高36.0～37.4m付近にあり、段状遺構は、緩やかに北東側へ傾斜する斜面部の地山ローム層を大きくL字状に加工したものである。北東側は中世段階の道路1・2によって大きく掘削されており、全形を留めていない。その平坦面に、掘立柱建物が位置的にはずれるものの、主軸をそろえて2基建てられている。しかし、掘立柱建物の間隔は1.5mしかなく、同時に並存していたものとは考えられない。おそらく、時期を異にしながら建て替えがあったものと考えられる。これらの遺構は、大半が南側遺構外へ延びており、正確な規模等は不明な点が多い。

伴う遺物は少ないが、掘立柱建物5のピット中で、平安時代ごろの須恵器坏が出土している。おそらく、これらの遺構は、平安時代ごろに造られたものと考えられる。

この他にも、段状遺構を覆う黒褐色土遺物包含層からは、平安時代の遺物の他に、白鳳期から奈良時代の須恵器類が比較的まとまって出土していることから、更に古い時期の遺構が周辺に存在している可能性は高い。

この時期の遺構は、門前上屋敷遺跡では初出のものである。従来欠落していた時期にも人間の営みを窺うことができる重要な資料である。

#### (1) 段状遺構・掘立柱建物・土坑

##### 段状遺構1・掘立柱建物5（第100・101図、P L.15・29）

15区J9・10、K9・10グリッドにあり、標高36.0～37.4mの緩やかな斜面部に立地する。北西には段状遺構2・掘立柱建物6が接している。

段状遺構1は、斜面部を高さ約60cm程度L字状に掘削し、平坦面を作り出している。南側は調査区外へ延びている。平坦面の幅は、約6m、長さは6m以上を測る。北東側は中世段階の道路1・2によって掘削されている。山側には幅30cm前後、深さ10cm前後の溝が掘り込まれている。また、掘立柱建物5の身舎内にあたる部分に、方形又は直線状の溝が掘り込まれている。溝の性格については不明な点が多い。

出土遺物はない。

掘立柱建物5は、段状遺構1の平坦面上で検出されたもので、梁行2間（2.9m）桁行3～4間（4.7m）と推定される建物である。主軸方向はN-43°-W、柱間は梁方向1.4～1.6m、桁方向は1.0～1.4mと小型の建物である。柱穴規模は、径33～60cm、深さ22～57cmを測る。柱痕等は検出することができなかった。

出土遺物はP14内から須恵器坏313が出土している。

出土遺物から、平安時代末ごろに作られたものと考えられる。性格は不明である。（牧本）

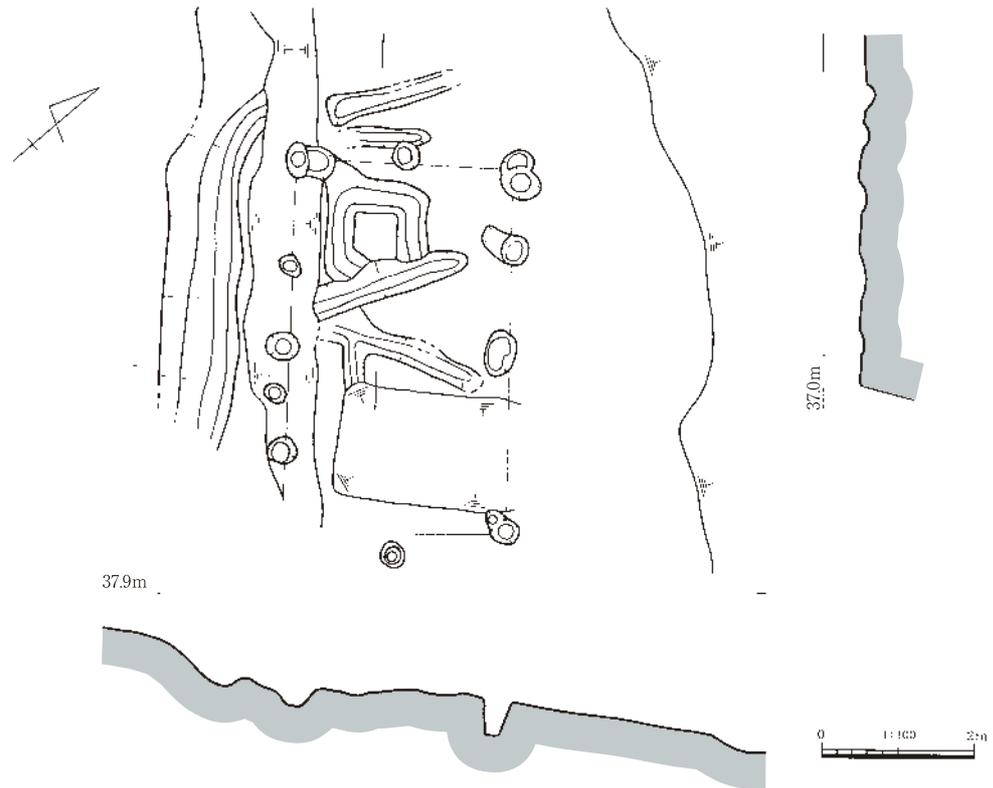
##### 段状遺構2・掘立柱建物6（第102・103図、P L.15）

15区J9・10、K9・10グリッドにあり、標高36.0～37.4mの緩やかな斜面部に立地する。南東には段状遺構1・掘立柱建物5が接している。

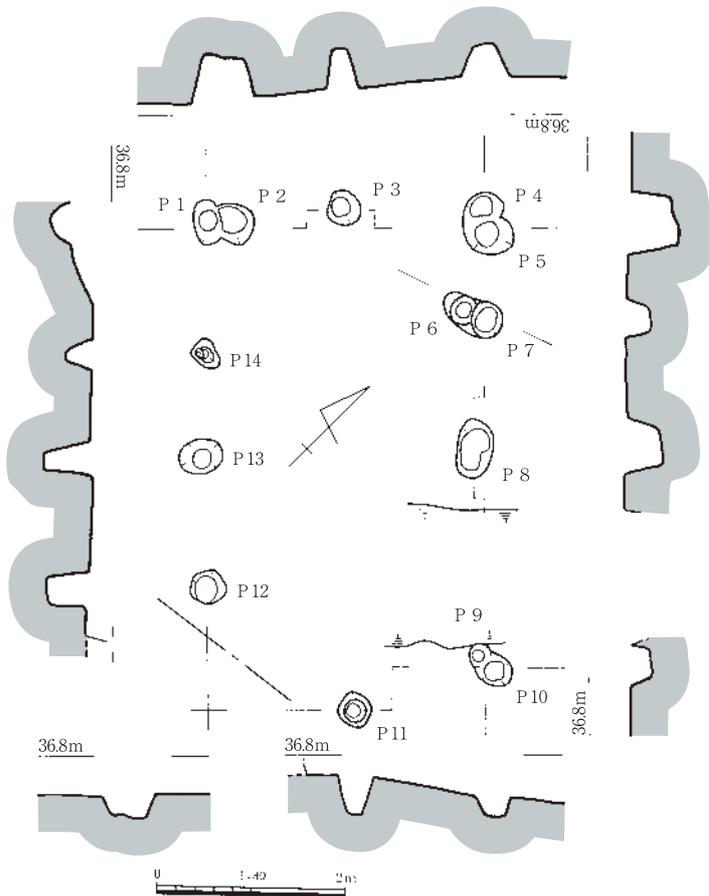
段状遺構2は、段状遺構1と同一平坦面上にあり、同じく斜面部を高さ約60cm程度L字状に掘削し、



第99図 遺構配置図(古代)



第100図 段状遺構 1



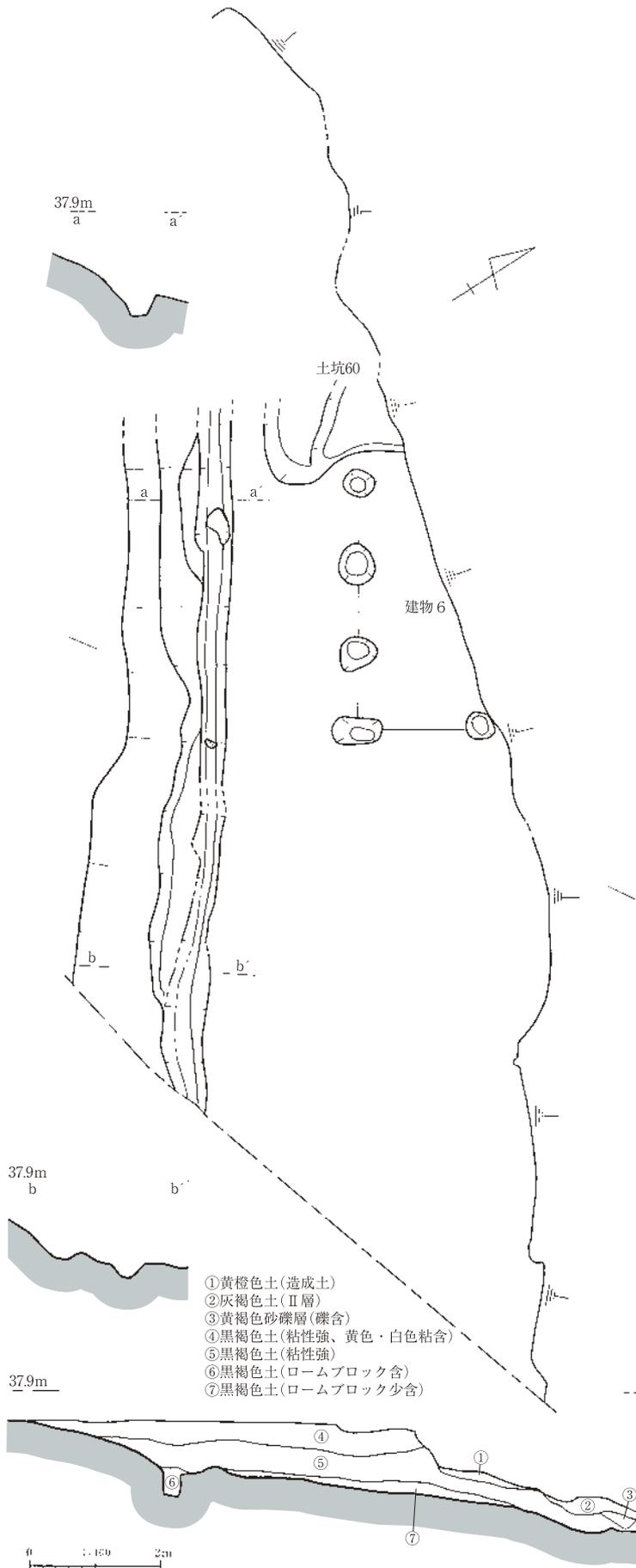
平坦面を作り出している。南側は調査区外へ延びている。平坦面の幅は、約 5 m、長さは 11 m 以上を測る。北東側は、中世段階の道路 1・2 によって掘削されている。山側には幅 32 ~ 45 cm、深さ 20 ~ 36 cm の溝が直線的に掘り込まれている。

伴う出土遺物はない。

掘立柱建物 6 は、段状遺構 2 の平坦面上で検出されたもので、梁行 1 間 (1.8 m) 以上、桁行 3 間 (3.9 m) 以上と推定される建物である。主軸方向は N -34 ° - W、柱間は桁方向



第101図 掘立柱建物 5 ・ 出土遺物



第102図 段状遺構2

1.2 ~ 1.3 mである。柱穴規模は、径 42 ~ 73 cm、深さ 32 ~ 53 cm を測る。柱痕等は検出することができなかった。

伴う出土遺物はない。

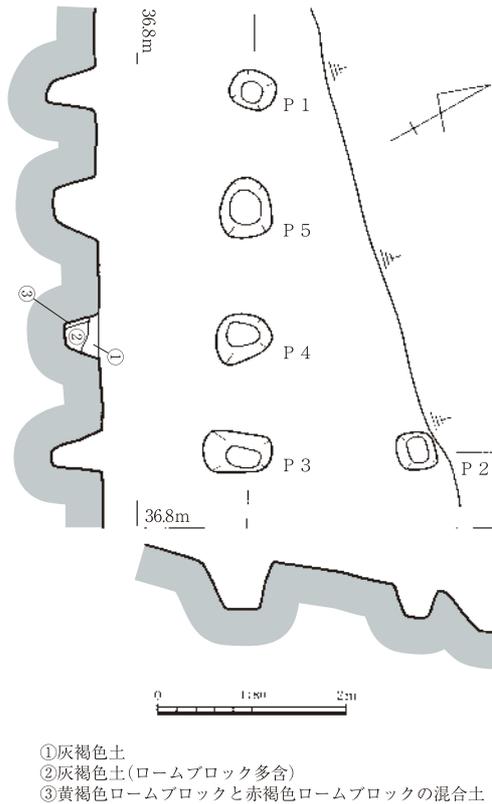
伴う出土遺物がないため、正確な時期は不明であるが、同一面で検出された段状遺構1・掘立柱建物5が平安時代ごろのものであることから、当遺構についても同様の時期のものと考えられることができる。ただし、掘立柱建物5と6は1.5 mしか離れていないため、同時に並存していたものではなく、複数期にわたって建て替えされたものと考えられる。性格は不明である。

土坑60(第104図)

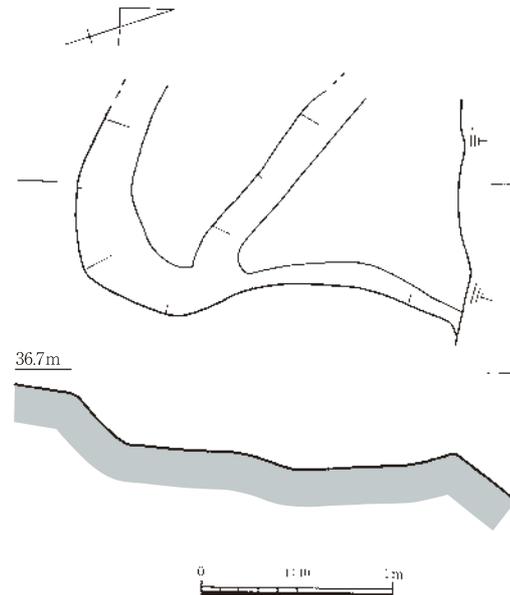
15区J10グリッドにあり、層(黒褐色土)を除去した後、に検出することができた。段状遺構2の北西にあり、平坦面を掘り込んでいる。

平面は不整形で、長軸 2.0 m 以上、短軸 1.6 m 以上、深さ 29 cm を測る。段状に掘り込んでいる。埋土は黒褐色土単層である。

出土遺物がなく正確な時期は不明であるが、段状遺構1・2と同一面で検出したことから、平安時代ごろのものと考えられる。性格は不明である。



第103図 掘立柱建物6



第104図 土坑60

#### 段状遺構1・2出土遺物（第105・106図、P L.29・32）

ここでは、段状遺構1・2を覆う層（黒褐色土）中で出土した遺物についてについて触れる。

図化した遺物は、土師器坏314・315、高坏316、甕317～323、須恵器坏324～333・335～352、坏蓋334、壺353、高坏354、甕355、横瓶356である。

これらは、奈良時代から平安時代のものが混在している。

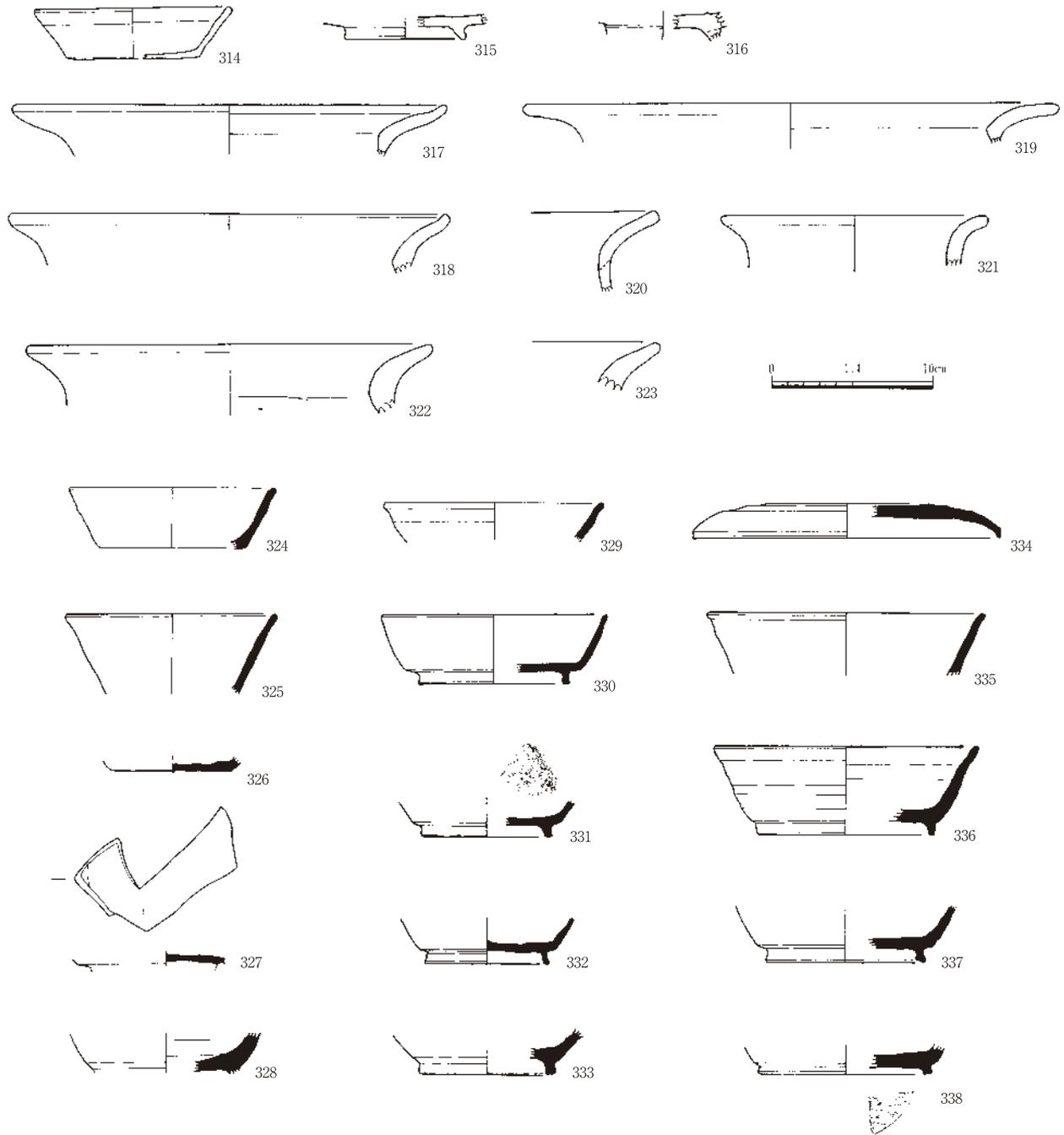
土師器坏314は、内外面赤彩され底部押圧したもので、315は高台がつくものである。土師器甕317～323は、やや薄手で外反する口縁部をもつ。これらは、伯耆国庁第2様式ごろのものと考えられ、平安時代半ばごろのものと考えられる。高坏316もこの時期に属するものと思われる。

同時期の須恵器坏は、平底で直線的に外傾する体部となるもの（324～327）である。327の底部内面には、十字状のヘラ記号をもつ。形状は不明であるが、壺353も内外面ナデ調整となることから、同時期になるものと思われる。

これらの遺物が、段状遺構1・2、掘立柱建物5・6の時期を示しているものと考えられる。

奈良時代の須恵器類のうち、坏はやや内湾する体部に高台をもつもの（328～333・335～338）と椀形の体部をもち回転糸切りの平底のもの（339～352）である。高台をもつもののうち335・336は、体部が直線状に立ち上がるようになり、やや新しい様相が窺われる。

また、蓋334はかえりが消失し屈曲する口縁部となるものである。甕355は外反する口縁部をもつもので、外面平行叩き後ナデ調整される。横瓶356は体部片で、外面平行叩き、内面同心円状の当具痕が残る。



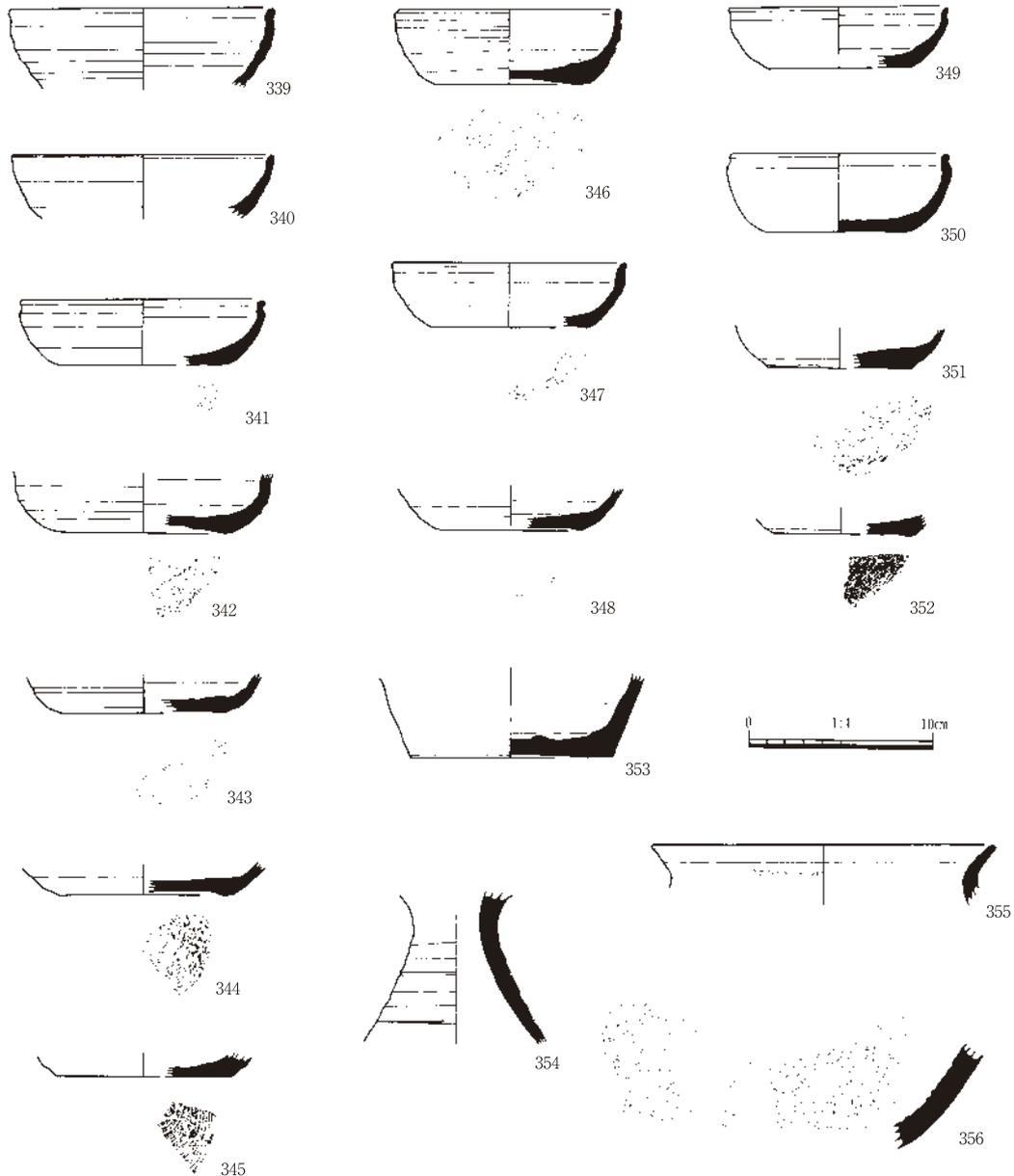
第105図 段状遺構1・2出土遺物

(2) 遺構に伴わない遺物について(第107図、P.L.29・30・32)

出土層位のこだわらず、調査区全体から出土している古代の様相をもつ出土遺物について触れることとする。

土師器甕 357 ~ 360 は外反する口縁部をもつものである。357 は厚手で内面の屈曲が明瞭であることから奈良時代に遡るものと考えられる。358 ~ 360 は、薄手で屈曲もにぶくなり、特に 360 は口縁端部がつままれており、平安時代ごろのものと考えられる。

須恵器坏蓋 361 は、古墳時代以来の小型のもので、白鳳期ごろのものと考えられる。362 はかえりがつくもので、奈良時代ごろのものと考えられる。



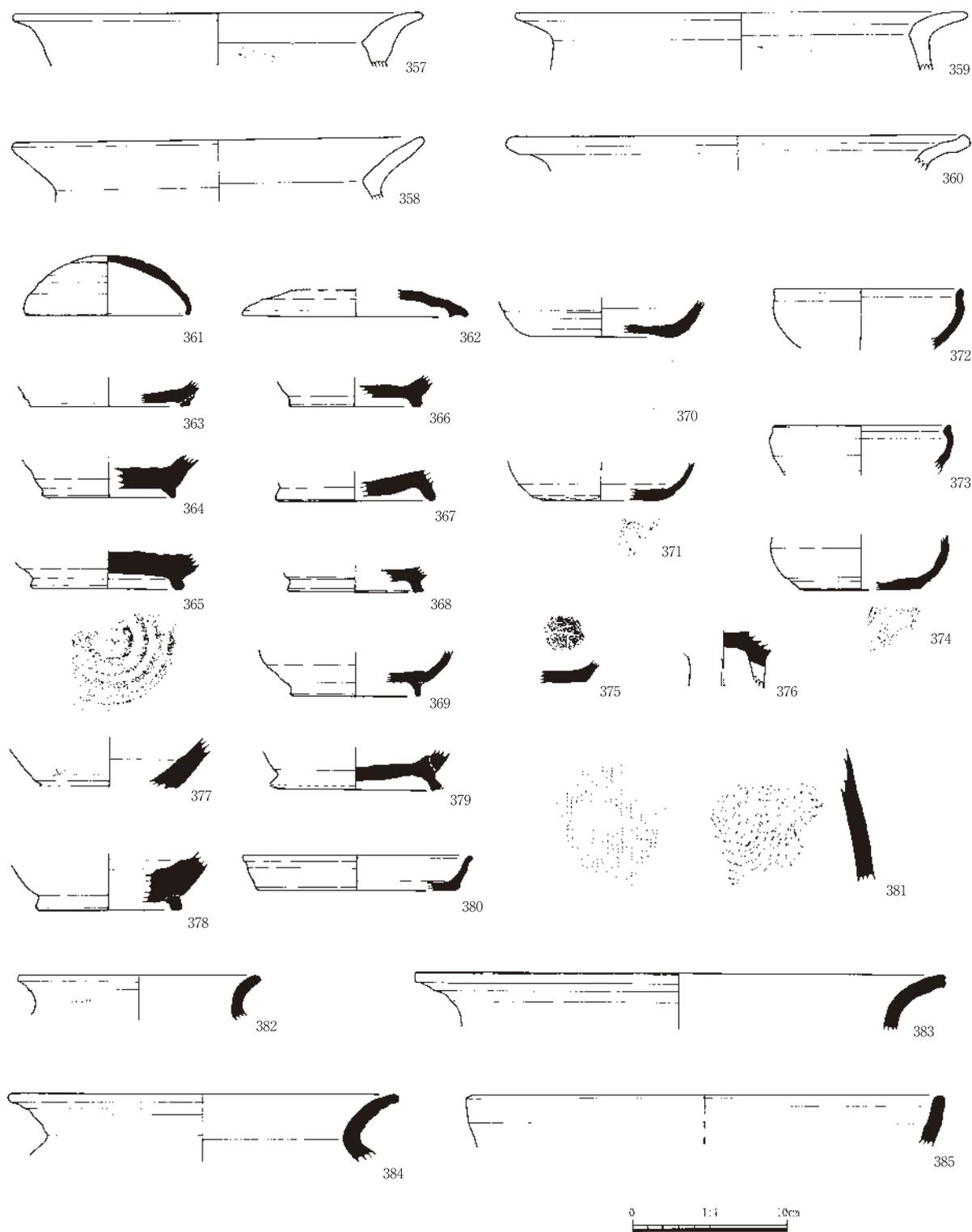
第106図 段状遺構1・2出土遺物

須恵器坏 363・366～369 は、高台をもつものである。坏 370～375 は、椀形の体部に回転糸切りの底部をもつもので、奈良時代のものと考えられる。375 は、底部内面に線刻が施される。

須恵器高坏 376 は、筒部に切れ込みによる形骸化した透かしを2箇所もつ。奈良時代のものと考えられる。

須恵器壺 364・365・377～379 は、底部の破片で高台をもつものである。364 は高台が三角形状になりやや新しい様相をもつもので、平安時代ごろのものであろう。その他のものは奈良時代ごろのものか。須恵器甕 381 は、外面平行叩き、内面は同心円状の当具痕が残る。鉢 285 は、椀状の体部をもつものと推定される。これらは、奈良時代のものである。

須恵器皿 380 は直線的に立ち上がる体部をもち、須恵器壺 382・383、甕 384 は、外反する口縁部をもつ。383 外面には鉄釉が塗布される。これらは、平安時代ごろのものと考えられる。



第107図 遺構に伴わない遺物

#### 4 中世（造成以前）の調査

14・15区の中世遺構面は、大きく造成前と造成後に分けることができる。

さらに、造成前は調査段階では層（黒褐色土）除去後の掘立柱建物等検出面、田畠耕作土除去後の耕作痕検出面、造成土直下の田畠検出面に分けることができる。

掘立柱建物等検出面では、掘立柱建物7～11、柵列4・5、土坑62～64、道路1・2を検出している。検出面は、ローム及びAT層上面であるが、柱穴出土遺物などから、本来は層ないし層から掘り込まれたものと考えられる。出土遺物から14～15世紀ごろのものと考えられる。

掘立柱建物7はやや規模が大きいものと推定されるが、調査区外へ延びており、詳細は不明である。掘立柱建物8～11は、小規模なもので重複しながら建て替えられたものと推察され、短期間に建て替えが行われるべきものであったと考えられる。この一角には更に多くの建物があった可能性はある。

隣接する門前鎮守山城跡では、石組井戸・石敷き遺構や石蓋暗渠などが同時期のものと考えられ、集落を構成する家屋等の施設が作られている。その後、集落が廃絶すると耕作地に転換している。

耕作痕検出面では、耕作痕4、溝29～31を検出している。田畠の耕作土を除去した後に検出したもので、造成土直下の田畠耕作以前にも、耕作が行われていた可能性がある。

田畠検出面では、水田1・2、畠1～3を検出している。造成土によって一気に埋められており、遺存状態は良好である。これらは、緩やかに傾斜する斜面部を段状に加工して作られている。基盤層は、層（灰褐色土）である。

水田はいずれも一辺10m前後の小型の区画である。水田1の南西畦で、偶蹄目の足跡が検出されている。大きさからすると、おそらく牛の足跡と考えられ、労働力として牛の使用が窺われる。

畠は区画があまり明瞭ではないが、それぞれ溝によって区画されている。畠2は畝、畝間が明瞭に残っているが、畠1・3は畝間のみ検出され、遺存状態は良好ではない。

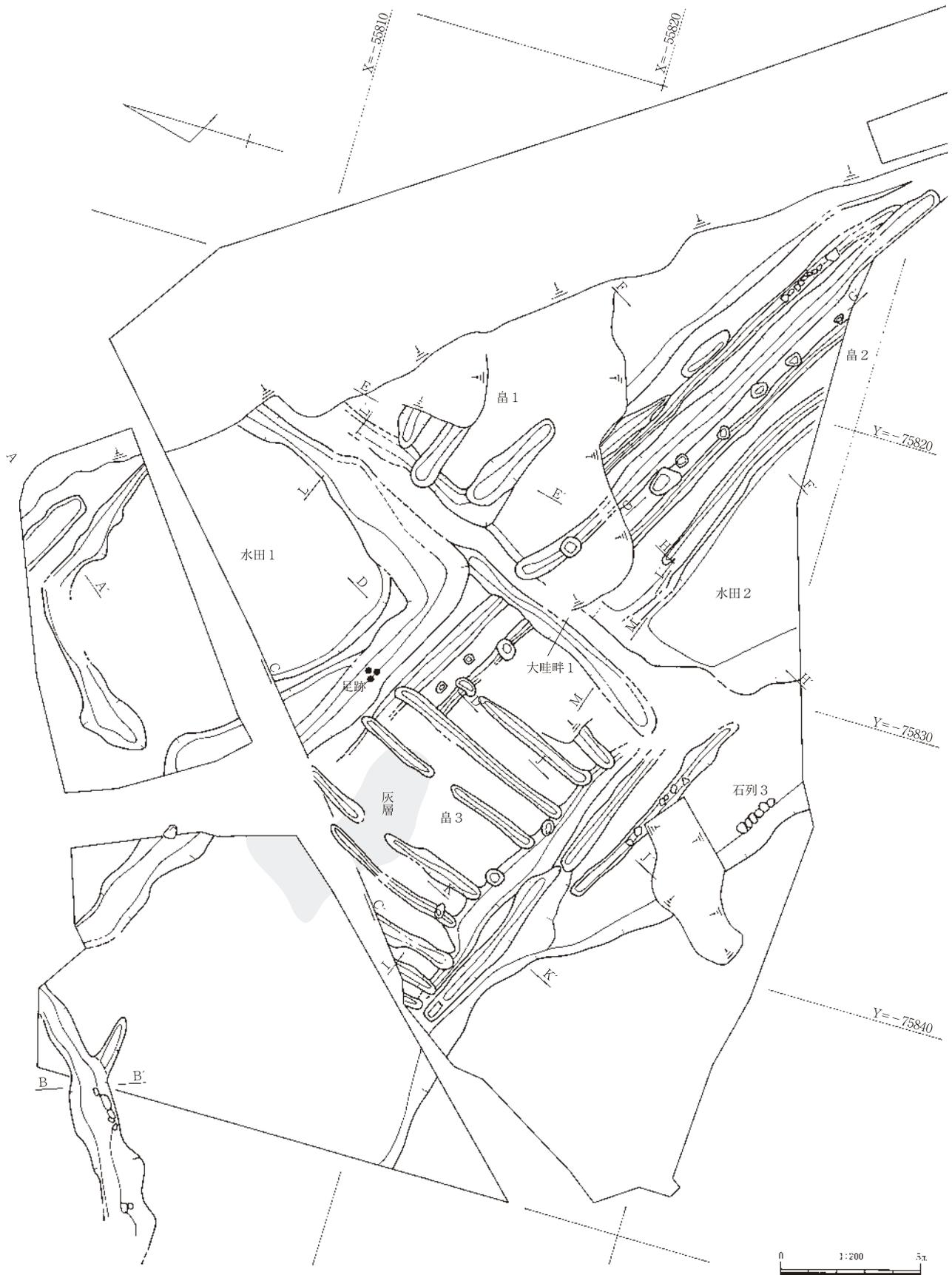
これらは、同時に作られたものではなく、遺存状態の悪い畠1・3は、この中でも早い段階に放棄された可能性がある。また、大畦を挟んで畠1・2と畠3の畝方向が異なっており、耕作者の違いなどが反映していたものと考えられる。

水田、畠の土壌分析の結果、水田からは5,900個/gと多量のイネのプラント・オパール、イネ花粉が検出されており、水稻耕作が行われていたことは確かである。また、畠でもイネのプラント・オパールが高率で検出されているが、これらは稲作の結果ではなく、施肥等で稲藁等が使用されていた可能性もある。さらに、畠3で検出された炭化物面ではムギのプラント・オパールが1,500個/gと低率ながらも検出されており、周辺でムギの栽培も行われていたものと考えられる。その他、ソバ、アブラナ科などの花粉も検出されており、これらが栽培されていた可能性もある。

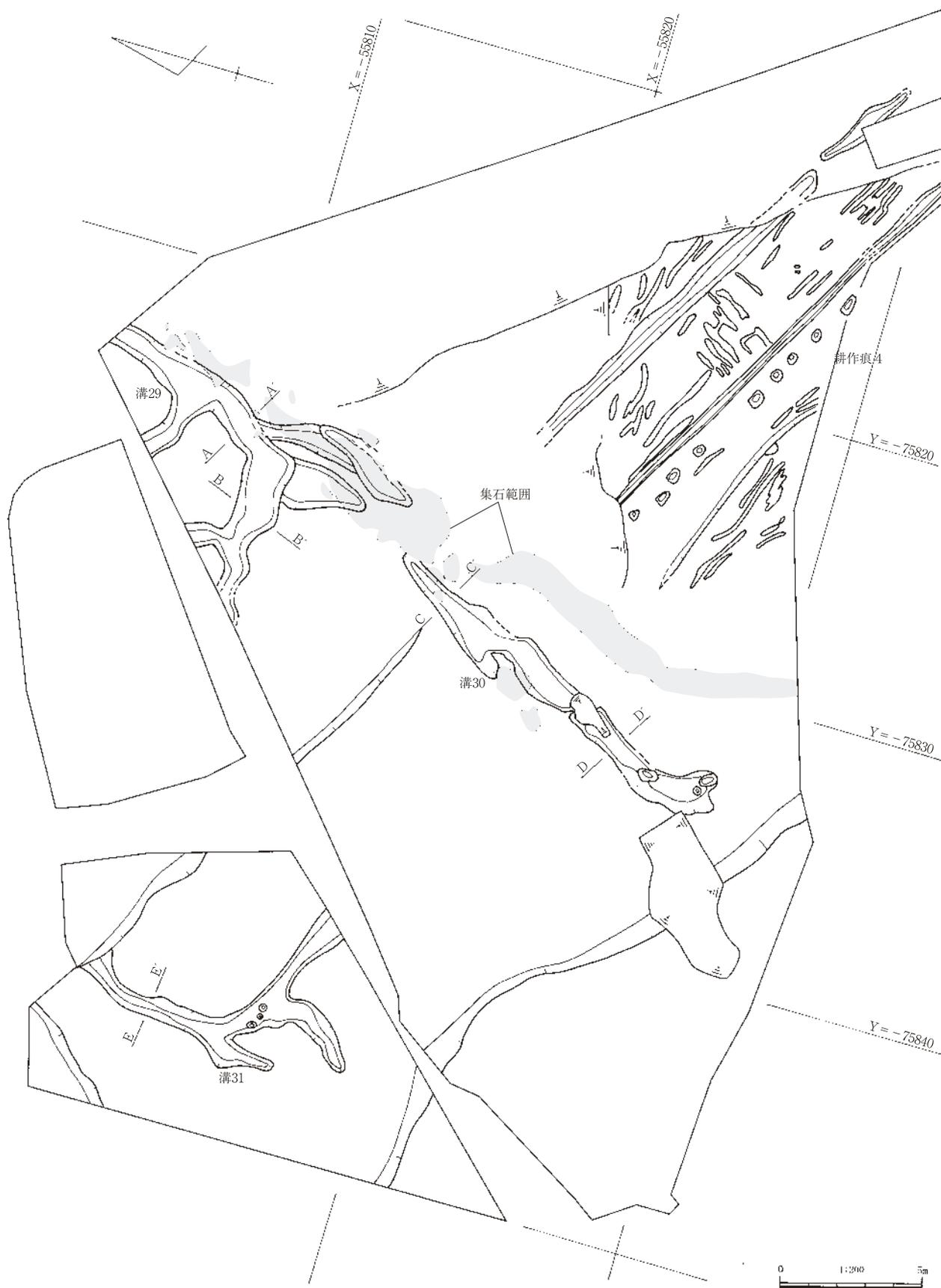
出土遺物には、明瞭なものはないが15世紀ごろのものと考えられる。



第108図 遺構配置図(中世・造成以前)



第109図 遺構配置図(中世・造成以前)



第110図 遺構配置図（中世・造成以前）

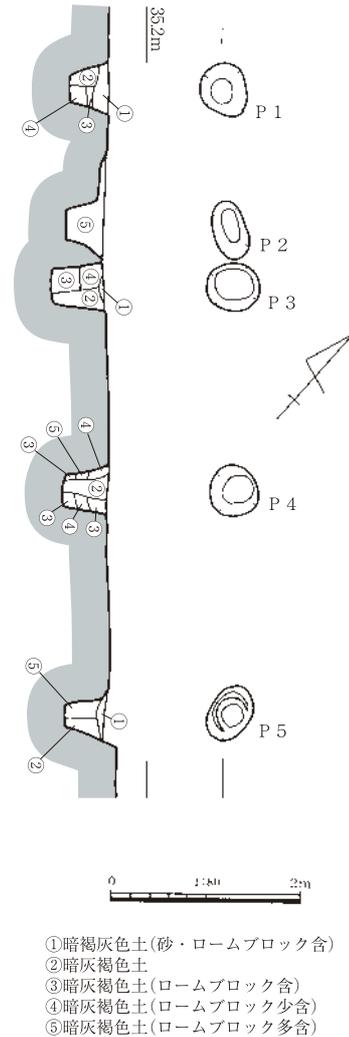
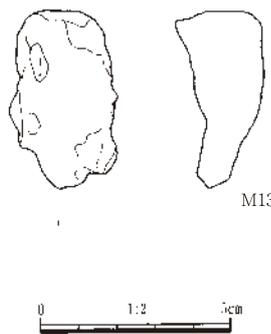
(1) 掘立柱建物・柵列

掘立柱建物7 (第108・111図)

15区H8、I7・8グリッドにあり、黒褐色粘質土層を除去した後に、ソフトローム二次堆積層上で検出したものである。本来の掘り込みは、後述する15世紀代の田畠耕作土である灰褐色粘質土(8・9層)以下、黒褐色粘質土層以上の間であったと考える。南東側1mには、中世墓である土坑61、南西側0.8mには、柵列4がある。

4基からなる側柱列を検出したのみであるが、いずれの柱穴も柱痕が認められ、柱穴の規模も径56～60cm、深さ41～54cmとしっかりしていることから、掘立柱建物と推定した。大半は、調査区東側の町道下に延びているものと考えられる。復元される建物の規模は、桁行3間(6.6m)である。梁行は不明である。

出土遺物には、P4内で椀形鍛冶滓M13が出土している。正確な時期は不明であるが、層位的には14～15世紀代と考えられる。



- ① 暗褐灰色土(砂・ロームブロック含)
- ② 暗灰褐色土
- ③ 暗灰褐色土(ロームブロック含)
- ④ 暗灰褐色土(ロームブロック少含)
- ⑤ 暗灰褐色土(ロームブロック多含)

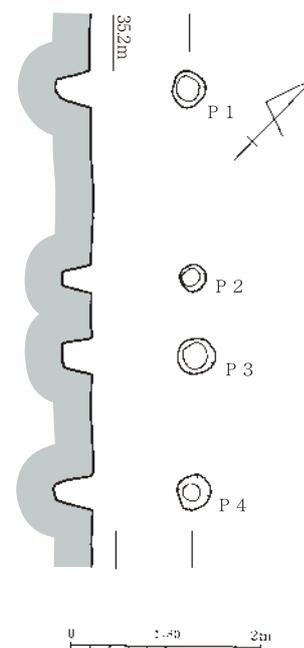
第111図 掘立柱建物7・出土遺物

柵列4 (第108・112図)

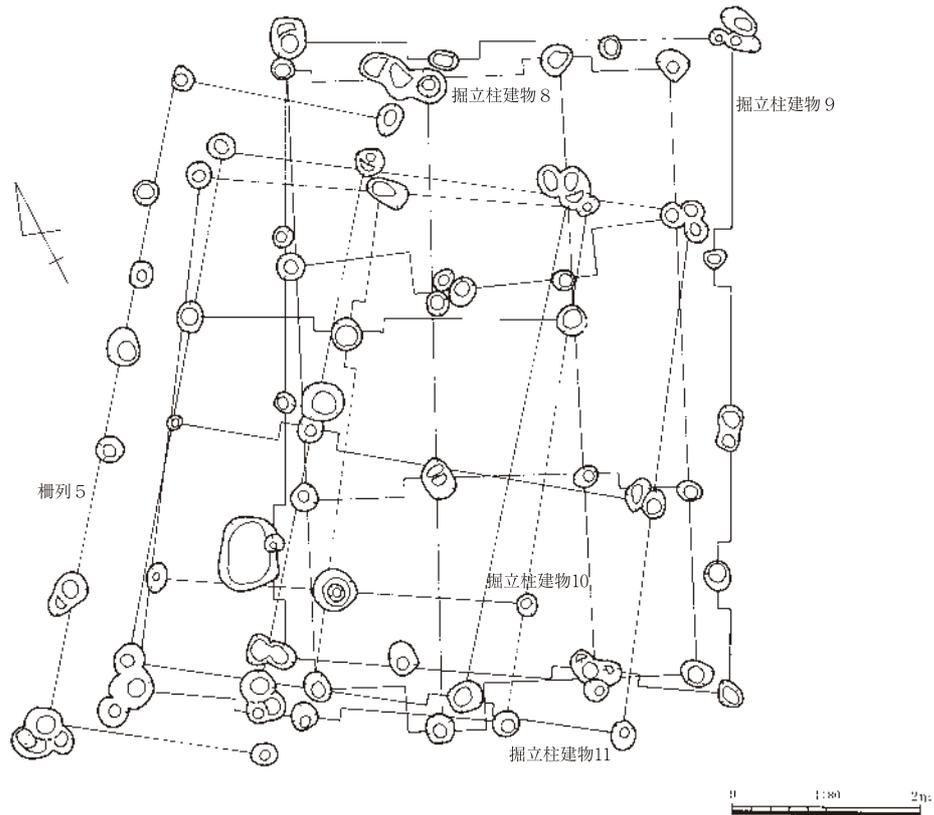
15区I7・8グリッドにあり、黒褐色粘質土層を除去した後に、ソフトローム二次堆積層上で検出したものである。本来の掘り込みは、後述する15世紀代の田畠耕作土である灰褐色粘質土(8・9層)以下、黒褐色粘質土層以上の間であったと考える。北東側0.8mには、掘立柱建物7がある。

4基の柱穴列からなる。柱痕等は認められなかった。柱穴径は28～38cm、深さ31～41cmを測る。掘立柱建物7に平行するものの、間隔が狭く伴うものとはいえない。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、層位的には14～15世紀代と考えられる。



第112図 柵列4



第113図 掘立柱建物8～11・柵列5

掘立柱建物8～15・柵列5（第113～118図）

15区北西側の9・10、J9・10グリッドにあり、層（黒褐色粘質土層）を除去した後に、A層又はソフトローム層上で検出したもので、多数のピットが集中して見られた。これらの遺構の本来の掘り込みは、後述する15世紀代の田畠耕作土である灰褐色粘質土（層）以下の黒褐色粘質土層中であつたと考える。

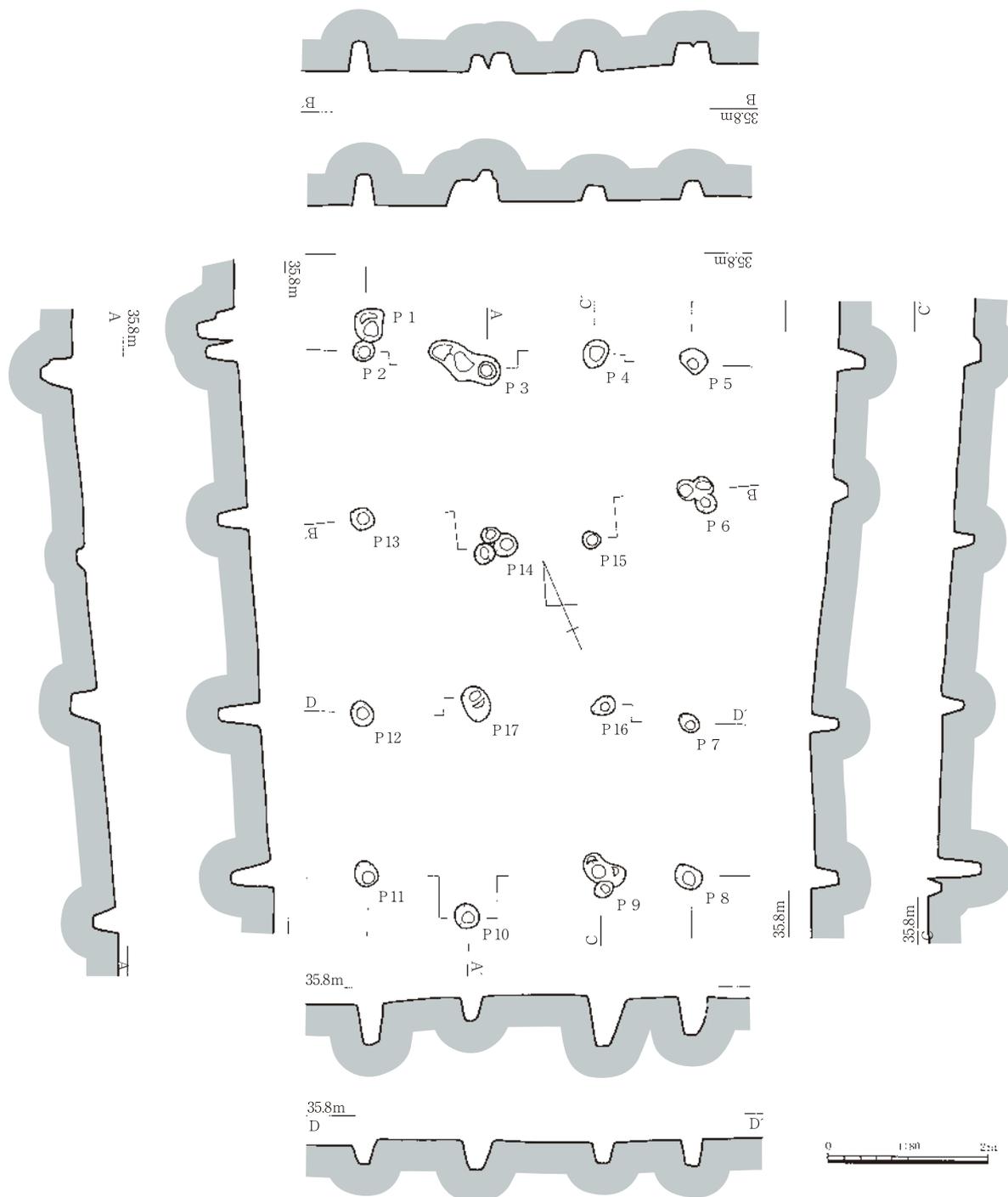
現地調査の段階では建物の存在の可能性は考えていたものの、明確な並びを捉えることができなかったため、図上で復元を試みたものである。特に、柱穴の深いものを抽出しながら並びを復元したものである。その結果、重複しながら建て替えがあつたと推定される掘立柱建物4基、柵列1基を復元した。しかし、これらの建物に関わるピットの他にも、多数のピットがあり、更に別の建物ないしは柵列等の附属する施設を復元できる可能性は高い。

掘立柱建物8は、梁行3間（4.0m）、桁行3間（5.8m）を測る総柱建物と推定したものである。床面積は、約23㎡となる。

主軸方向はN-23°-Eである。柱間は、梁方向が1.1～1.5m、桁方向が1.5～3.0mである。柱間は不揃いで、柱筋は通っておらず、特に南側梁筋は一直線にならない。柱穴径は、30～40cm程度、深さ12～62cmを測る。柱痕等は確認できなかった。

伴う出土遺物は確認できなかった。

掘立柱建物9は、梁行3間（4.7m）、桁行（6.5～6.8m）を測る側柱のみで構成される建物と推定したものである。床面積は、約30㎡である。

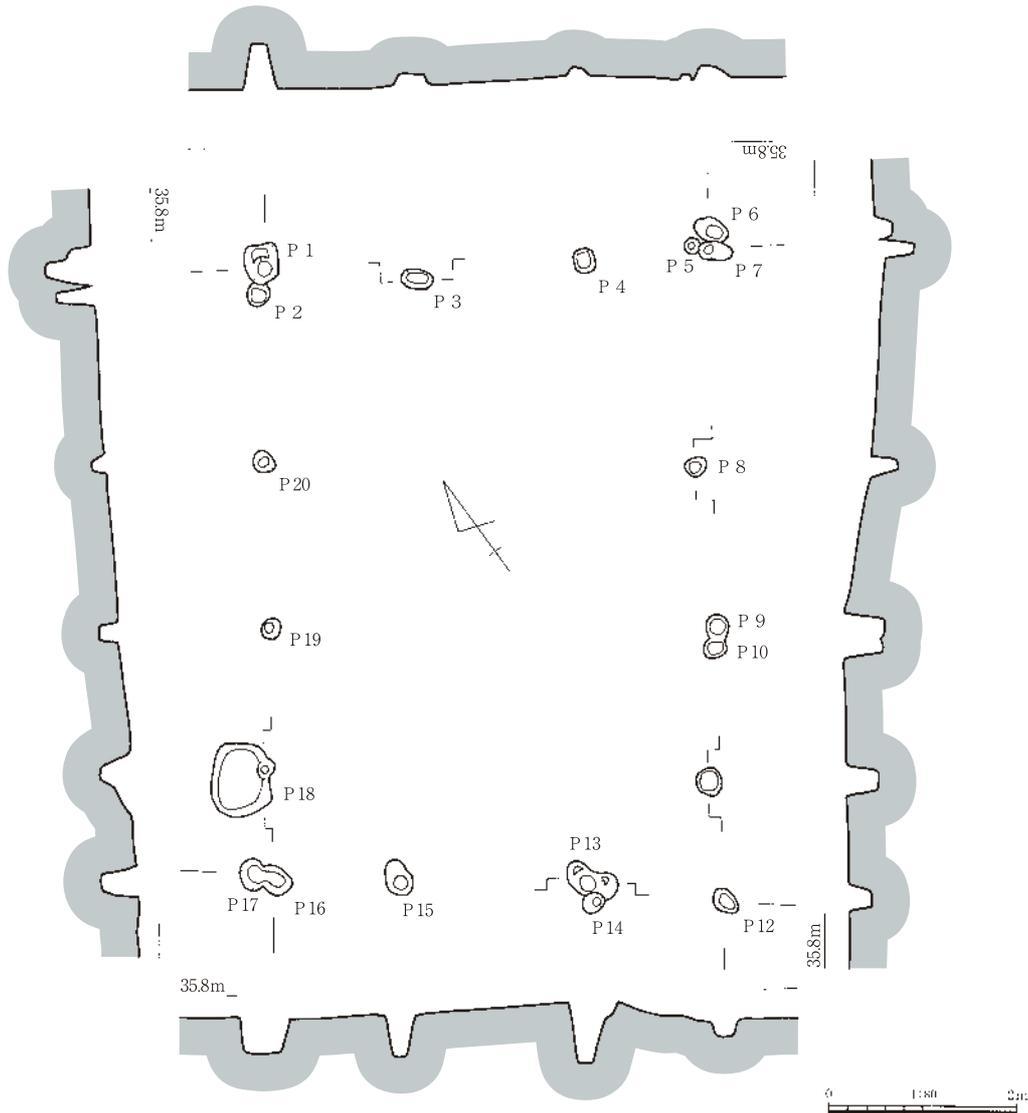


第114図 掘立柱建物 8

主軸方向はN -28° - Eである。柱間は、梁行 1.3 ~ 2.0 m、桁行 1.2 ~ 2.3 mである。南側桁方向の柱間は狭くなっている。柱間は不揃いで、柱筋も通っていない。柱穴径は、22 ~ 40cm、深さ 10 ~ 65cmを測る。柱痕等は確認できなかった。

伴う出土遺物は、確認できなかった。

掘立柱建物 10 は、梁行 2 間 (3.9 m)、桁行 3 間 (5.5 ~ 5.7 m) を測る総柱建物と推定したものである。床面積は、約 21m<sup>2</sup>である。



第115図 掘立柱建物9

この場合、主軸方向はN -33° - Eとなる。柱間は、梁方向が1.8 ~ 2.1 m、桁方向が1.2 ~ 3.0 m、棟方向が1.4 ~ 2.7 mである。

こうした場合、他の掘立柱建物と主軸方向がずれること、南北端の桁行きが狭くなっていることもあり、庇を持つN -57° - Wに主軸方向がある1間×2間の建物の可能性もある。

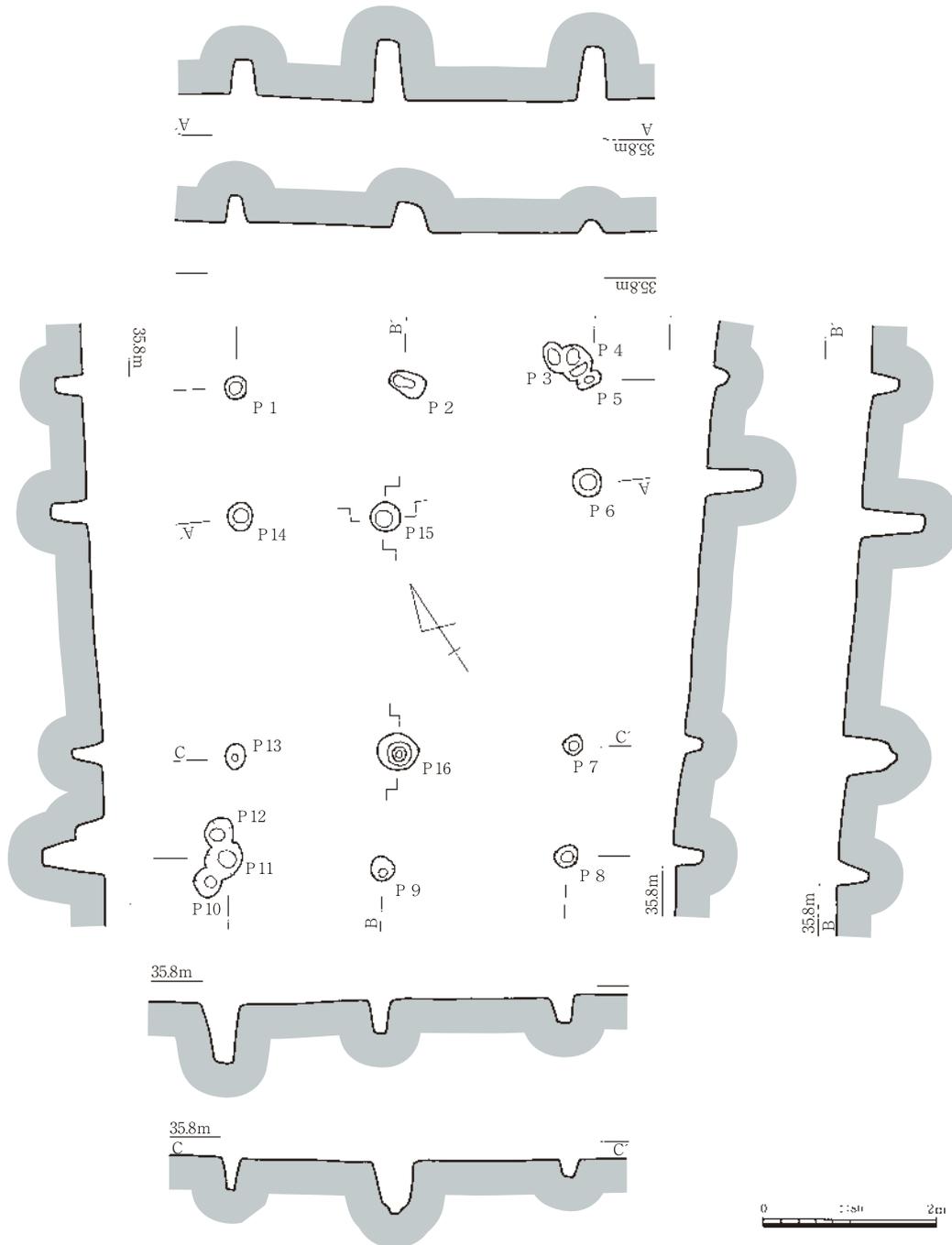
柱間は不揃いである。柱穴径は、30 ~ 47cm、深さ20 ~ 71cmを測る。柱痕等は確認できなかった。

伴う出土遺物は確認できなかった。

掘立柱建物11は、梁行2間(5.6 ~ 5.8 m)、桁行3間(5.0 ~ 5.3 m)を測る総柱建物と推定したものである。床面積は、約28㎡である。他の建物とは異なり、梁行が長くなる幅広の建物である。

主軸方向は、N -56° - Wである。柱間は、梁方向が2.4 ~ 3.1 m、桁方向が1.3 ~ 2.1 mである。棟方向で欠落する柱穴は、土坑56上にあったものと推定する。他の建物同様やはり、柱間は不揃いである。柱穴径は、17 ~ 37cm、深さ18 ~ 67cmを測る。柱痕等は確認できなかった。

P 64 内で白磁皿 386 が出土している。

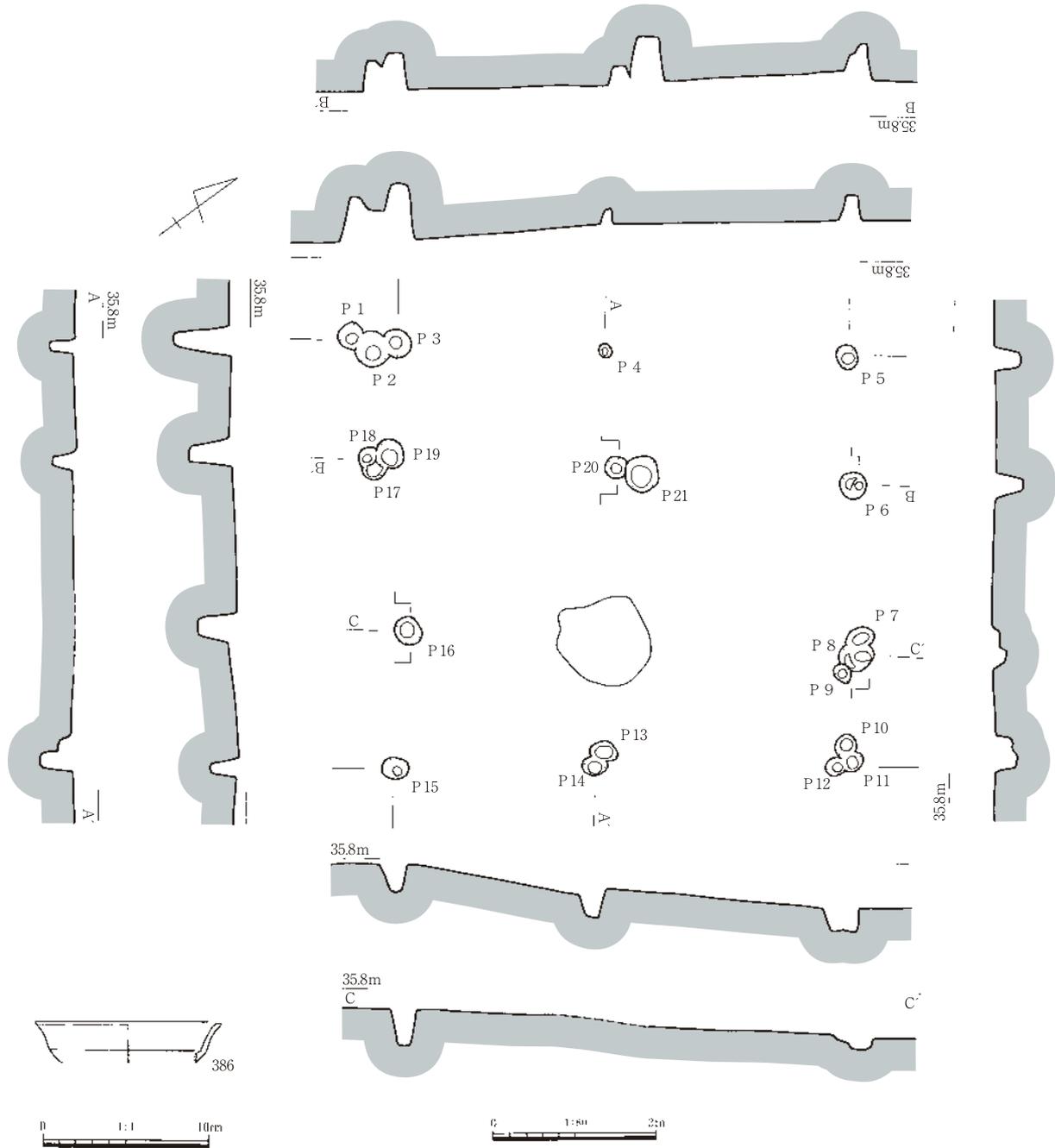


第116図 掘立柱建物10

柵列5は、上記掘立柱建物群の西側にあり、コ字状の9本の柱配列を復元したものである。南北辺7.0mを測り、両端から東へ2.2～2.3m直角に折れる。柱穴間距離は、0.8～1.6mとまばらである。掘立柱建物11に平行するが、間隔が80cmしかなく近接しすぎるため、伴うものとはいえない。掘立柱建物の柱筋の可能性もあるが、明確ではない。柱穴径は、27～40cm、深さ12～63cmを測る。

P9内で土師器小皿387が出土している。

これらの掘立柱建物、柵列に伴う遺物は極めて少ない。386は内面見込みに段を有すもので白磁皿類に分類できる。387は回転糸切り底をもつもので、中森編年によれば14世紀ごろのものと考え



第117図 掘立柱建物11・出土遺物

られる。これらが建物の時期を示すものであり、およそ13世紀後半から14世紀半ばごろの遺構と推察される。

また、これら建物の性格であるが、規模的にはいずれも小型で柱穴の規模も小さく、いずれの建物も柱筋が通らないこと、短期間に重複している状況などからすると、簡素な構造で頻りに建て替えが必要な建物であったと考えられる。

(2) 土坑

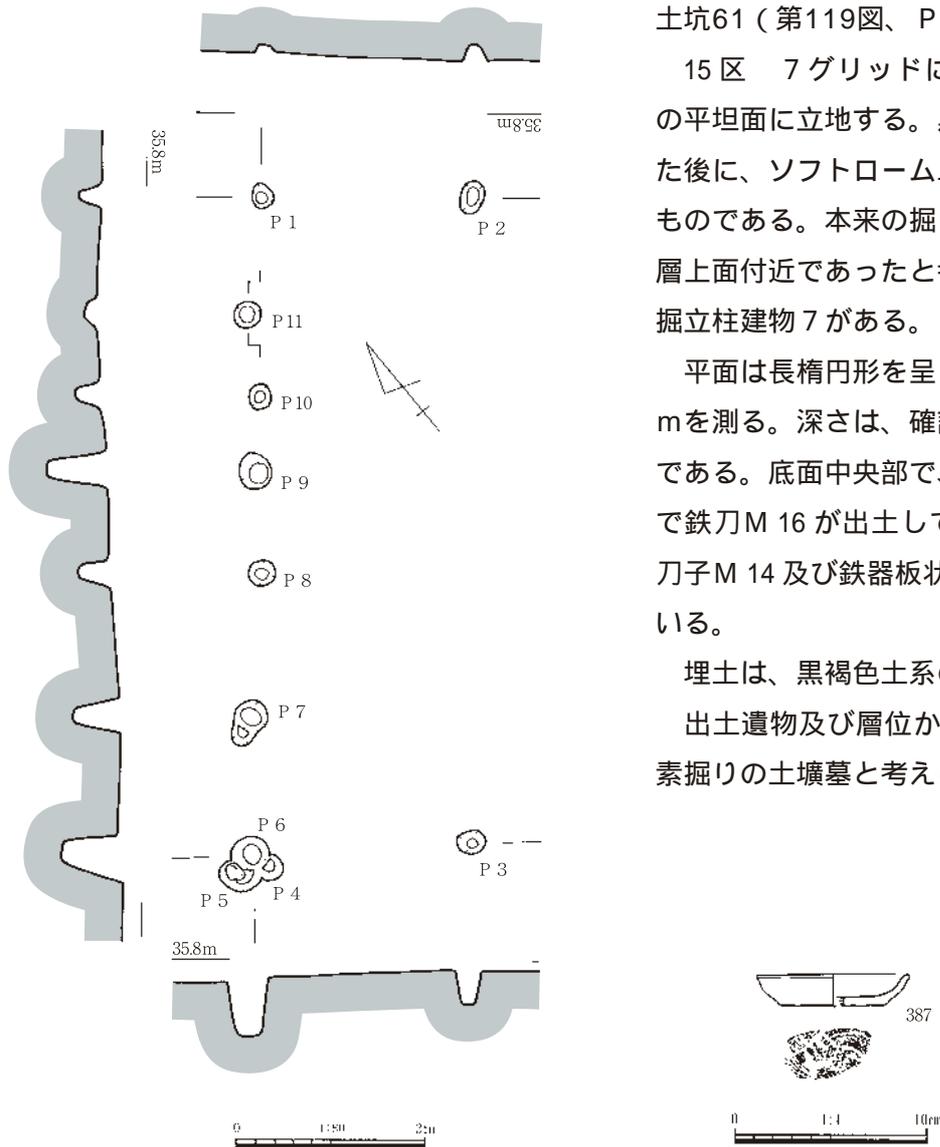
土坑61 (第119図、P L.15・44)

15区 7グリッドにあり、標高 34.6 m 付近の平坦面に立地する。黒褐色粘質土層を除去した後に、ソフトローム二次堆積層上で検出したものである。本来の掘り込みは、黒褐色粘質土層上面付近であったと考える。北西側 1 m には、掘立柱建物 7 がある。

平面は長楕円形を呈し、長軸 1.32 m、短軸 0.65 m を測る。深さは、確認できた範囲では約 5 cm である。底面中央部で、切先を西に向けた状態で鉄刀 M 16 が出土している。この刀には別の刀子 M 14 及び鉄器板状不明品 M 15 が付着している。

埋土は、黒褐色土系のものが単層で入る。

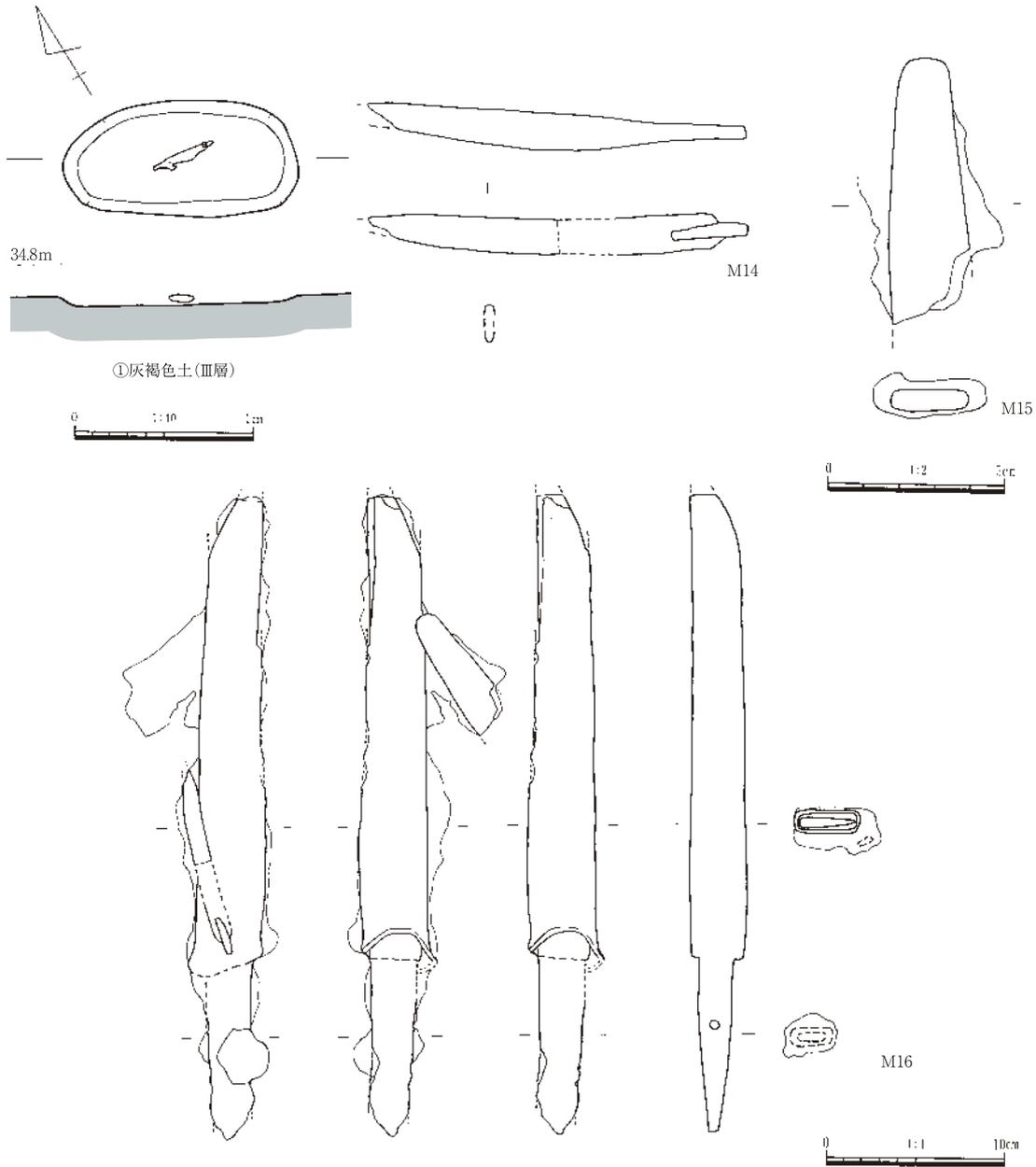
出土遺物及び層位から、12 ~ 13 世紀ごろの素掘りの土坑墓と考えられる。



第118図 柵列5・出土遺物



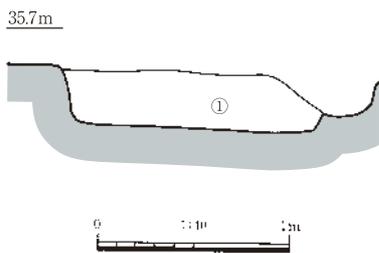
文中写真1 掘立柱建物8~11・柵列5



第119図 土坑61・出土遺物

土坑 62 (第 120 図)

15 区 J 8 グリッドにあり、標高 35.2 m 付近の平坦面に立地する。黒褐色土上面で検出したもので、断面のみで確認されたものである。南西側 0.5 m には、土坑 63 がある。



①黒褐色土(灰褐色ブロック多含)

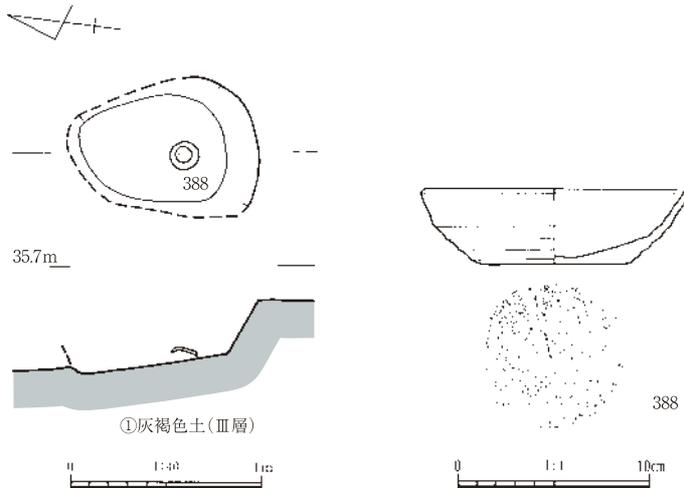
第120図 土坑62

平面は長楕円形を呈すものと考えられる。正確な規模は不明であるが、長軸 1.35 m、深さ 30cm を測る。

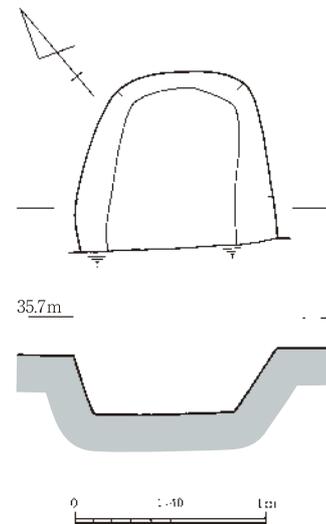
埋土は、黒褐色土系のものが単層で入る。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、検出層位から、12 ~ 13 世紀ごろのものと考えられる。

土墳墓の可能性もあるが、性格は不明である。



第121図 土坑63・出土遺物



第122図 土坑64

土坑63 (第121図、P L.30・31)

15区J 8グリッドにあり、標高 35.3 m 付近の平坦面に立地する。黒褐色土上面で検出したものである。北東側 0.5 m には、土坑 62 がある。

平面は不整楕円形を呈し、長軸 1.0 m、短軸 0.75 m と推定される。深さは 30cm を測る。底面中央やや南寄りです師器杯が出土している。

埋土は、灰褐色系のものが単層で入る。

出土遺物には、土師器杯 388 があり、八峠編年中世 期、12 ~ 13 世紀ごろのものと考えられる。土壌墓の可能性もあるが性格は不明である。

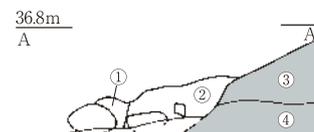
土坑 64 (第 122 図)

15区J 9グリッドにあり、標高 35.5 m 付近の平坦面に立地する。黒褐色土除去後の A T 層上面で検出したものである。現代の攪乱によって半分以上掘削されている。

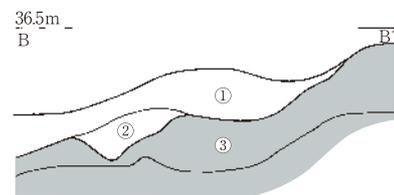
平面は長楕円形を呈すものと考えられ、長軸 0.95 m 以上、短軸 1.05 m を測る。深さは 30cm を測る。

埋土は、黒褐色土系のものが単層で入る。

出土遺物がなく、時期、性格は不明であるが、検出層位から中世のものであろう。



- ①黒褐色土
- ②暗黄褐色砂礫(褐色土含)
- ③黒褐色土
- ④暗褐色土



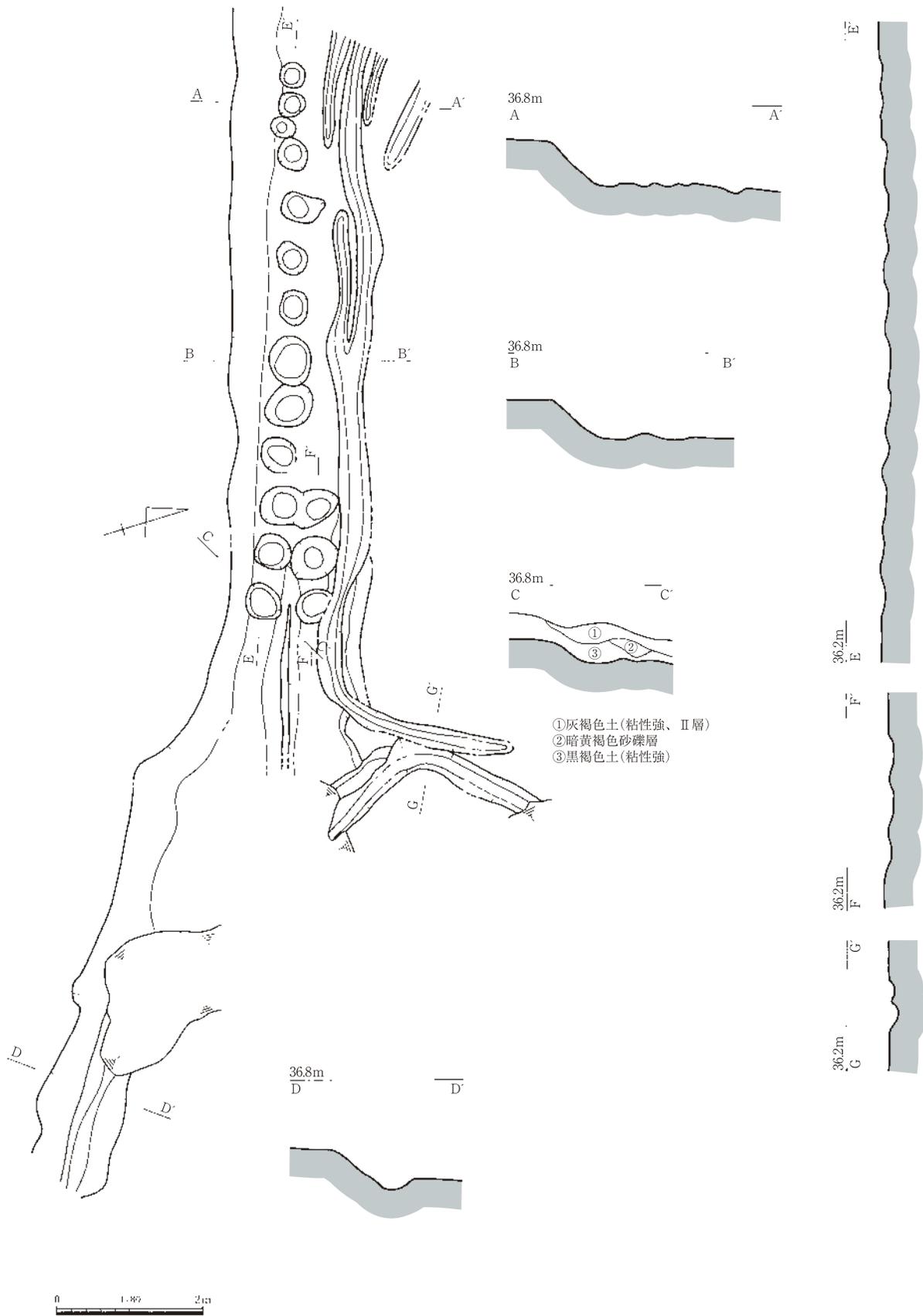
- ①灰褐色土(Ⅱ層)
- ②暗黄褐色砂礫(礫多含)
- ③黒褐色土(粘性強)

(3) 集石 1 (第 123 図)

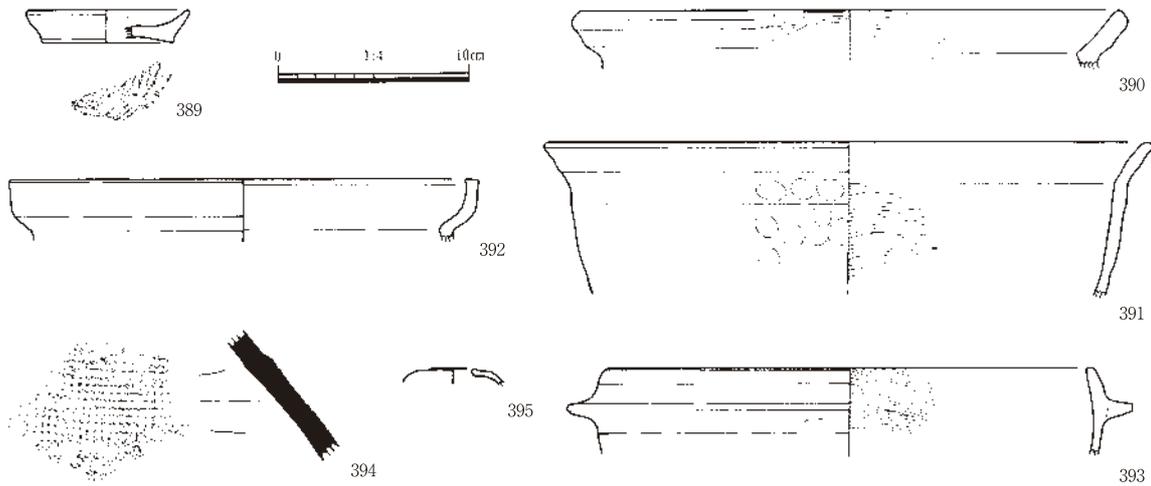
15区から門前鎮守山城跡 C 1・2グリッドにかけてのび、黒褐色土粘質土を掘り込む形で検出された。標高は 36.5 m 前後である。



第123図 集石 1



第124図 道路1・2



第125図 道路1・2出土遺物

門前鎮守山城跡側では、テラス状斜面部に、長さ4.4m、幅1.2mにわたって、東西方向に帯状に砂礫を混ぜた拳大から人頭程度の礫が積まれているのが確認された。礫は、乱雑に積まれた状態である。下場との高低差は、最大0.46mである。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、層的に耕作以前のものである。性格は不明である。

(4) 道路1・2 (第124・125図、P L.15・17・33・34)

調査区西側のJ9・10グリッドにあり、標高35.6～36.3mの北東側斜面法尻付近に立地している。集石1を除去した後に検出した。

斜面を高さ50～60cm程度段状に掘削し、平坦面及び溝を掘り込んでいる。およそ南北方向に延び、南側は調査区外へ、北側は門前鎮守山城跡へ延びている。門前鎮守山城跡側は明瞭に遺存していなかった。検出した限りでは長さ16m以上、幅は0.9～1.2mである。底面には、径70cm程度の浅い土坑状の穴が連続して掘り込まれている。

出土遺物には、埋土中からの土師器皿389、土師器鍋390・391、瓦質土器鍋392、瓦質土器羽釜393、瓷器甕394、白磁小壺395がある。

これらは、八峠編年中世 期、13～14世紀ごろのものと考えられる。

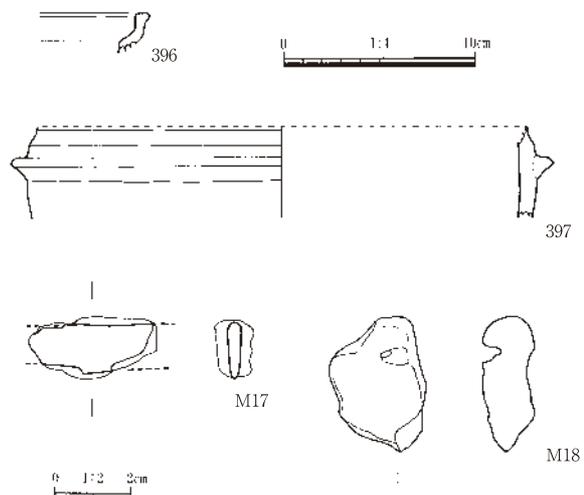
(5) ピット出土遺物

(第126図、P L.32)

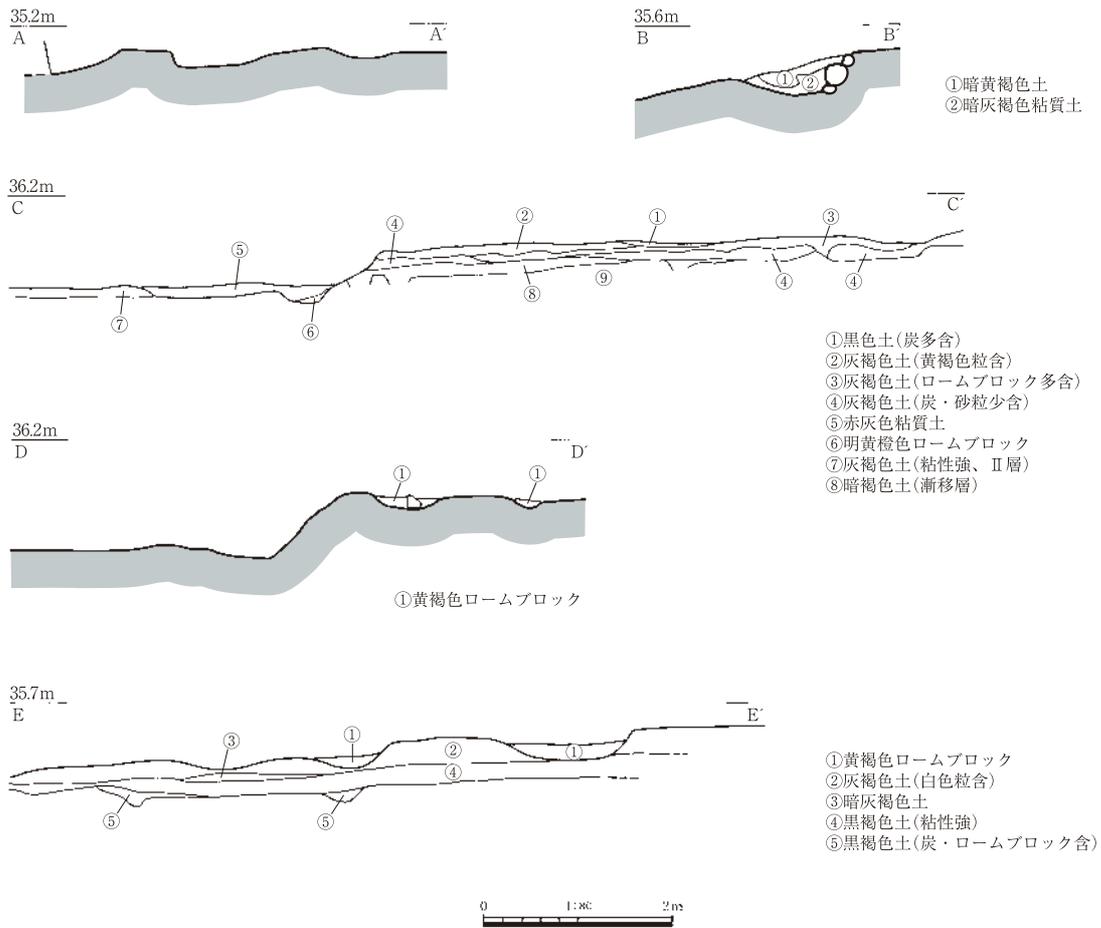
ここで、15区北側のピット群から出土した遺物について触れることとする。

図化したものは、P489から出土した瓦質土器鍋396、P490から出土した瓦質土器羽釜397、P488から出土した鉄器薄板状不明品M17、椀形鍛冶滓M18である。

これらは、14～15世紀ごろのものと考えら



第126図 ピット出土遺物



第127図 水田1・畠1・3

れ、建物を構成するピットとほぼ同時期のものと考えられる。

(6) 水田・畠

水田1・2、畠1～3 (第109・127～137図、P.L.16～17・30・32～35・39)

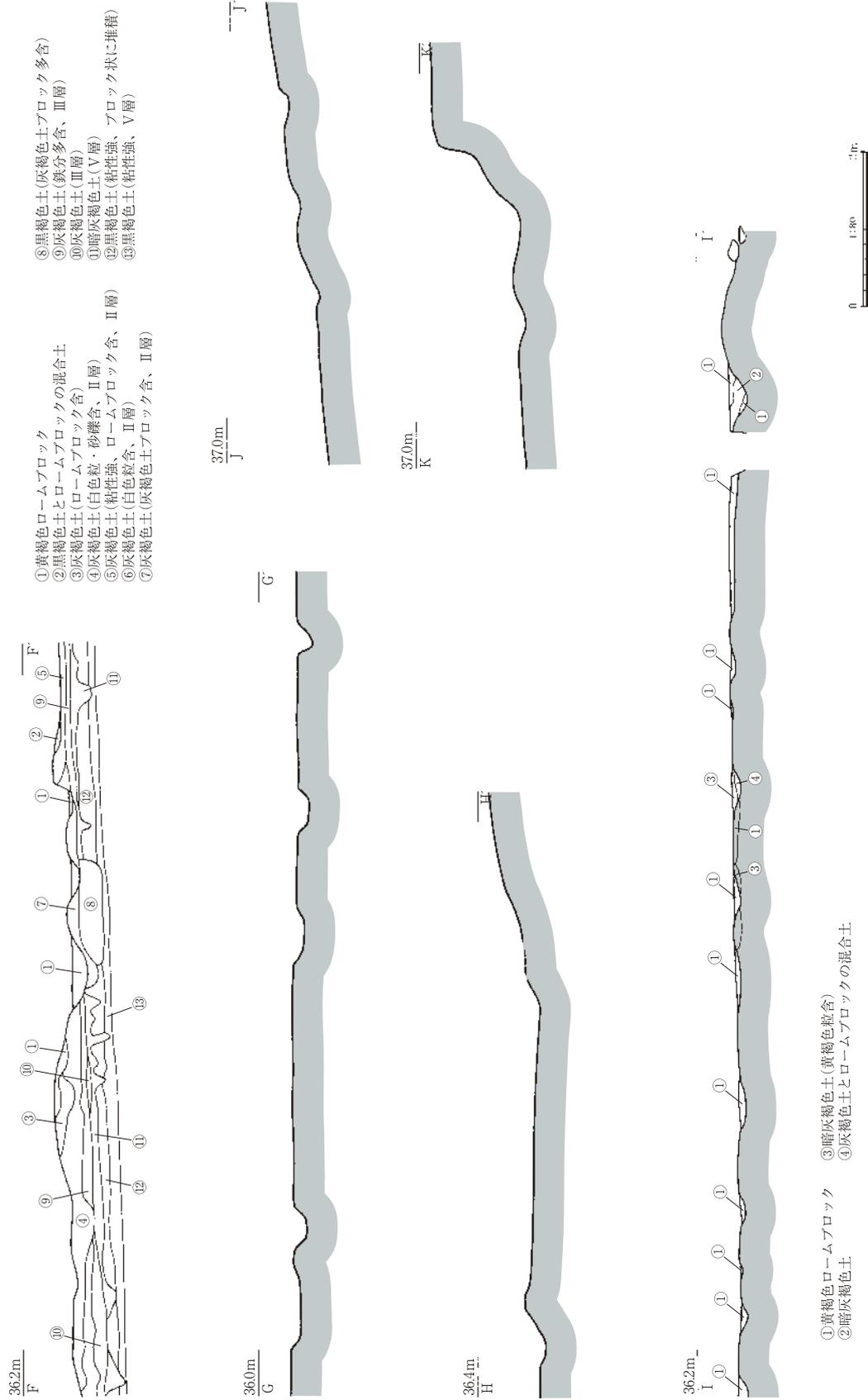
田畠遺構は、14・15区造成土直下で検出された。造成土によってパックされており、互いに隣接しながら良好な状態で検出されている。これらは、緩やかな斜面部を段状に整形して作られており、水田1と水田2の比高差は約0.7mを測る。

水田1は、標高35.0m付近にあり、南西側には幅10cm、高さ8cm程度の畦が一部残る。周囲は、幅0.5～1.7m、深さ6cm程度の溝により区画されている。水田面は略方形を呈し、長軸10m、短軸8.5m、面積80㎡を測る。西側隅が途切れており、水口の可能性がある。耕作土のPhは5.1の弱酸性である。

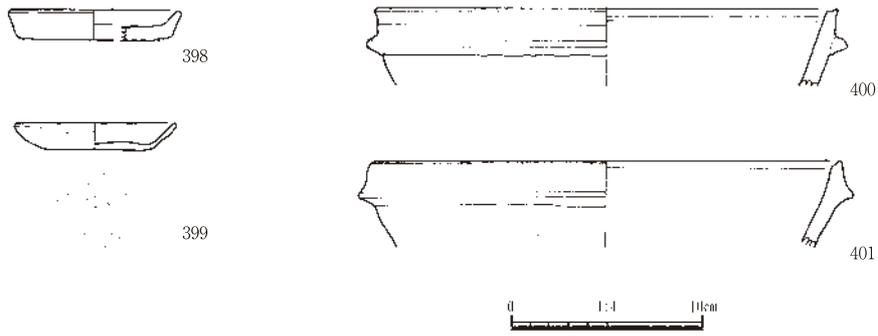
また、畦上で偶蹄目の足跡3個を検出した。径約13cm前後を測り、大きさからすると牛の足跡であったものと考えられる。

出土遺物には、溝から出土した土師器皿398・399、瓦質土器鍋400、須恵器羽釜401がある他、耕作土中から土師器坏402～405、皿406、褐釉陶器407・408、土師器甕409、土鍋410、瓦質羽釜412・413、須恵器甕414・415、鉢416などがある。

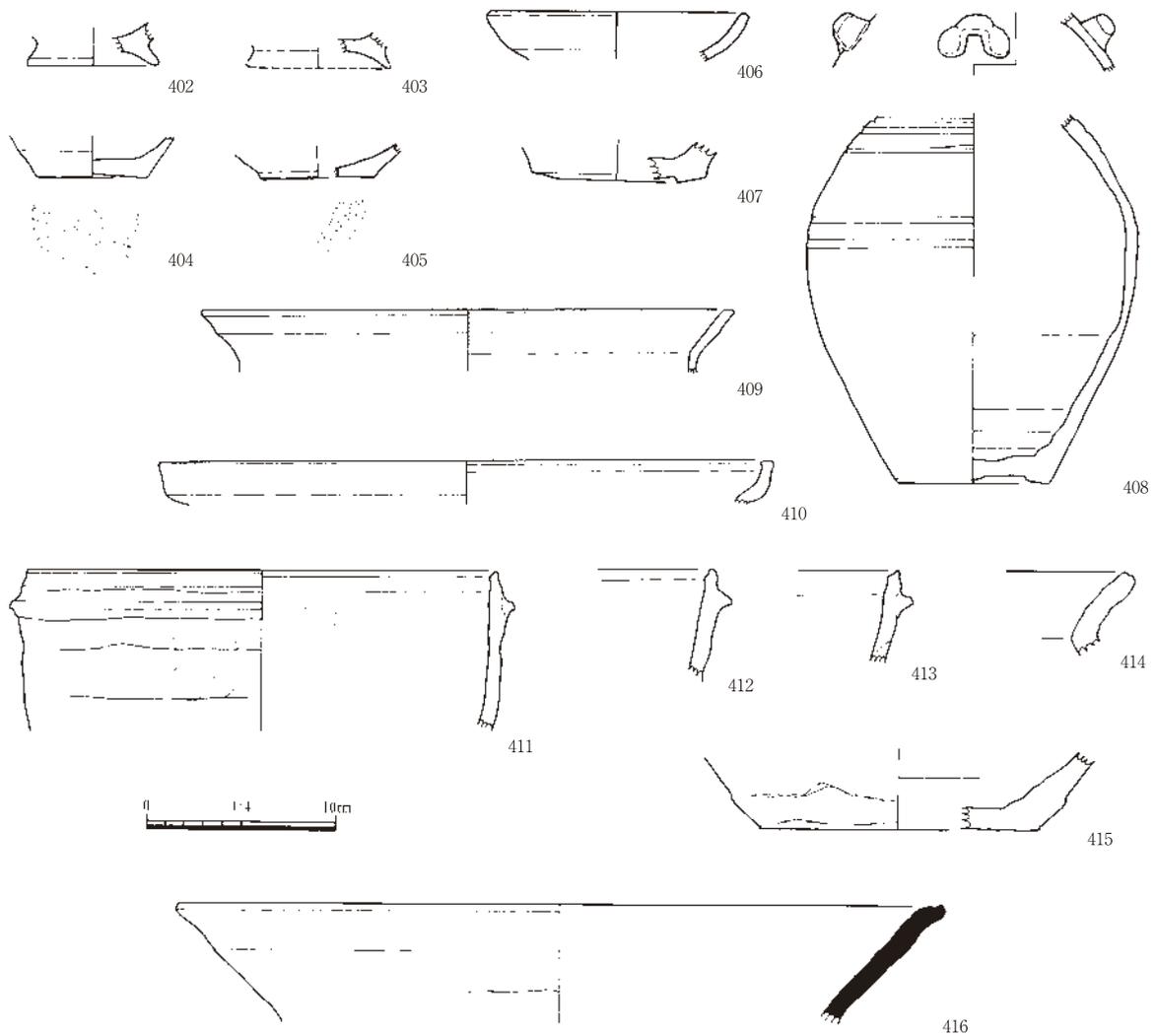
水田2は、標高35.7m付近にあり、南側は調査区外に延びている。長軸9.5m以上、短軸4.5m以上、面積23㎡以上を測る。周囲には、高さ8cm程度の畦で区画されているが、北東隅が途切れており、



第128図 水田2・畠2・3



第129図 水田1内溝出土遺物

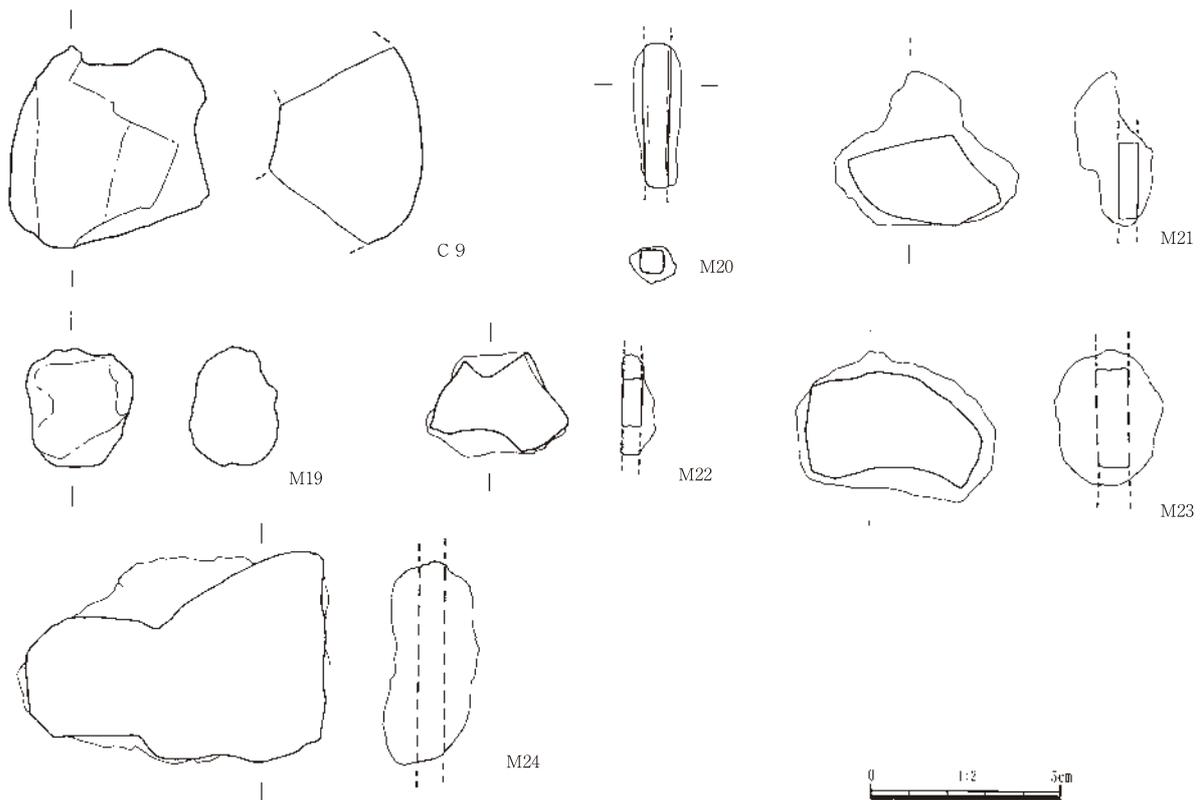


第130図 水田1出土遺物

排水口の可能性がある。耕作土は、基盤となる黒褐色土と明瞭に区別できる灰褐色土層で、Phは5.3の弱酸性である。造成による土圧で潰れていると思われるが8cm前後を測る。

出土遺物には明瞭なものが認められなかった。

畝1は、標高35.1m付近にある。畝2より約40cm低い位置にある。幅0.7～1.3m、深さ10cm程度の溝によって区画されており、遺存する面積は32m<sup>2</sup>以上である。遺存状態は悪く、幅0.8～1.3m、



第131図 水田1出土遺物

深さ 10cm程度のおよそ東西方向に走る畝間 3 条と幅 0.6 ~ 1.2 m の畝 2 条を検出したに過ぎない。耕作土の Ph は 5.4 と弱酸性である。

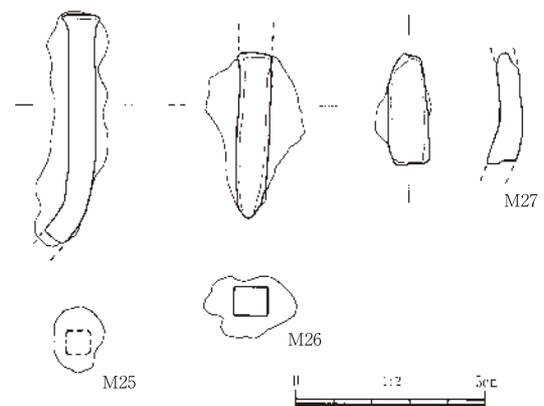
出土遺物には、耕作土中から瓦質羽釜 417、鉄器 M 28 ~ 33、椀形鍛冶滓 M 34、流動滓 M 35・37、鍛冶滓 M 36 がある。

畝 2 は、標高 35.5 m 付近にあり、畝 1、水田 2 に挟まれた箇所にある。およそ東西方向に走る高さ 10cm 前後の畝状の高まり及び畝間が 3 条検出された。性格は不明であるが、畝上に直線状に並ぶピットが掘り込まれている。耕作土の Ph は 4.9 と弱酸性である。

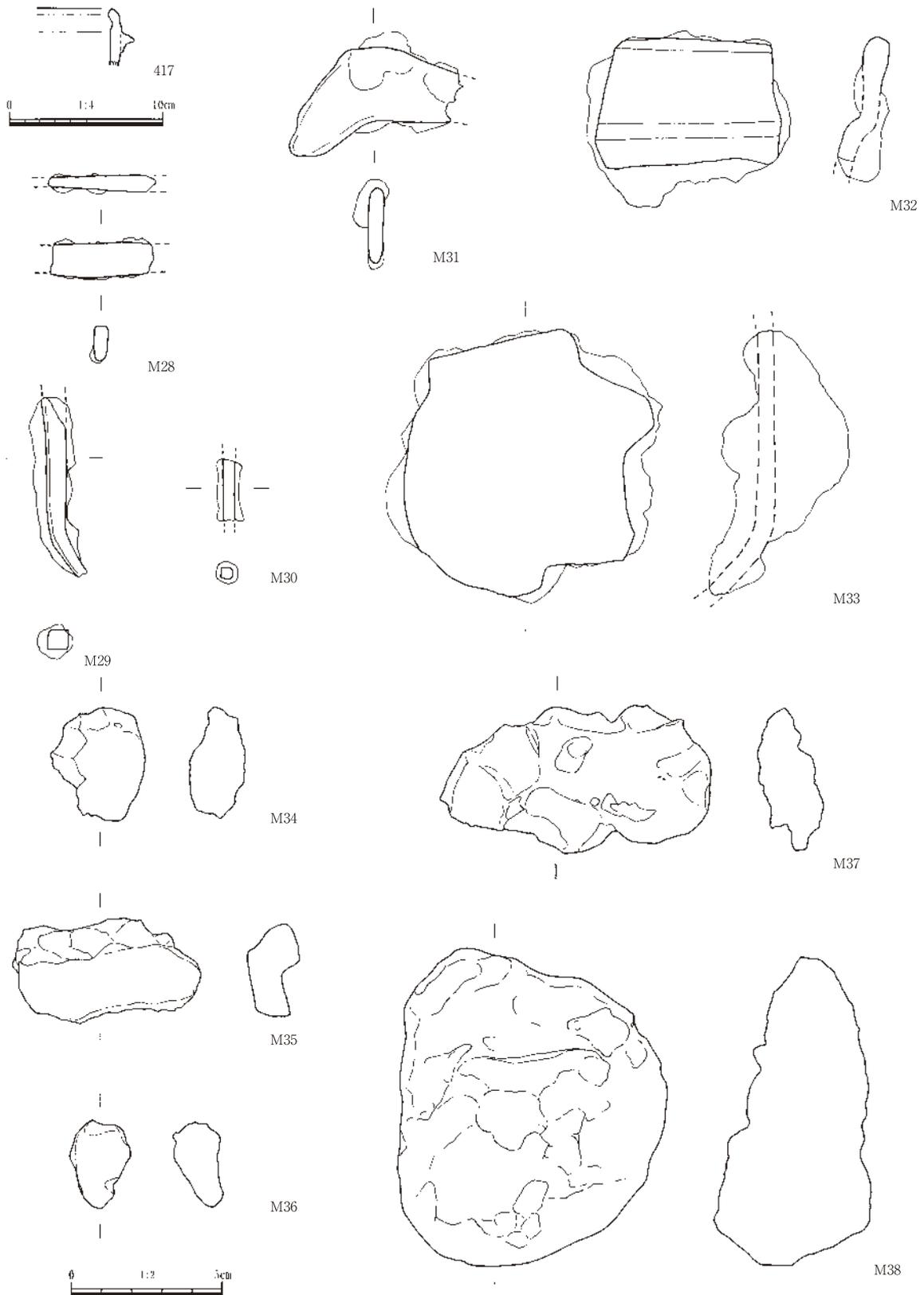
出土遺物には、土師器鍋 418、青磁碗 419、鉄器刀子 M 39、鑄鉄鍋 M 40 がある。

畝 3 は、標高 35.6 m 付近にあり、14 区西側から 15 区にかけて立地する。周囲は幅 0.7 ~ 1.5 m、深さ 10cm 程度の溝に区画され、区画は長軸約 22 m、短軸約 9 m の長方形を呈す。南西 ~ 北東方向に延びる畝及び畝間を検出した。畝幅は、0.4 ~ 2.0 m と幅があり、複数期に亘って営まれた可能性がある。中央付近に畝間溝に切られるように長軸約 7.0 m、短軸約 2.0 m の不整形に広がる炭化物面が検出されている。また、一段低くなる北西側の溝には自然石を積んだ土留めが認められる。耕作土の Ph は 5.0 と弱酸性である。

出土遺物には、耕作土中から備前焼甕 420、土師器風炉 421、皿 422、土師器坏 423、陶器皿 424、鍋 425 ~ 427、瓦質土器羽釜 428 ~ 430、鉢 431、白磁皿



第132図 水田2出土遺物



第133図 畠1出土遺物

432、碗 433、青磁碗 434 ~ 437、須恵器甕 438・440・441、壺 439、瓷器甕 442、砥石 S 32、鉄製品 M 41 ~ 45、椀形鍛冶滓 M 46 ~ 49、鍛冶滓 M 50・51、流動滓 M 52 がある。

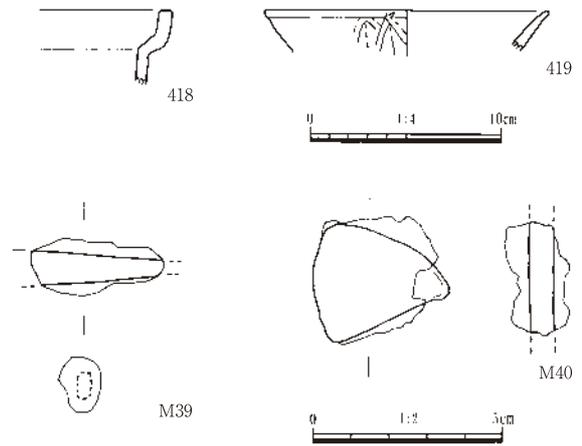
後述する長さ 20 m 以上、幅 60cm、高さ 14cm 程度を測る大畦畔 1 が、畠 1・2・水田 2 と畠 3・水

田1の間にある。耕作土を盛り上げるように作られている。

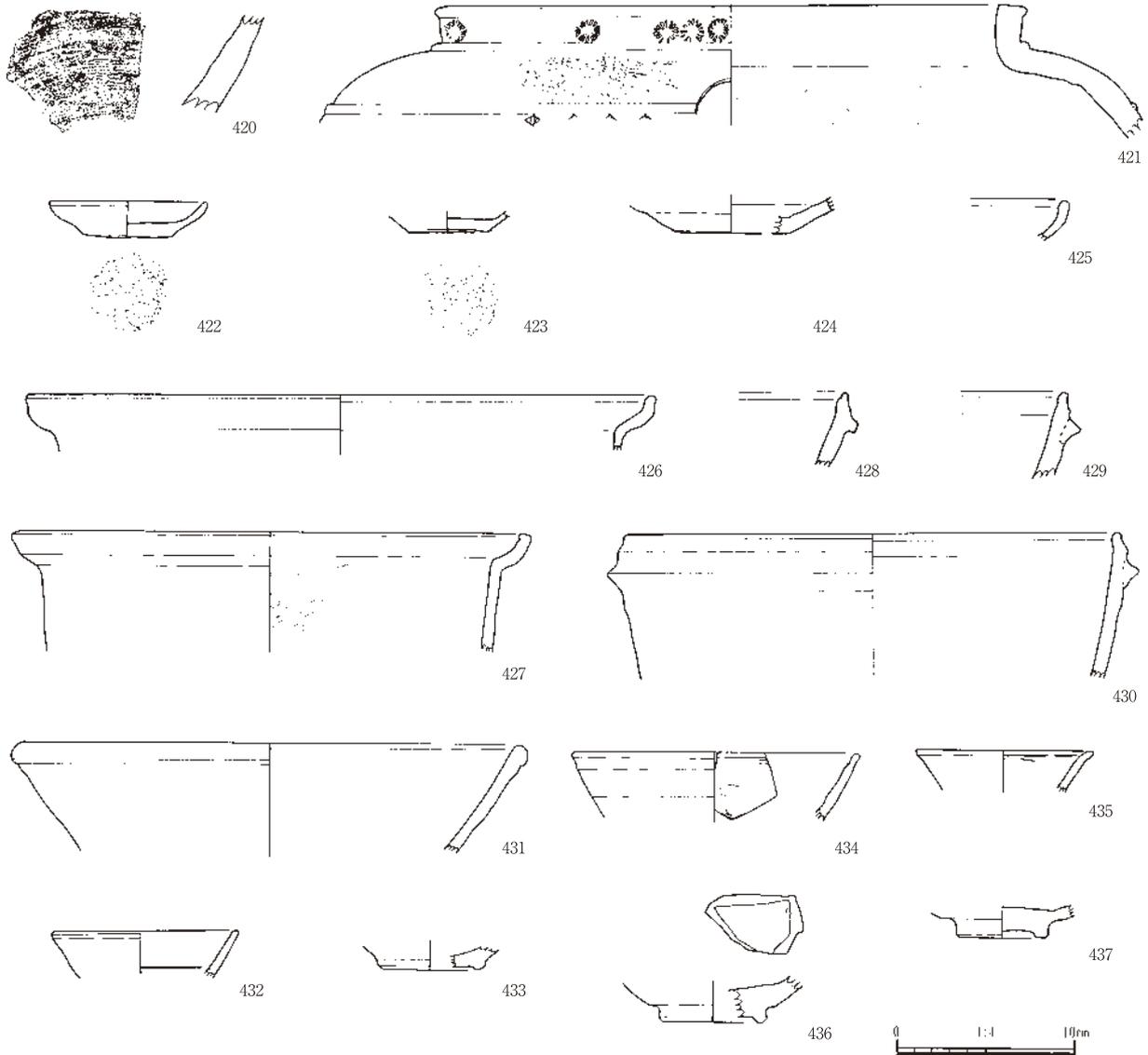
これら遺構の切り合いは明瞭ではなく、ほぼ同時期に造営されたものと考えられ、水田と畝が混在していることになる。しかし、畝3は、畝1・2に比べて遺存状態は良好ではなく、これらの中では最も遡るものの可能性があることから、同時に営まれていたとは言い切れない。

また、大畦畔1を境に畝1・2と畝3の畝方向が異なっており、栽培作物の違い又は耕作者の違いを示唆しているものと考えられる。

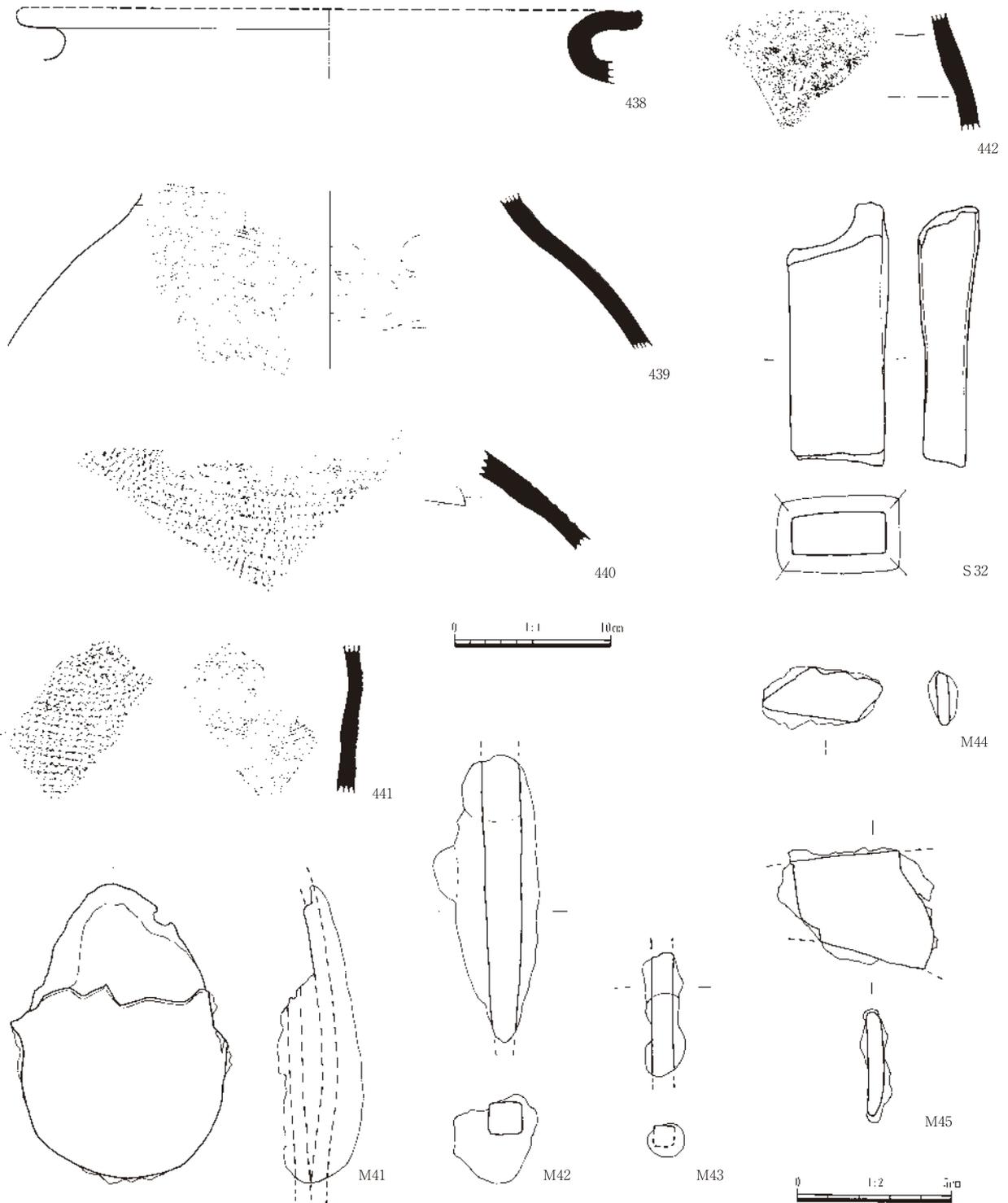
出土遺物は、いずれもこれら田畝に伴うものではなく、古い遺構（掘立柱建物5～11等）に伴うものと考えられ、田畝の構築年代の上限を示すものと考えられる。およそ15世紀ごろのものと考え



第134 図 畝2出土遺物



第135図 畝3出土遺物

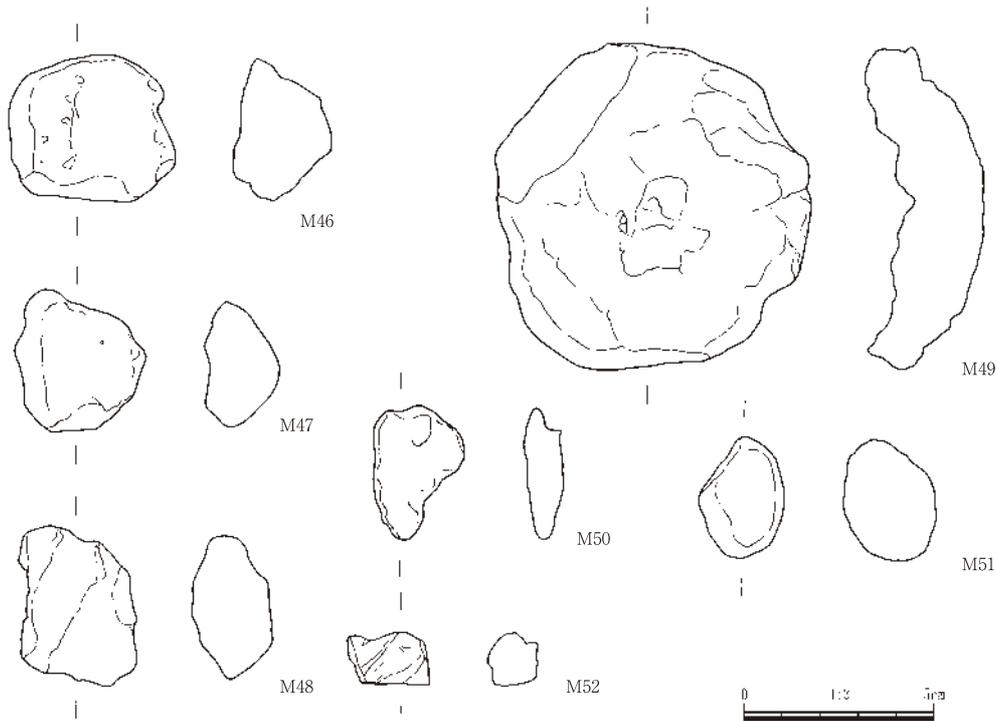


第136図 畠3出土遺物

られる。

各遺構の耕作土の植物珪酸体及び花粉分析の結果、水田1からはイネのプラント・オパールが多量に検出され、稲作の可能性が指摘されるとともにソバ花粉も検出された。周辺で栽培されていた可能性がある。

畠2・3からもイネのプラント・オパールが高率で検出されており、稲作が行われていたと推定されているが、施肥で使用された可能性もあり、断定はできない。また、畠3で検出された炭化物面に



第137図 畝3出土遺物

は、イネ・ススキ属の他ムギ類（穎の表皮細胞）が検出されており、ムギ作が行われていたものと推定できよう。花粉分析でもイネ科を主に、ヨモギ属、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科、カシ類、マツ属が検出されており、周辺がある程度乾燥した環境であったものと推定できよう。

(7) 石列3 (第138図)

15区南西側のK9グリッドにあり、標高36.5m付近の法尻平坦面に作られる。

人頭大の自然礫6個用いて、一列に並べている。法面を保護するためのもので、本来は、数段に亘って積み上げられていた可能性がある。

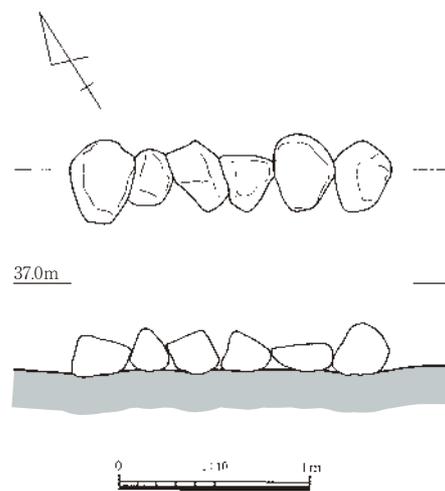
出土遺物はないが、田畠に伴うものと考えられ、およそ15世紀ごろのものと考えられる。

(8) 大畦畔1 (第109・139・141図、P L.16・35)

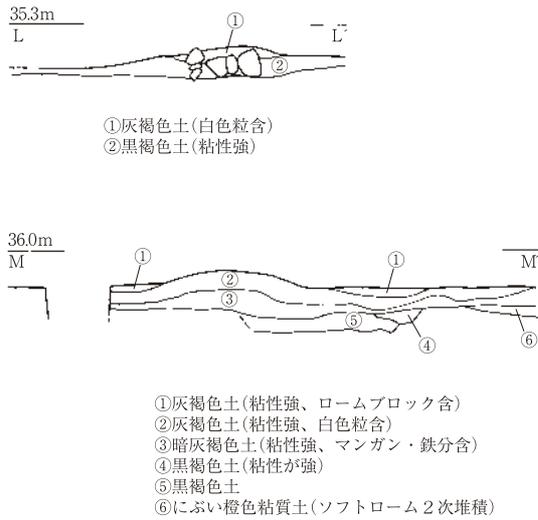
大畦畔1は、15区中央部H8、I8、J8・9グリッドにあり、標高35.1～36.5mの緩やかな斜面に立地する。畝1・2・水田2と水田1・畝3の間にある。

耕作土を40cm程度に盛り上げたもので、長さ20m以上、幅0.7～1.0mを測る。盛土の下には、人頭大の自然石が混ぜ込むように含まれており、数段積み重なった状態で検出された箇所もある。

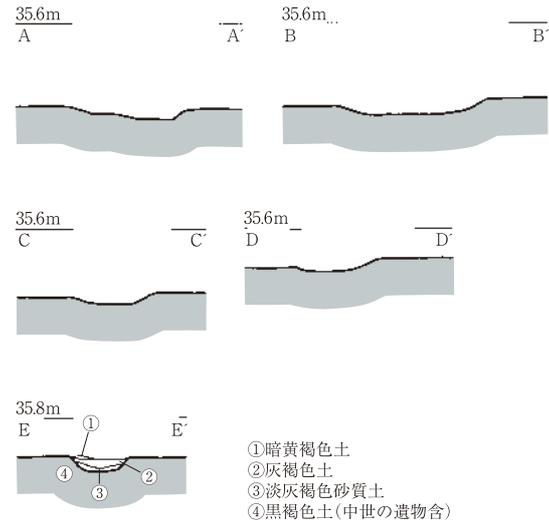
大畦畔1を境に、畝1・2と畝3の畝方向が異なっており、所有者が異なっていたか耕作物が異なっていた可能性がある。



第138図 石列3



第139図 大畦畔1



第140図 溝29～31

出土遺物には、盛土中で土師器坏 443、瓦質土器鍋 444・445、土師器鍋 446、瓦質土器羽釜 447～449、鉄滓等が出土している。

検出面は田畠と同じ面であり、およそ15世紀ごろのものと考えられる。

(9) 耕作痕4、溝29～31(第110・140～142図、P.L.32)

耕作痕4、溝29～31は、14・15区田畠耕作土及び大畦畔1を除去した後に検出したものである。

耕作痕4は、15区南東隅のI7・8、J7・8グリッドにあり、畠1・2耕作土を除去した後に検出したものである。幅0.3～0.8m、深さ30cm程度の平行する2本の溝及び、北西から南東方向に断続的に走る浅い溝とそれに直交する北東から南西方向に断続的に走る浅い溝からなる。平行する溝のうち、西側のものは畠2の畝間に重なるものであるが、東側のものは畠2の畝間と平行関係にはあるが、ずれている。

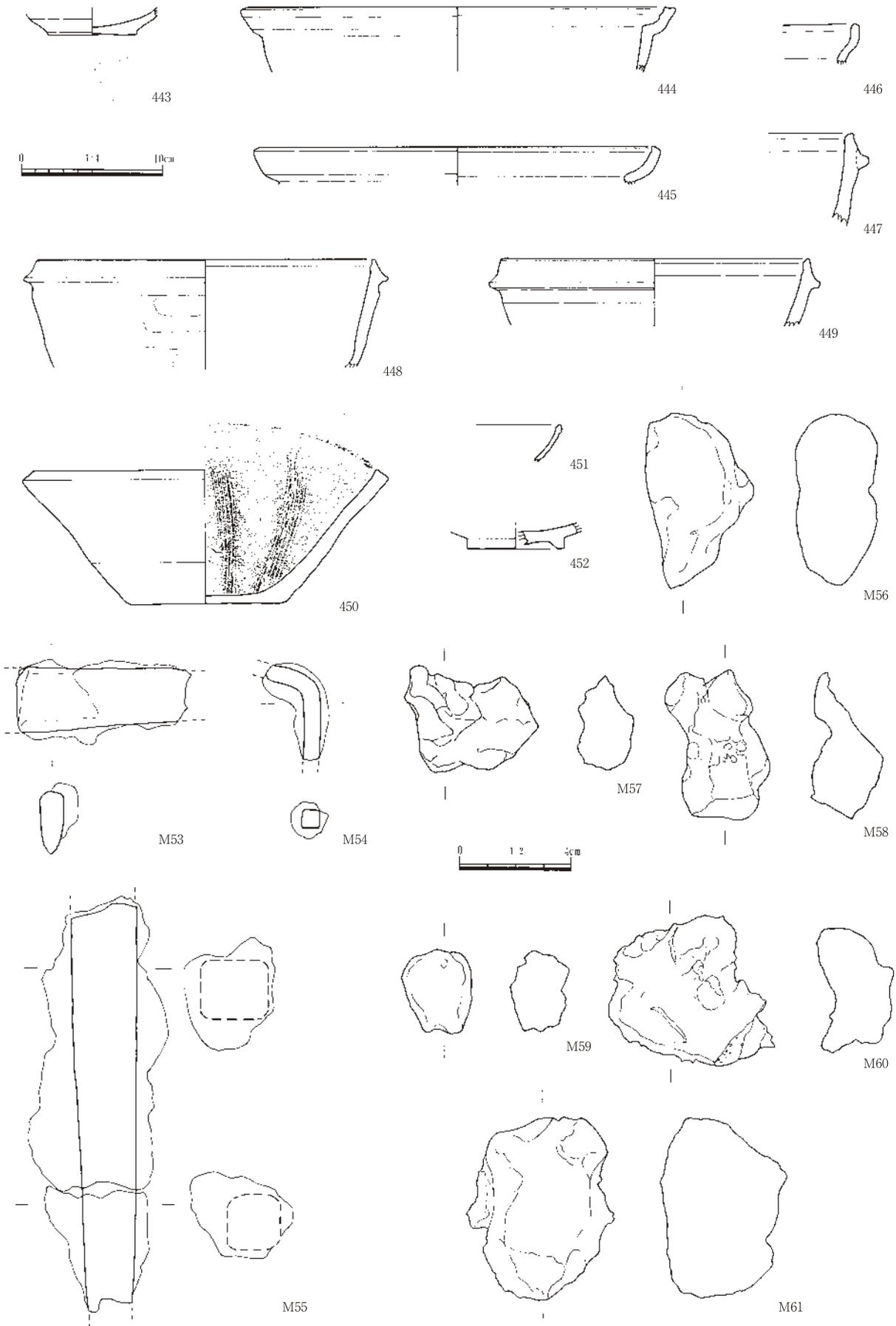
溝29は、水田1、大畦畔1を除去した後に検出したものである。幅0.7～1.7m、深さ15cm程度を測る。二股状に分かれ不規則に走る。

溝30は、畠3耕作土を除去した後に検出したものである。幅0.7～1.2m、深さ10cm前後を測る。ほぼ直線状に走る。

溝31も、畠3耕作土を除去した後に検出したものである。幅0.3～0.6m、深さ20cm程度を測る。鉤状に走り、一部枝分かれする部分がある。

出土遺物には、大畦畔1盛土中及び溝埋土中から、土師器坏 443、瓦質土器鍋 444・445、土師器鍋 446、瓦質土器羽釜 447～449、播鉢 450、白磁碗 451・452、鉄製品M 53～55、椀形鍛冶滓M 56～58・61、鍛冶滓M 59が出土している。

これら遺物は、およそ14～15世紀ごろのものと考えられるが、いずれも伴うものではなく、古い遺構に伴うものと考えられる。15世紀ごろの田畠耕作土下で検出されたことから、それ以前ではあるが、上限は不明である。



第141図 大哇畔1・溝29～30出土遺物



第142図 耕作痕4

(10) 包含層出土遺物、遺構に伴わない遺物(第143~149図、P.L.33~35)

ここで、14・15区の中世包含層出土遺物について、層位毎に触れることとする。

層(灰褐色土層)では、羽口C 10、椀形鍛冶滓M 62、鑄鉄製鍋片M 63・64を図化した。明確な時期を示すものはないが、層位的には15世紀以降のものである。

層(鉄分を含む灰褐色土層)では、土師器坏453・454、鍋455、瓦質土器羽釜456・457、須恵器甕458、羽口C 11、鉄製刀子と思われるM 65、鑄鉄製鍋片M 66・70・71、棒状鉄製品M 67・68、楔状鉄製品M 69、椀形鍛冶滓M 72を図化した。

これらのうち、453・454は、八峠編年中世期ごろに当たるものと考えられる。土師器鍋、瓦質土器羽釜等もこの時期に相当するものと考えられる。

層(暗灰褐色土層)では、鎬蓮弁を持つ龍泉窯系青磁碗459、椀形鍛冶滓M 73を図化した。459は、上田編年青磁碗B類に当たり、およそ14世紀代のものと考えられる。

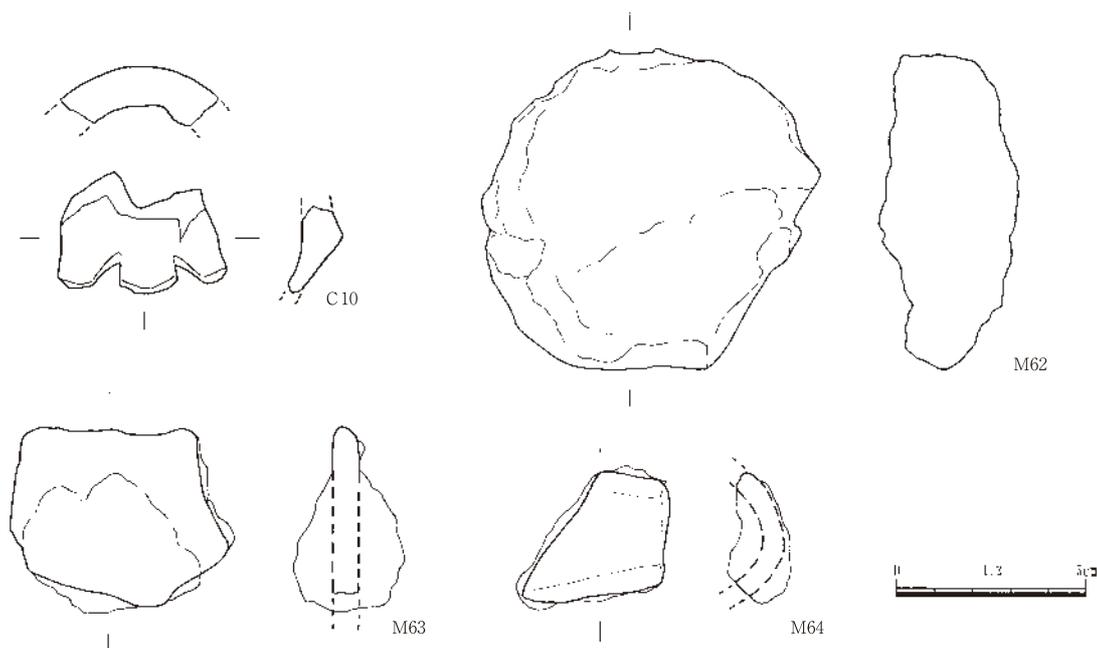
層一括では、土師器皿460、白磁坏461、土師器小皿462・463、手づくね土師器皿464、瓦質土器羽釜465、摺鉢466を図化した。461は、白磁A類に分類できるものと考えられる。また、464は手づくねの京都系土師器小皿で灯明皿として使用されたものである。15世紀以降のものと考えられる。

層(黒褐色土層)では、黒色土器坏467、土師器坏468、皿469、白磁碗470、土師器鍋471・472、瓦質土器鍋473・474、羽口C 12・13、椀形鍛冶滓M 74~76、砥石S 33を図化した。

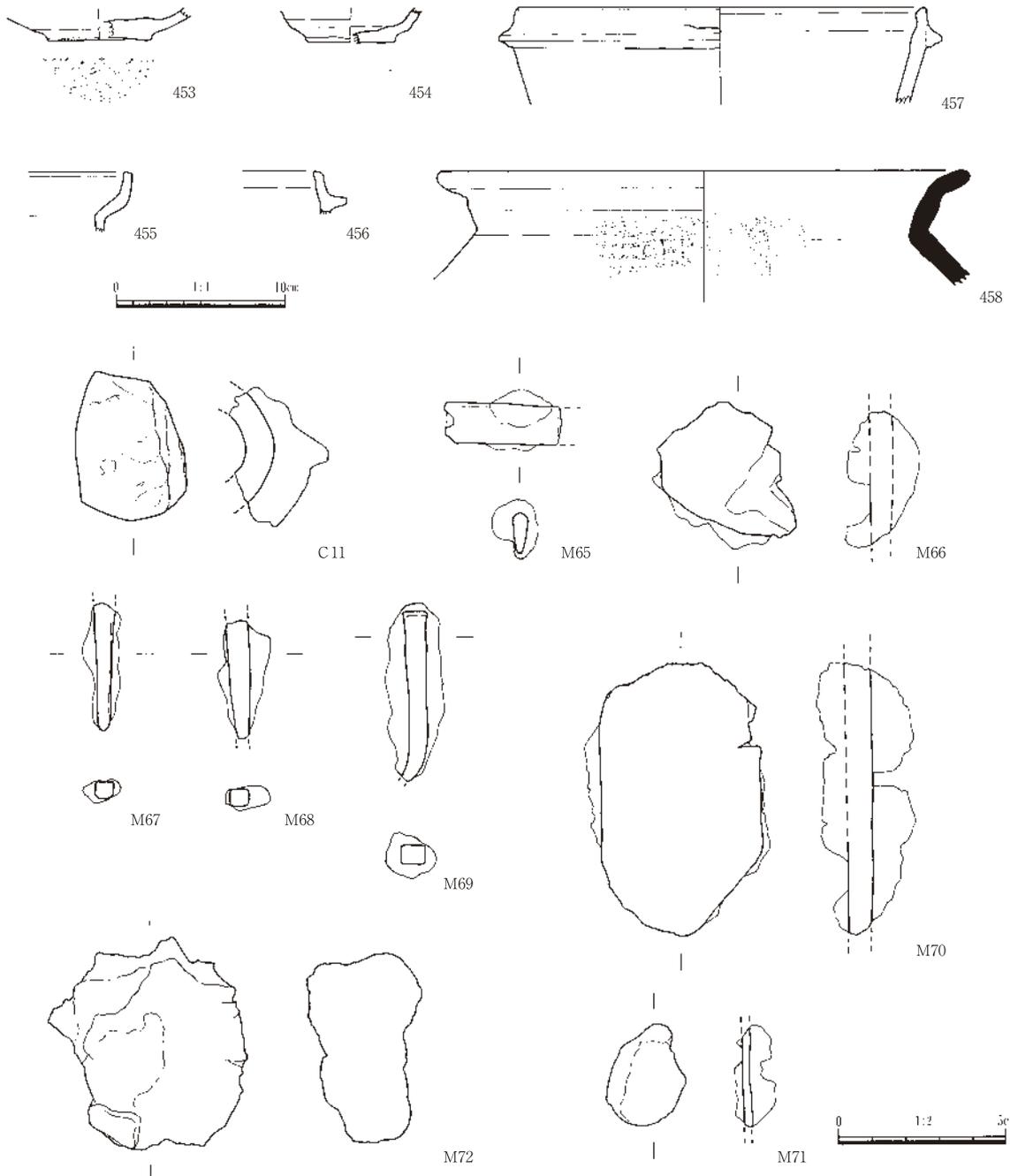
470は白磁碗類に分類でき、12~13世紀ごろと考えられやや古い様相である。しかし、その他の土器類は、八峠編年中世期、13~14世紀ごろのものと考えられる。

第148図は、段状遺構検出中の層(黒褐色土層)で検出したものである。土師器高台坏475、坏476~478、柱状高台坏479、皿480~484、鍋485・486、瓦質土器羽釜487~489、鍋490、白磁皿491、鑄鉄製鍋片M 77、棒状鉄製品M 78~80、椀形鍛冶滓M 81・82、砥石S 34を図化した。

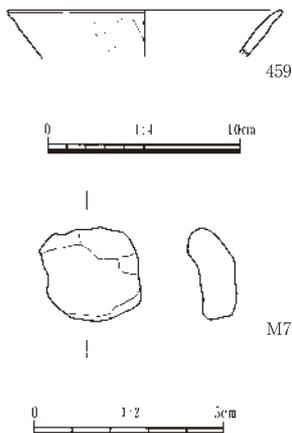
475は、平安時代末ごろのもので段状遺構1・2に伴う時期のものである。491は白磁皿類に分



第143図 包含層出土遺物



第144図 包含層出土遺物

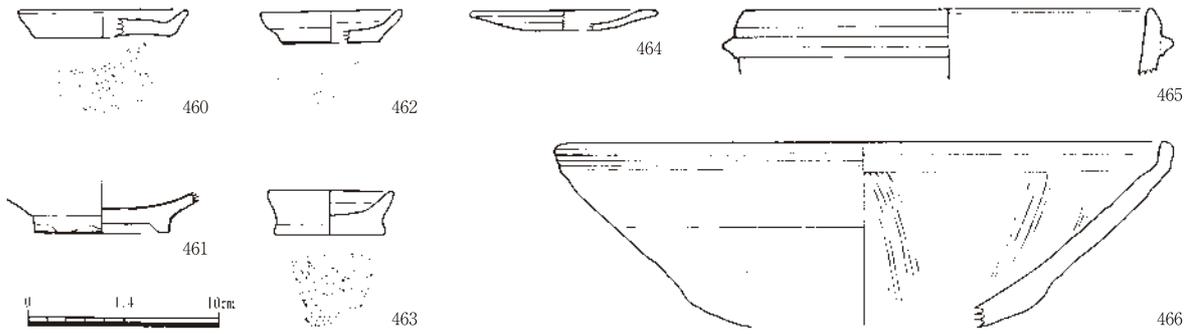


第145図 包含層出土遺物

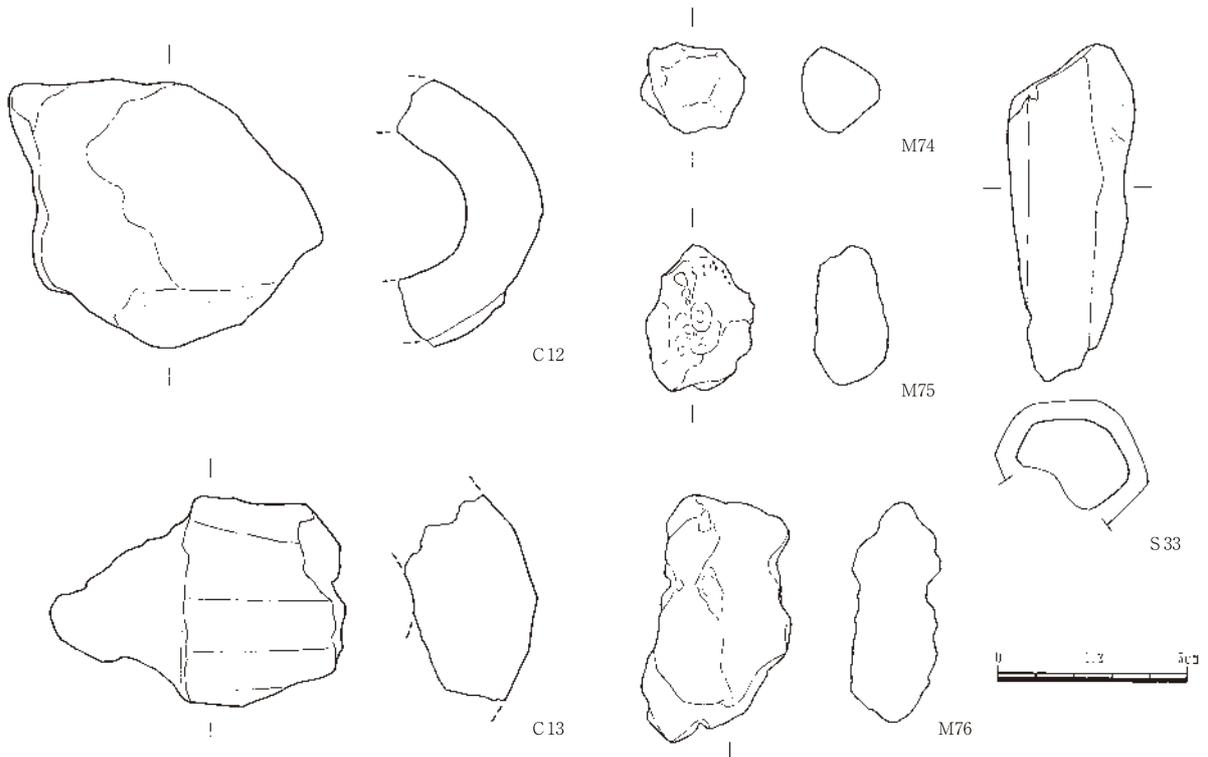
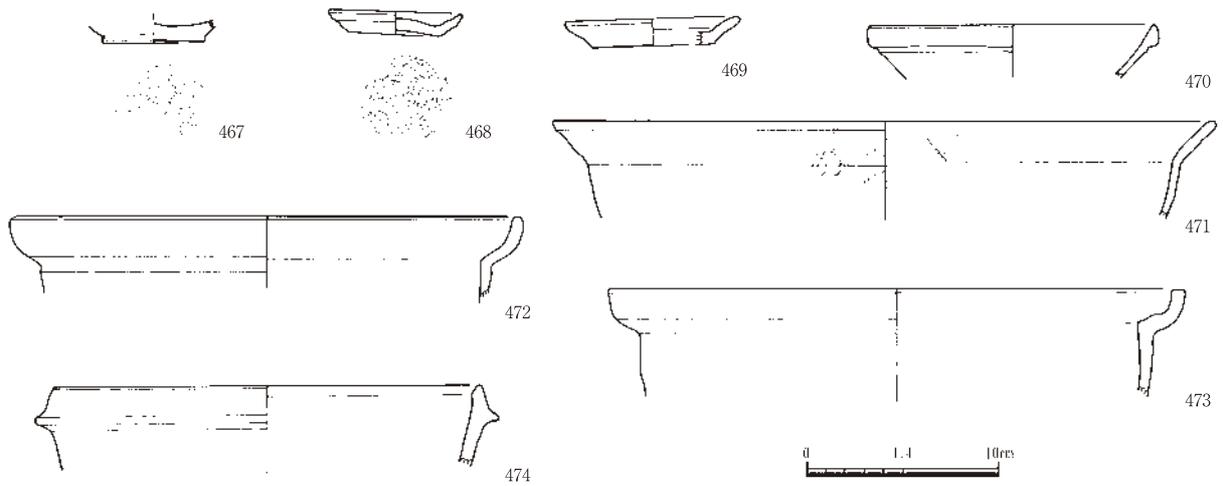
類できる。その他のものは、概ね14～15世紀ごろのものと考えられる。

その他、出土層位が不明なものに土師器坏492～495・497・498、柱状高台坏496、皿499～502、鍋503～505、瓦質土器羽釜506・507、備前焼播鉢508、白磁碗509、青磁碗510、須恵器甕511・512、鉄製刀子M83、流動滓M84を図化した。

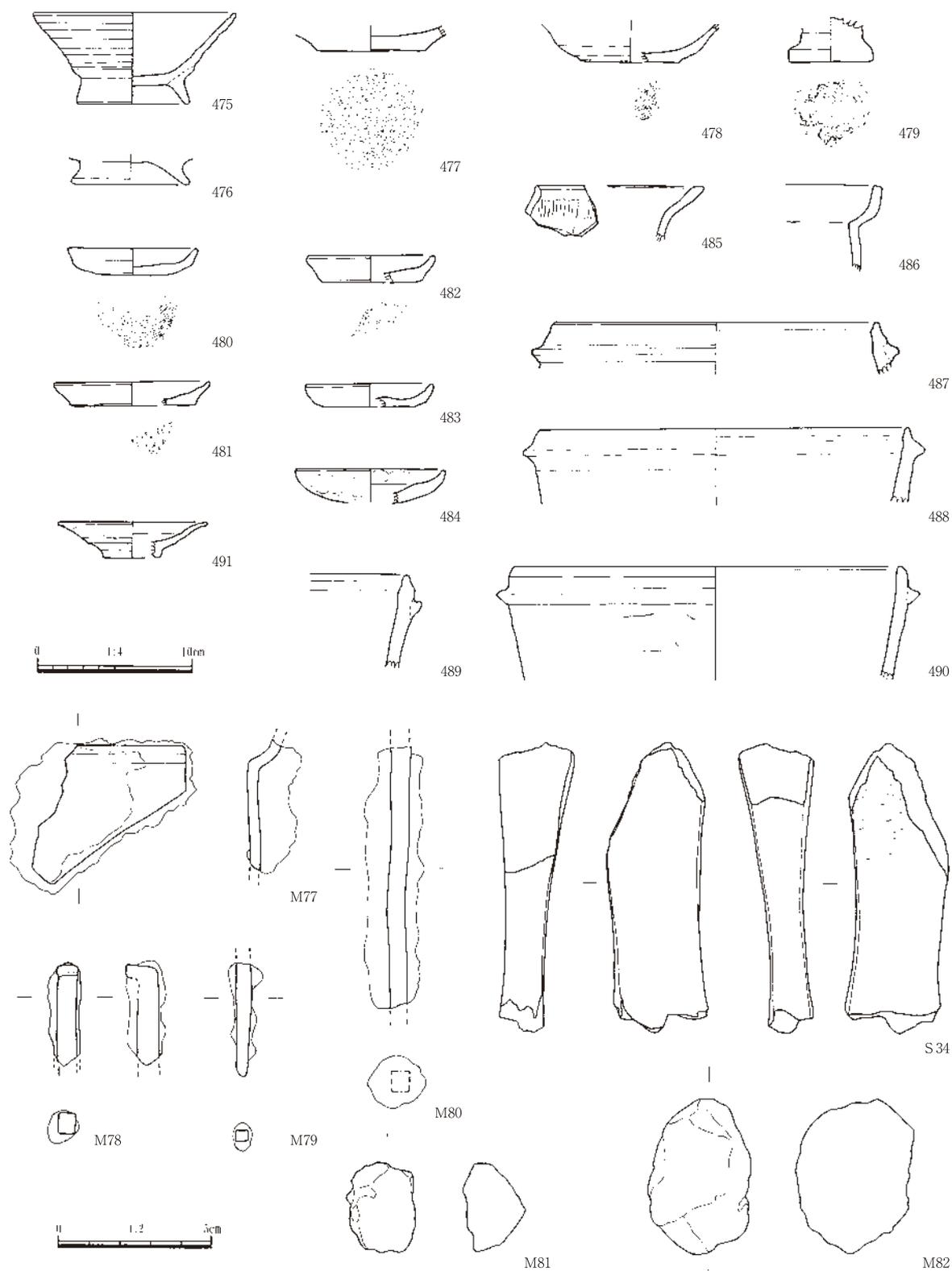
これら出土遺物は、概ね14～15世紀にかけてのもので、包含層遺物と同時期のものである。



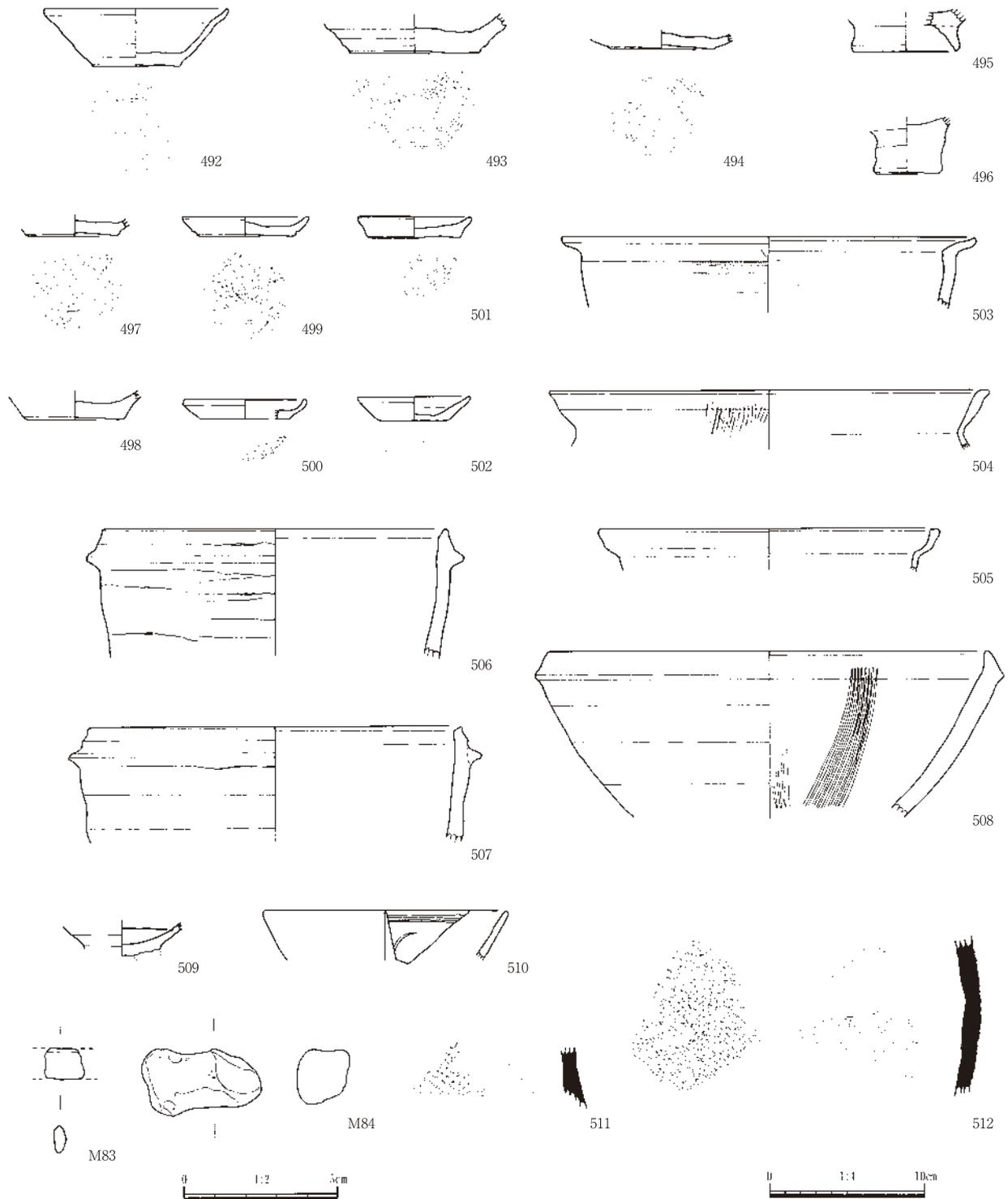
第146図 包含層出土遺物



第147図 包含層出土遺物



第148図 遺構に伴わない遺物



第149図 遺構に伴わない遺物

この層では、椀形鍛冶滓、鑄鉄製鍋破片等が大量に出土しており、14～15世紀ごろに、周辺に小鍛冶関連の遺構が存在する可能性がある。なお、門前鎮守山城跡土坑10で出土している鑄鉄製鍋も、ほぼ14世紀ごろと考えられ、門前上屋敷遺跡の鍛冶関連遺物と同様の時期であることから、土坑10の鉄鍋は、ごく近辺で製作された可能性もある。

## 5 中世（造成以後）の調査

14・15区のほぼ全域に亘って、田畠後は、大規模造成が施されている。後世の削平によって上面の大部分は失われている。造成は、丘陵東側を掘削した土砂を用いたものと考えられ、高さ1.6m以上の厚さで、斜面側から傾斜するように堆積している。造成端部の法面には、簡略化した石垣状の石列4が施されている。この造成は、出土遺物から15～16世紀ごろにかけて行われていたものと考えられる。

造成上面は削平が著しいため、掘立柱建物12～15、柵列6、土坑65～67がわずかに検出されたに過ぎない。この建物の性格については不明な点が多いが、出土遺物からすると、寺院に関連したもの可能性がある。しかし、いずれの建物も掘立柱であることから、主要な建物ではなく、附属建物の可能性が高い。同じ場所に頻繁に建て替えが行われているのもそのことを裏付けるものといえよう。

寺域としての平坦面は、調査区外へ広がっており、更に大規模な造成が行われていたと考えてよい。また、江戸時代ごろには、上面が削平され東側へ平坦面が拡張されている。この時期の遺構も検出されており、素掘り井戸と考えられる土坑65は、造成上面から掘り込まれていたものと考えられる。

### (1) 造成・石列

造成土・石列4（第150～155図、P.L.18・34～39）

14・15区ほぼ全域で、黄褐色土系の土砂を用いる造成土が検出された。この造成土は、一部門前鎮守山城跡調査範囲にも及んでいるが、本来は、門前上屋敷遺跡のさらに南側の調査範囲外に認められる、平坦面部分まで及んでいるものと推察され、更に大規模な造成であったものと推察される。

調査することができた造成の範囲は、東西36m以上、南北36m以上を測り、757.7m<sup>2</sup>以上を測る。門前鎮守山城跡の立地する丘陵斜面側から扇形に造成されているものと考えられる。造成土上面は、後世の宅地建設のため大規模に削平及び加工を受けており、この造成に伴う建物については、後述する掘立柱建物12～14、柵列6等が検出されたのみである。この造成は、確認した範囲では1.6m以上の高さに盛られていることが判明した。

盛土は、ローム主体の黄褐色土系の土を用いている。丘陵側から傾斜した状況が認められ、特に盛土作業中の崩落防止等の措置や突き固めるような状況は認められず、やや雑な盛り方である。おそらく丘陵裾部を掘削し、その土砂を造成土として利用したものと考えられる。

造成土法面には、北西側東西辺及び東側南北辺に、拳大から人頭大の礫により、簡易な石垣状の石列（石列4）が施されている。丁寧に積み重ねられた感はなく、法面崩落を防ぐための簡易なものと考えられる。

また、北側を拡張するように第二次造成が行われている。二次造成土は締りがいい。おそらく、一次造成土上面を掘削した土砂で拡張したものと思われる。

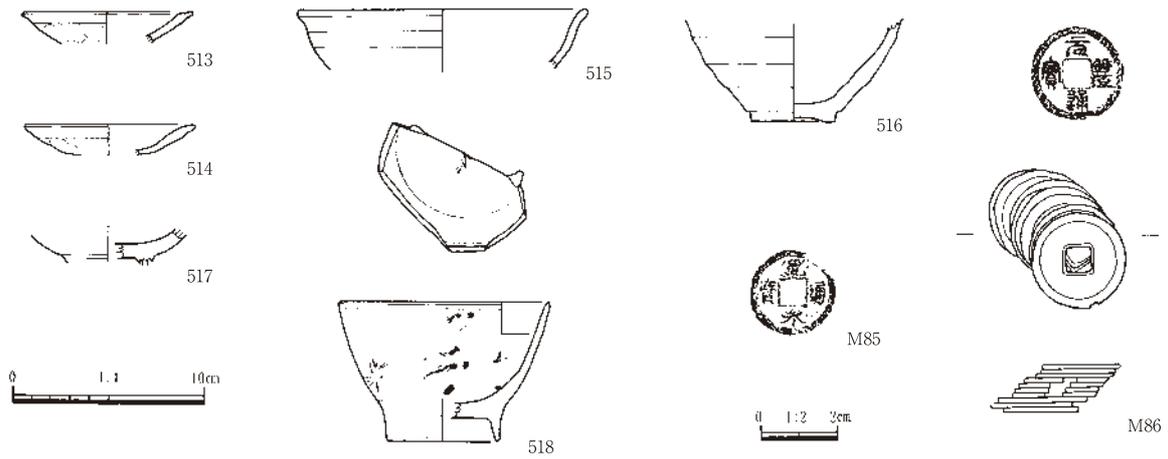
二次造成土中から土師器皿513・514、青磁碗515・517、天目茶碗516、染付碗518、寛永通寶M85、元豊通寶などを含む銭襖M86がある。二次造成土は、染付碗、寛永通寶（古寛永）が混じることから、江戸時代ごろのものと考えられる。

石列検出中の暗褐色土中から、廃棄されたような状態でまとまって土師器坏519～534・539、土師器皿535～538・540～550、瓦質羽釜551、瓦質土器火鉢552、土師器風炉553、備前焼播鉢554・

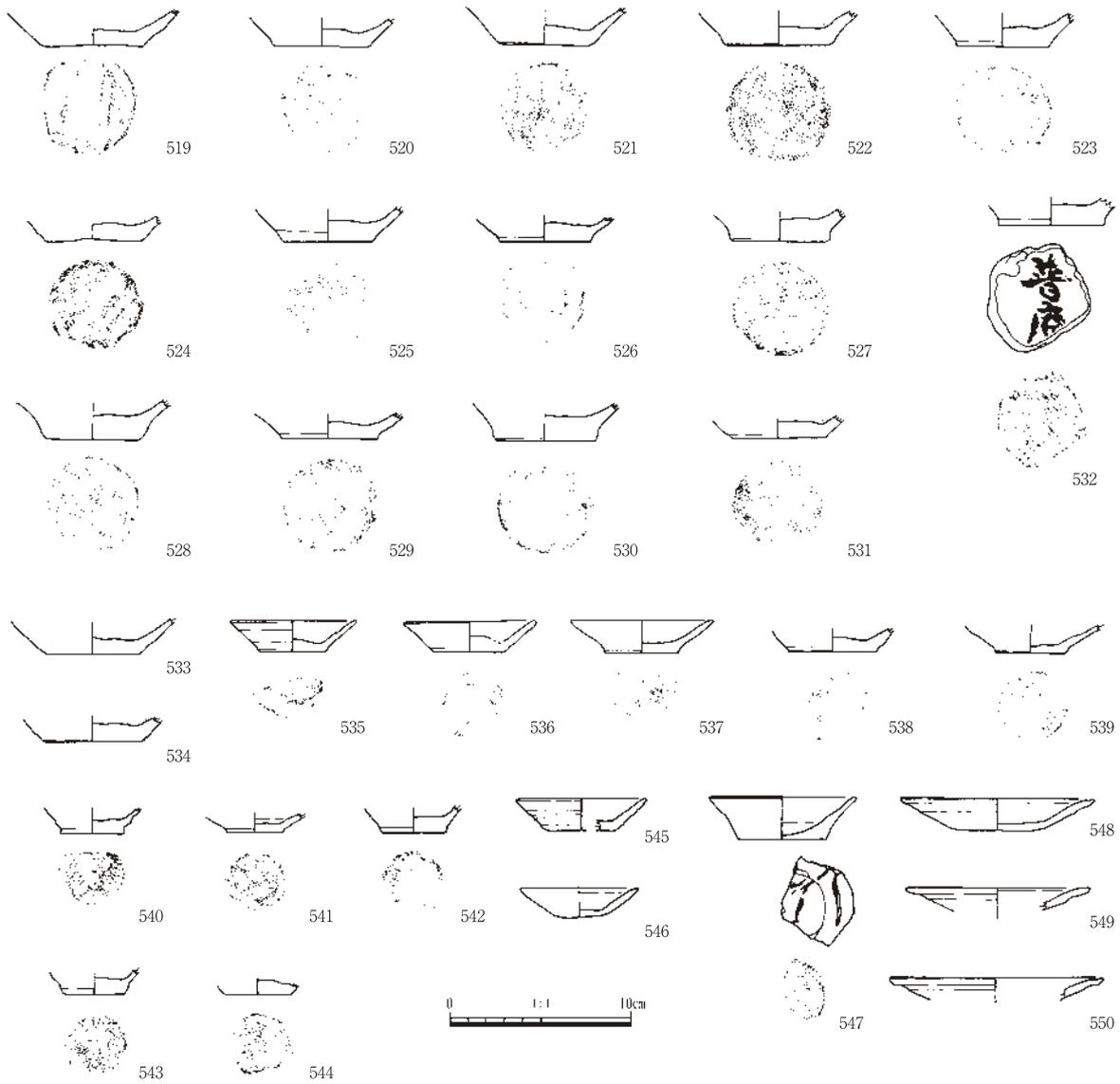


第150図 遺構配置図(中世・造成以前)

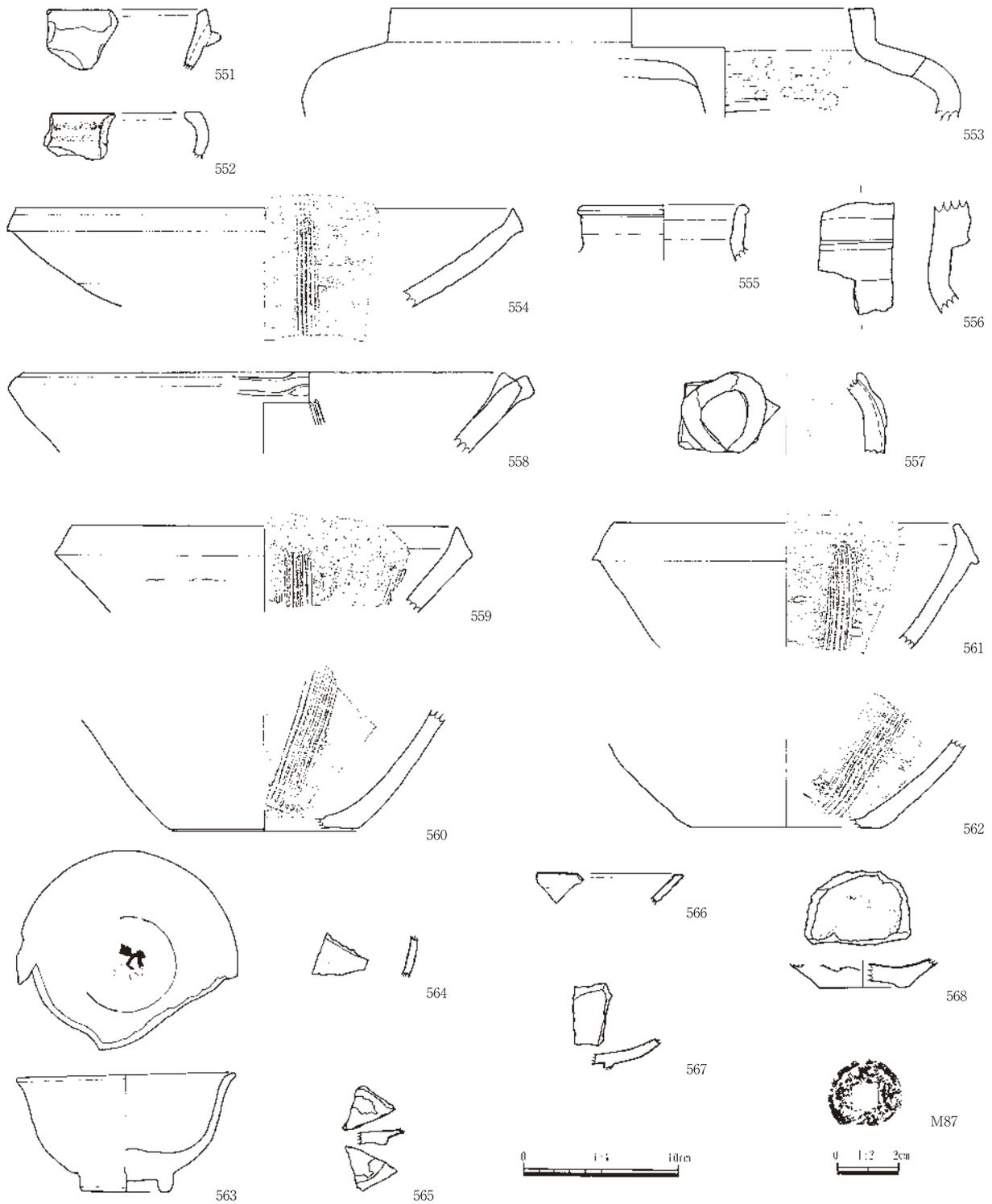




第151図 第2次造成土出土遺物



第152図 第2次造成土以前出土遺物

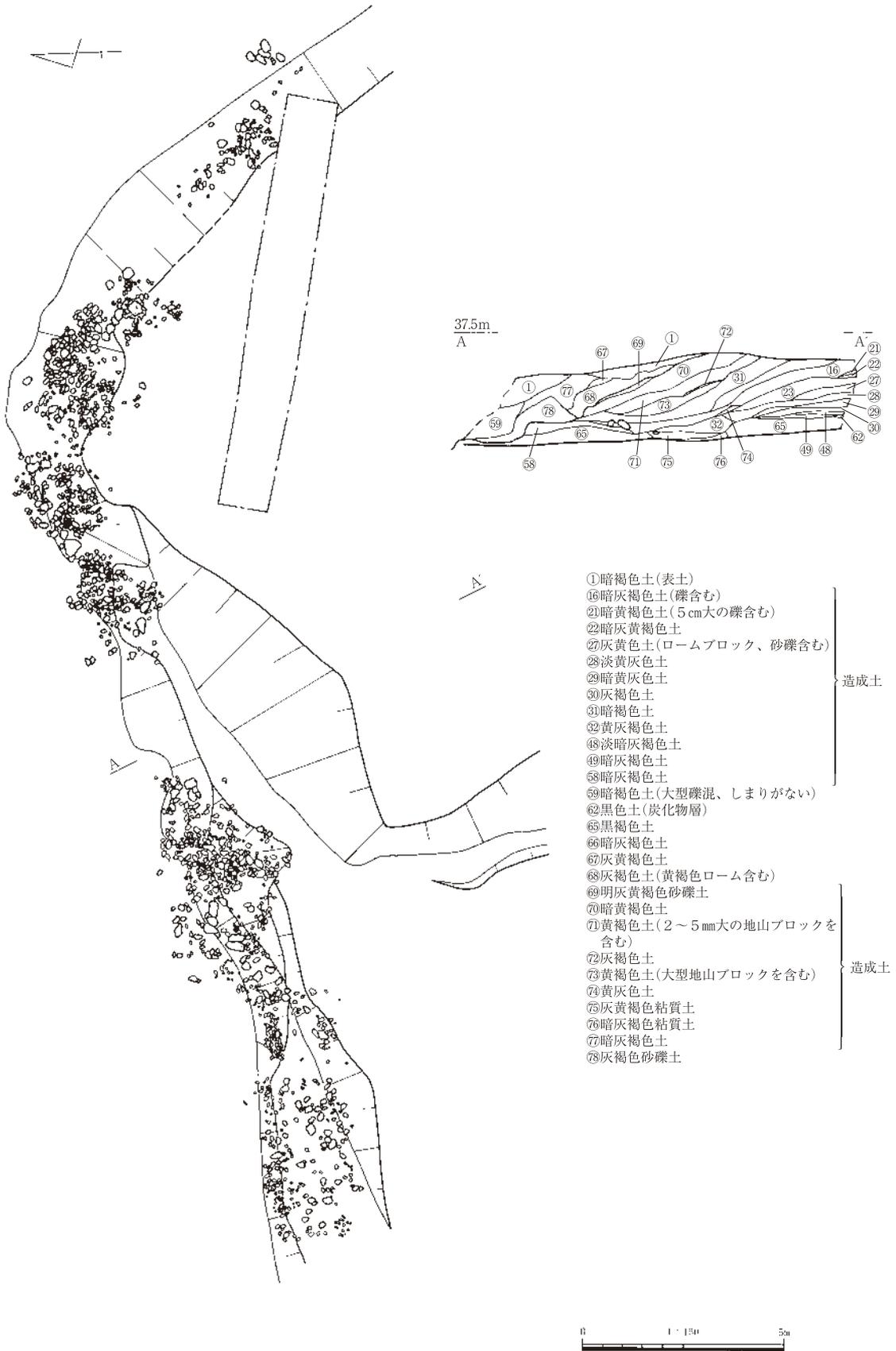


第153図 第2次造成土以前出土遺物

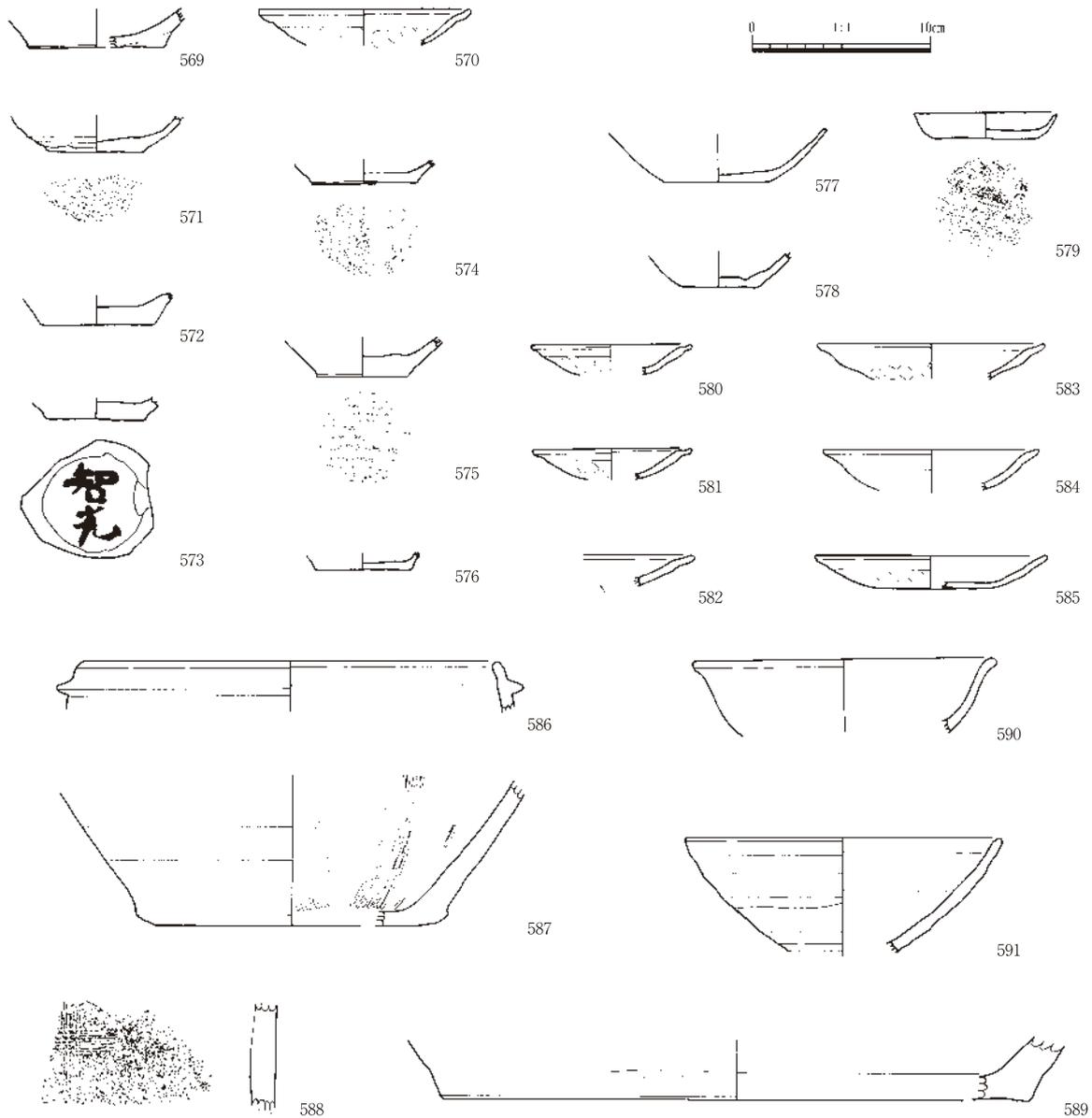
558 ~ 562、備前焼壺 555、備前焼甕 556、備前焼水屋甕 557、青磁碗 563・564、李朝青磁碗 565、瀬戸焼卸皿 566、唐津焼坏 568、染付け碗 567、景祐元寶か嘉祐元寶M 87 が出土している。

これらは、概ね 15 世紀ごろのものと考えられるが、567・568 が混じることから、近世段階ごろには石列 4 は埋まっていたものと考えられる。

第一次造成土盛土中からは、土師器坏 569・571 ~ 575・577、土師器皿 570・576・578 ~ 585、土師器羽釜 586、備前焼播鉢 587、備前焼甕 588・589、青磁碗 590、瀬戸焼平碗 591 がある。これらは、



第154図 石列4



第155図 第1次造成土出土遺物

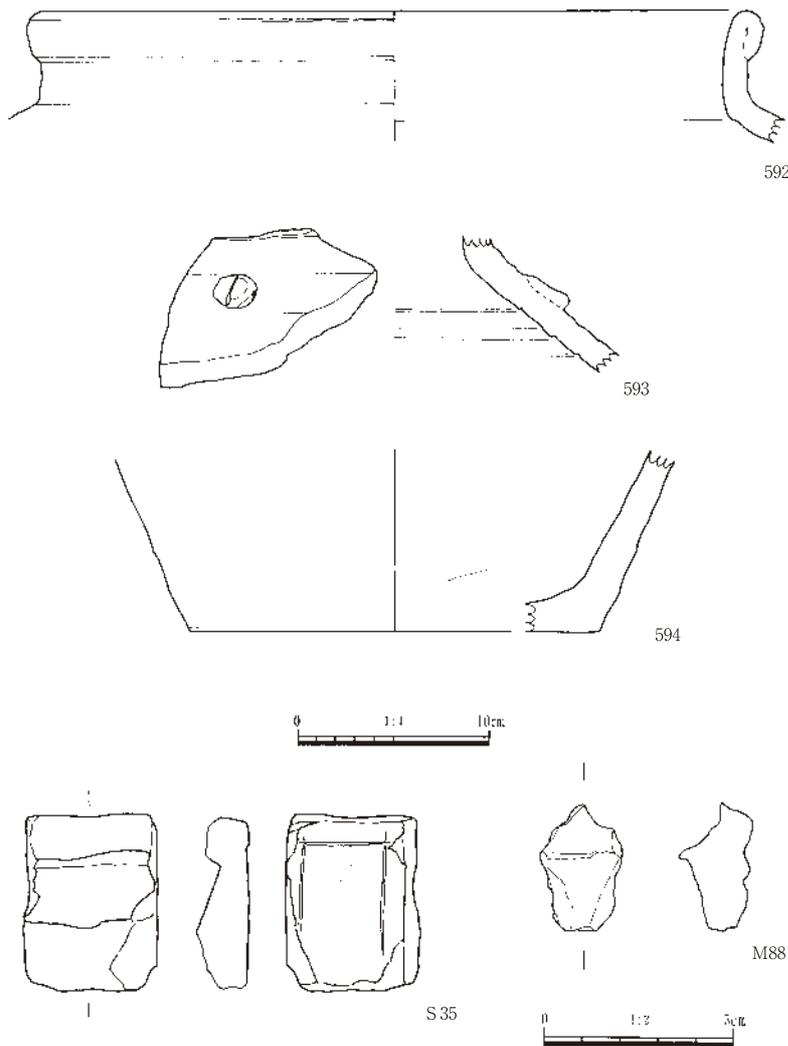
15世紀ごろのものと考えられる。

盛土中で出土したものが造成の時期を示すもので、この造成は15世紀ごろに行われ、しばらく使用された後、江戸時代ごろに更に拡張されたものと考えられる。

これらの遺物の中には、「普庵」(532)、「智光」(573)と書かれた墨書土器や16世紀ごろの青磁碗などが含まれており、この遺構の性格を示しているものといえる。門前鎮守山城跡土坑15出土墨書土器にも寺院の存在を示すものがあり、この造成は寺院建設のためのものであったと考えられる。

この寺院は、石列が近世段階には埋まっていることなどから、この時期には廃れていた可能性がある。





第157図 掘立柱建物12出土遺物

(2) 掘立柱建物・柵列

掘立柱建物 12

(第156・157図、P L.18・37)

15区J9・10、K9・10グリッドにあり、標高37.6mの造成土上面からローム層上面の平坦面で検出したものである。検出面は、造成土が始まる付近に当たり、掘立柱建物13・14・15、柵列6が重複しながら検出された。

南西から南東側は調査区外へ延びており、また後世の掘削が及んでおり正確な規模・構造は不明な点が多いが、検出した範囲では、梁行2間(6.2m)以上、桁行4間(9.0m)以上を測る。総柱の建物か桁側に庇をもつ建物になる可能性がある。

主軸方向は、N -61° - Eで、柱間は梁方向2.2m、桁方向2.0 ~ 3.0mである。桁方向のうち

P5 - P6間が3.2mを測り、他(2.0m)と比べて長くなっている。

柱穴の規模は径40 ~ 56cm、深さ26 ~ 57cmである。P2 ~ 4で柱痕が認められ、復元される柱径は20cm前後である。

出土遺物には、備前焼壺592 ~ 594、硯S35、椀形鍛冶滓M88がある。592は備前B期に当たると考えられる。S35は小型の硯で、裏面には線刻による区画が施される。椀形鍛冶滓は、古い時期の遺物が混入したものと考えられる。

出土遺物から、この遺構は15 ~ 16世紀ごろのものと考えられる。



文中写真2 P8遺物出土状況

柵列6 (第158図、P L.18)

15区J9・10、K10グリッドにあり、造成土上面からローム層上面の平坦面で検出したものである。南側1mには掘立柱建物12がある。この建物構造の一部の可能性もあるが、柱筋が通らないことから、ここでは単独の柵列として扱うことにする。

6個以上からなる直線的な配列の柱穴からなるもので、掘立柱建物12に平行する。柱穴間は、1.4～2.1mである。柱穴の規模は径39～58cm、深さ7～24cmである。P1～3・5・6で柱痕が確認されており、復元される柱径は6～10cmである。掘立柱建物12の柱穴に比べて浅く、柱も細い。

出土遺物には、鉄器棒状不明品M89、鉄釘M90がある。正確な時期は不明であるが、層位的に15世紀以降のものと考えられる。

掘立柱建物12とは近接しすぎていることから、伴うものではないと考えられる。

掘立柱建物13（第159・160図、P L.18・37）

15区J9・10、K9・10グリッドにあり、標高37.6mの造成土上面からローム層上面の平坦面で検出したものである。掘立柱建物12・14・15が重複している。

南西から南東側は調査区外へ延びており、また後世の掘削が及んでおり正確な規模・構造は不明な点が多いが、検出した範囲では、梁行2間（7.0m）以上、桁行2間（7.4m）以上と推定される。主軸方向は、N-29°-Eで、柱間は桁方向3.6mである。

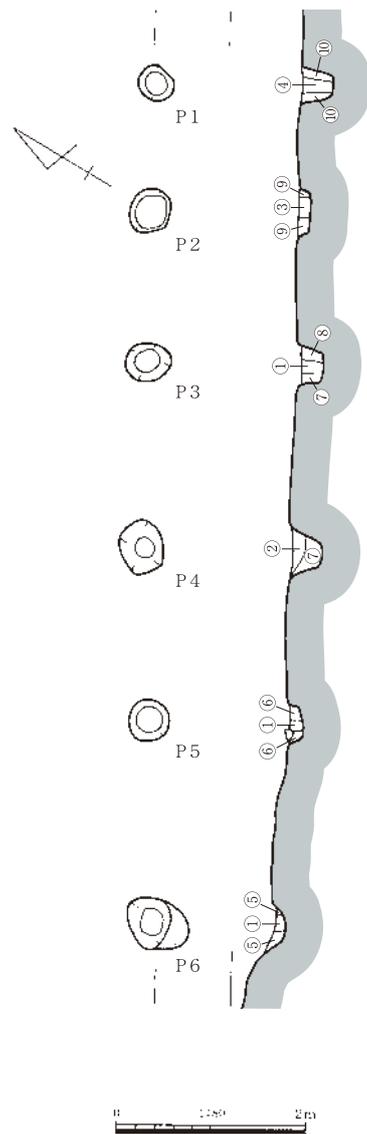
柱穴の規模は径1.06～1.6m、深さ0.5～1.1mと大型である。P2・4で柱痕が認められ、復元される柱径は25cm前後である。

出土遺物には、土師器皿595～597、備前焼甕598・599、鉄器棒状不明品M91、鉄釘M92～94、椀形鍛冶滓M95・96がある。595～597は、京都系土師器皿で、15～16世紀ごろのものと考えられ、この遺構も同時期のものといえよう。

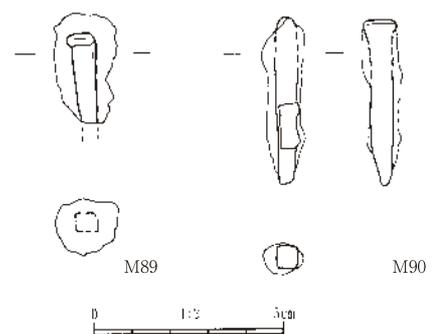
掘立柱建物14（第161図、P L.18）

15区J9・10、K9・10グリッドにあり、標高37.6mの造成土上面からローム層上面の平坦面で検出したものである。掘立柱建物12・13・15が重複している。

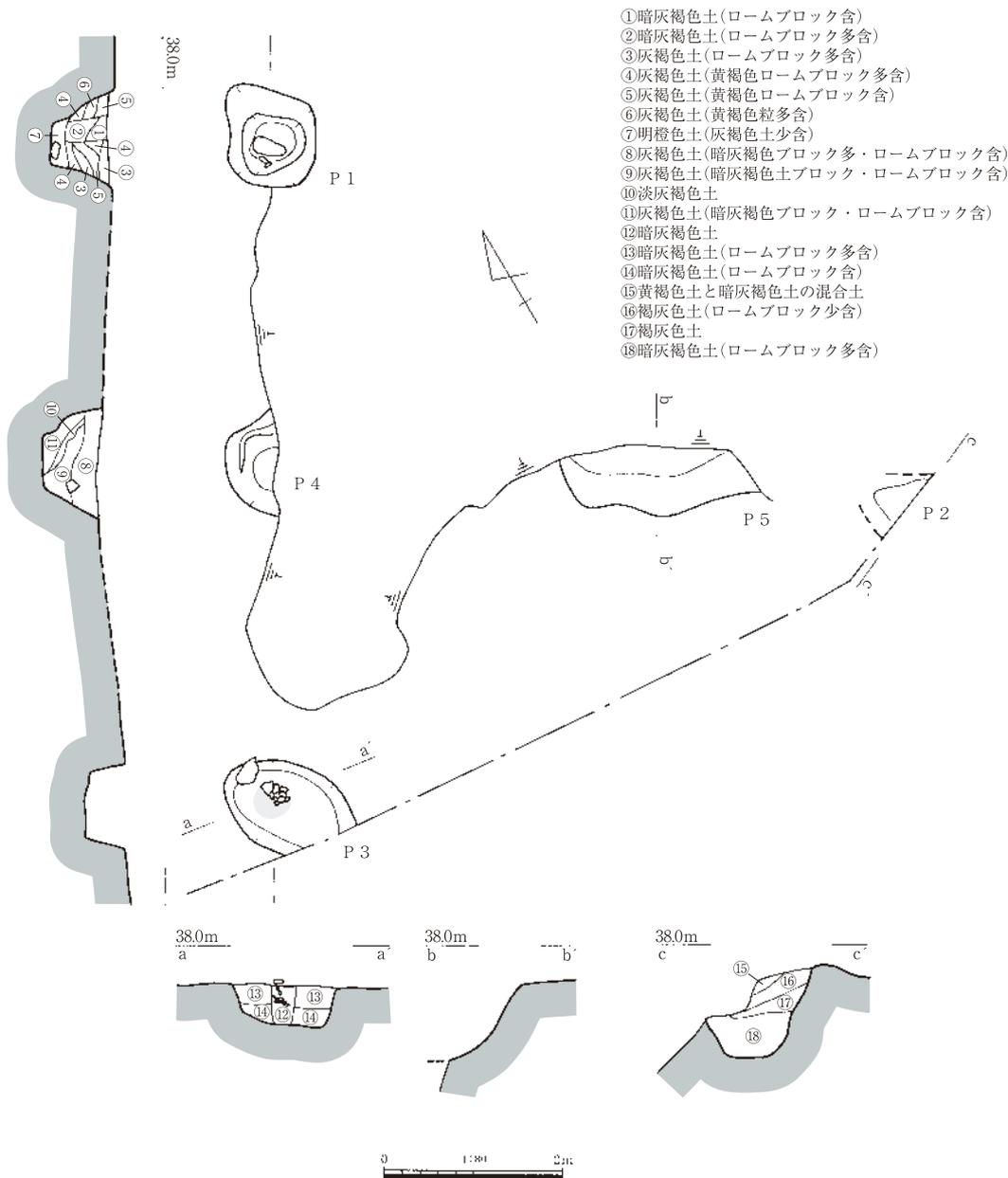
南西から南東側は調査区外へ延びており、また後世の掘削が及んでおり正確な規模・構造は不明な点が多いが、検出した範囲では、梁行1間（3.8m）以上、桁行2間（5.0m）以上と推定される。主軸方向は、N-50°-Eで、柱間は



- ①暗灰褐色土
- ②暗灰褐色土(ロームブロック含)
- ③黄褐色ロームブロック
- ④灰褐色土(ロームブロック、炭多含)
- ⑤灰褐色土(ロームブロック、砂礫多含)
- ⑥暗黄褐色土(ロームブロック、小礫含)
- ⑦暗灰褐色土とロームブロックの混合土
- ⑧暗褐色土
- ⑨暗褐色土(ロームブロック含)
- ⑩暗灰褐色土(ロームブロック多含)



第158図 柵列6・出土遺物



第159図 掘立柱建物13

桁方向 2.4 m である。

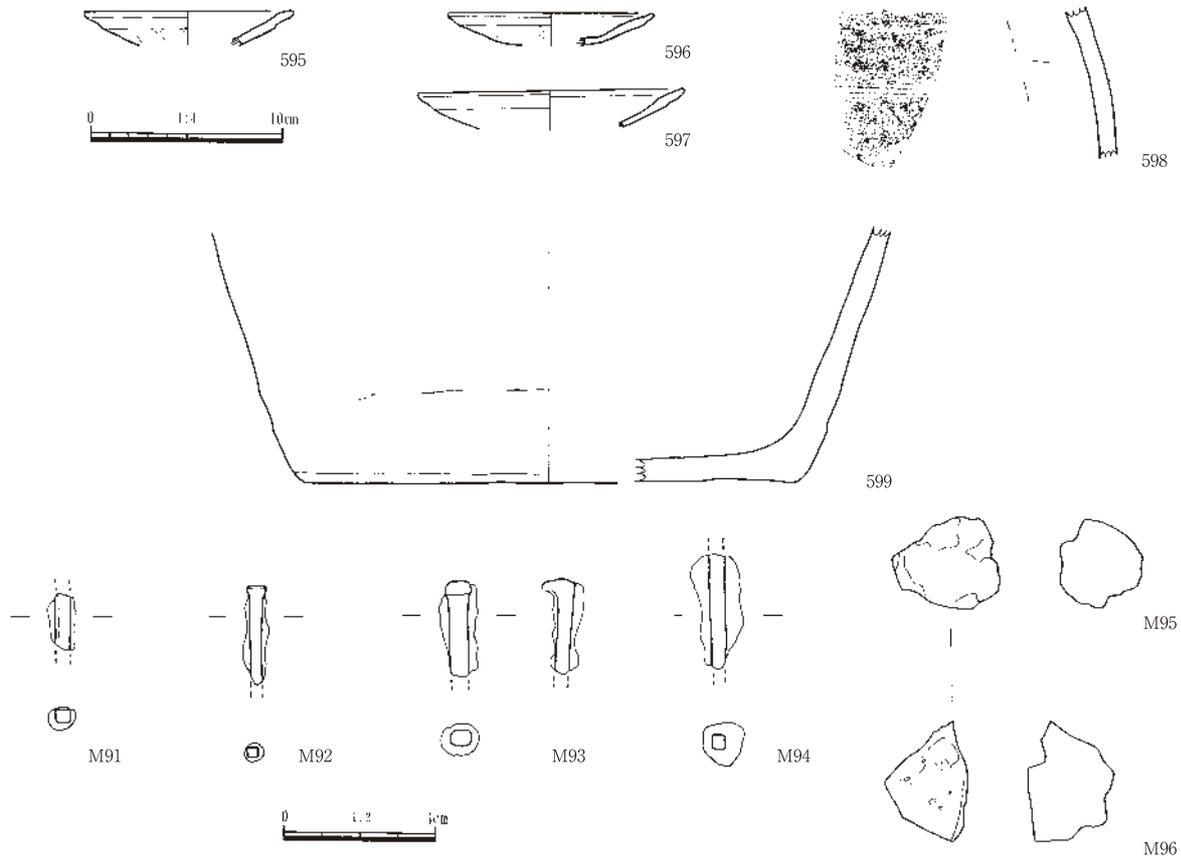
柱穴の規模は径 70 ~ 76cm、深さ 42 ~ 50cm を測る。

出土遺物には、勝間田系須恵器 600、鉄器棒状不明品 M 97 ~ 99、刀子と考えられる M 100 がある。正確な時期は不明であるが、層的には 16 世紀ごろのものと考えられる。

掘立柱建物15 (第162図、P L.18)

15 区造成土上面から地山ローム層上の J 9・10、K 9・10 グリッドにあり、標高 37.8 m の造成土上面からローム層上面の平坦面で検出したものである。掘立柱建物 12 ~ 14 が重複している。

南西から南東側は調査区外へ延びており、また後世の掘削が及んでおり正確な規模・構造は不明な点が多いが、検出した範囲では、梁行 1 間 (4.2 m) 以上、桁行 1 間 (2.8 m) 以上と推定される。主



第160図 掘立柱建物13出土遺物

軸方向は、N -35° - Eである。

柱穴の規模は径 1.0 m前後、深さ 80cm前後を測る。

出土遺物には、土師器坏 601・602、土師器皿 603～606、鉄釘M 101がある。603～606は京都系土師器皿で、15～16世紀ごろのものと考えられる。このことから、当遺構は15～16世紀ごろのものと考えられる。

これら、造成土上面で検出された掘立柱建物は、造成土出土遺物や門前鎮守山城跡出土遺物から、寺院に関連する建物であったと考えることができよう。しかし、いずれも掘立柱型式の建物であり、主要な建物ではなく、付属施設である可能性が高いものとする。

### (3) 柱穴

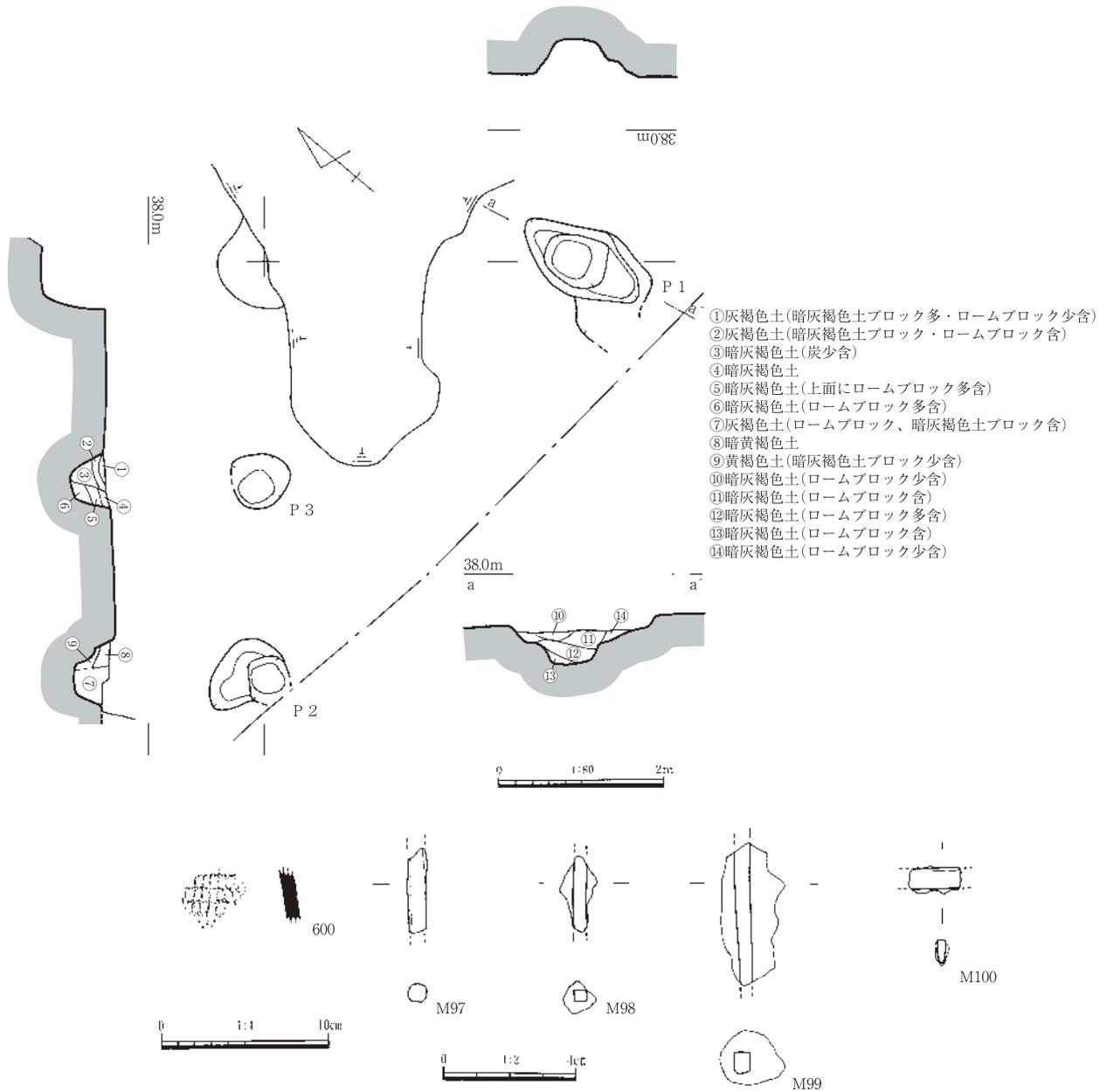
#### 柱穴 55 (第 163 図)

15区造成土上面 J 10 グリッドにあり、南側が掘立柱建物 14 の柱穴に掘り込まれている。

平面は不整楕円形で、長軸 1.4 m、短軸 1.1 m、深さ 40cmを測る土坑状の柱穴である。断面逆台形状を呈す。埋土は、ほぼ水平堆積する 3層に分層できた。

出土遺物には、土師器皿 607、流紋岩製砥石 S 36がある。

出土遺物から、15～16世紀ごろのものと考えられ、切り合い関係から、掘立柱建物 14 より以前のものである。



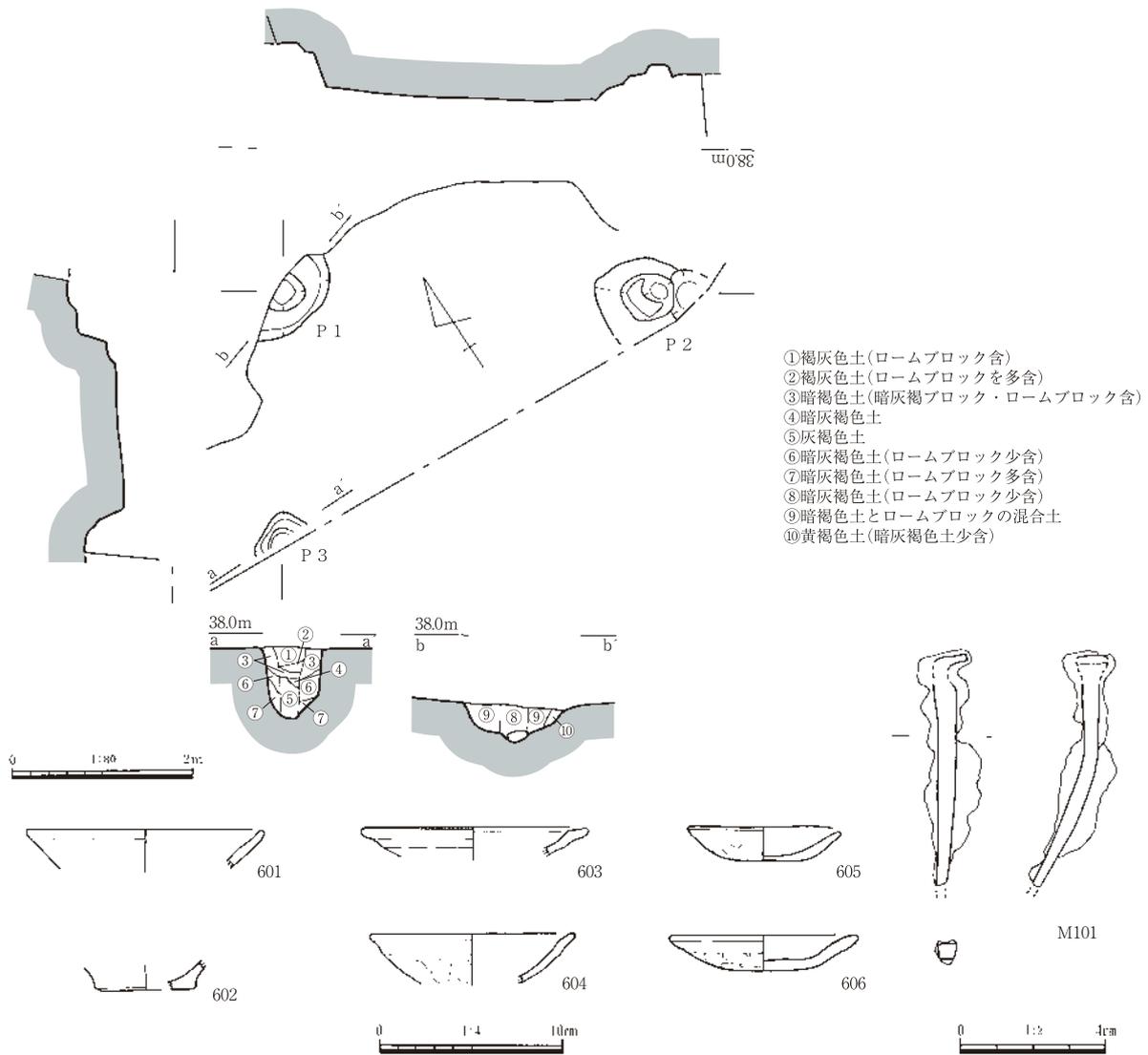
第161図 掘立柱建物14・出土遺物

柱穴56 (第164図、P L.39)

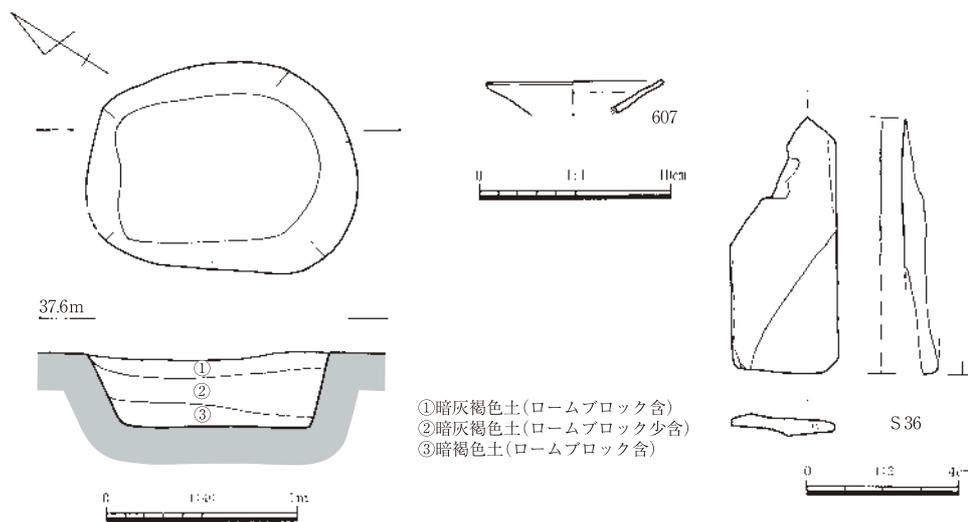
15区造成土上面K9グリッドにあり、南側が掘立柱建物15の柱穴に掘り込まれている。平面は不整楕円形で、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ18cmを測る土坑状の柱穴である。断面逆台形状を呈す。埋土は、単層である。

出土遺物には、土師器皿608～611、鍛冶滓M102、鉄器棒状不明品M103、刀子M104がある。

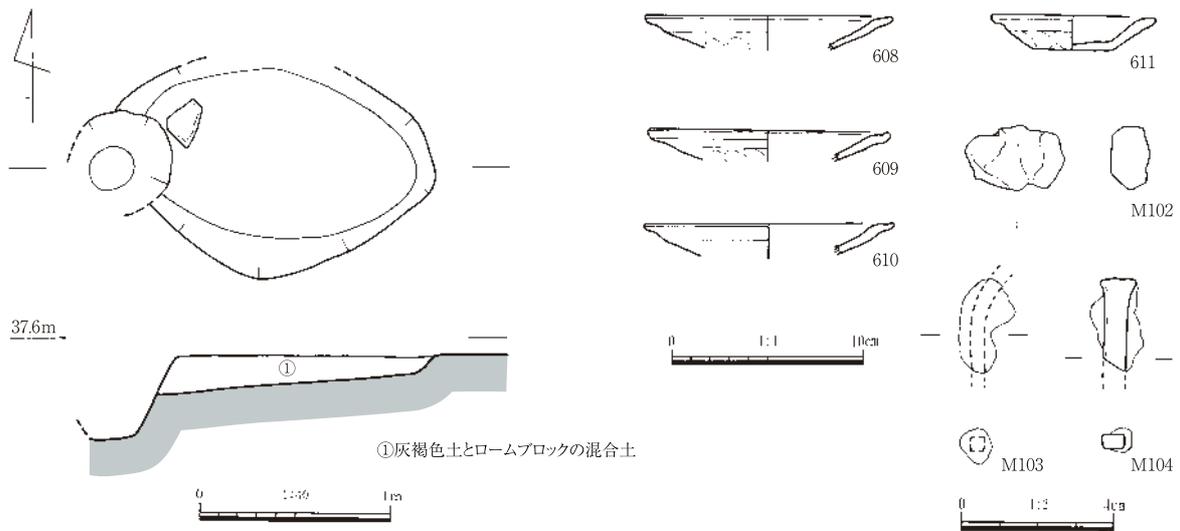
出土遺物から、15～16世紀ごろのものと考えられ、切り合い関係から、掘立柱建物15より以前のものである。



第162図 掘立柱建物15・出土遺物



第163図 柱穴55・出土遺物



第164図 柱穴56・出土遺物

柱穴 57 (第 165 図、P L 39)

15 区造成土上面の K 10 グリッドにある。

平面は不整隅丸三角形で、長軸 0.84 m、短軸 0.76 m、深さ 24cmを測る浅い土坑状の柱穴である。断面逆台形状を呈し、西側に柱痕が認められる。復元される柱径は 27cmである。

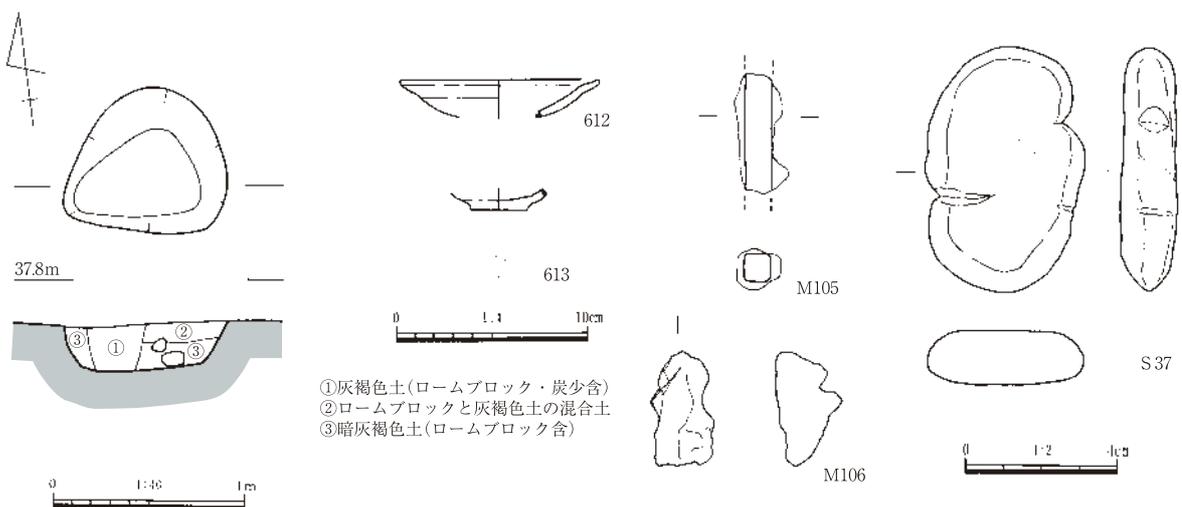
土層を観察すると、1～3層によって柱の裏込めがされている。

出土遺物には、土師器皿 612・613、鉄器棒状不明品 M 105、椀形鍛冶滓 M 106、切目石錘 S 37 がある。出土遺物から、15～16世紀ごろのものと考えられる。

(4) 土坑

土坑 65 (第 166 図)

14 区 10 グリッドにあり、造成土を除去した後に検出することができた。本来は、造成土上から掘り込まれたものと考えられる。

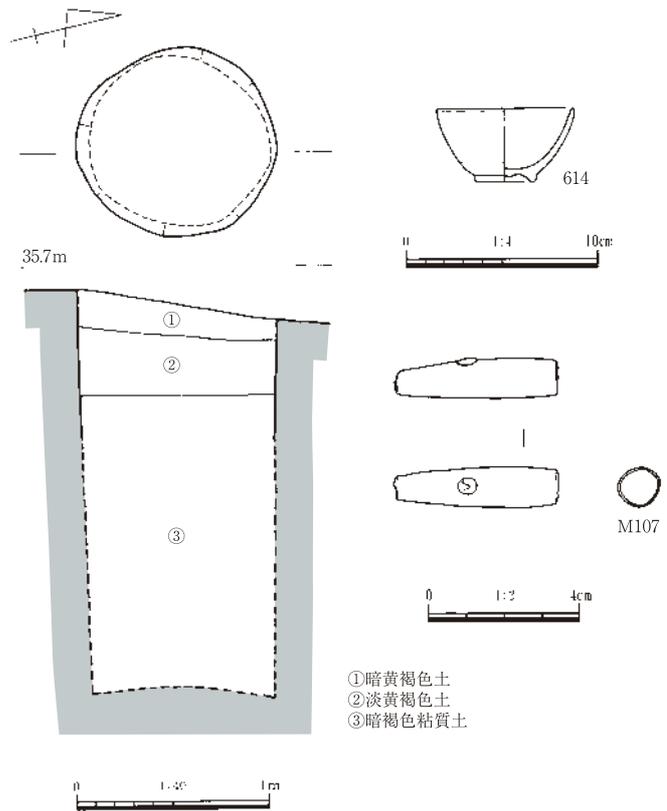


第165図 柱穴57・出土遺物

平面は円形を呈し、径 1.07 m を測る。深さは、湧水が著しく完掘することができず不明であるが、貫入試験の結果検出面から 2.14 m 下で礫層に当たり、底面の可能性はある。

埋土は3層に分層できたが、未完掘のため不明である。各層とも水平堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物には、埋土中から陶器小型碗 614、煙管吸口 M 107 がある。これらの遺物及び形態の特徴から、江戸時代ごろの素掘り井戸と考えられる。



第166図 土坑65・出土遺物

土坑66 (第167図、P L.39)

15区J 10グリッドにあり、標高 37.3 m 付近の造成土上にあり土坑 67 を掘り込んでいる。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸 1.8 m、短軸 1.42 m、深さ 62cm を測る。東側は柱穴が掘り込まれている。埋土中は2層に分層でき、底面付近で礫が出土している。

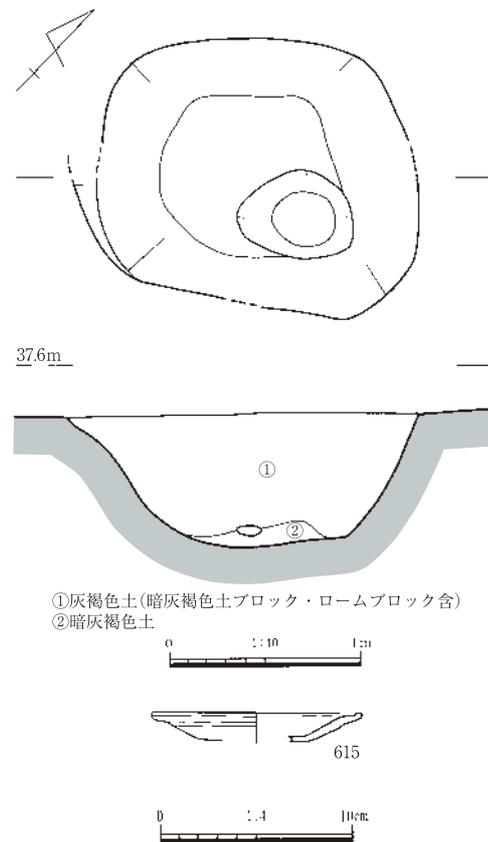
出土遺物には、埋土中からの土師器皿 615 がある。出土遺物から、16世紀以降のものと考えられる。

土坑67 (第168図、P L.39)

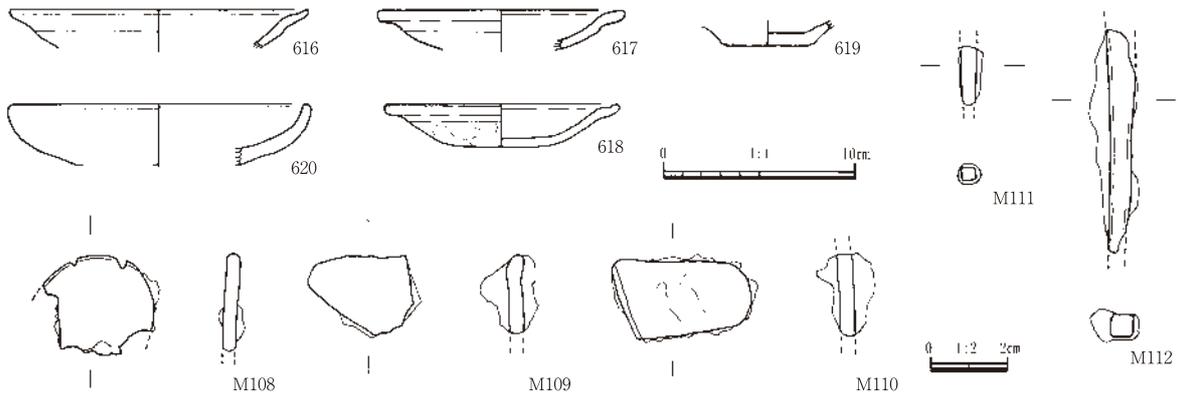
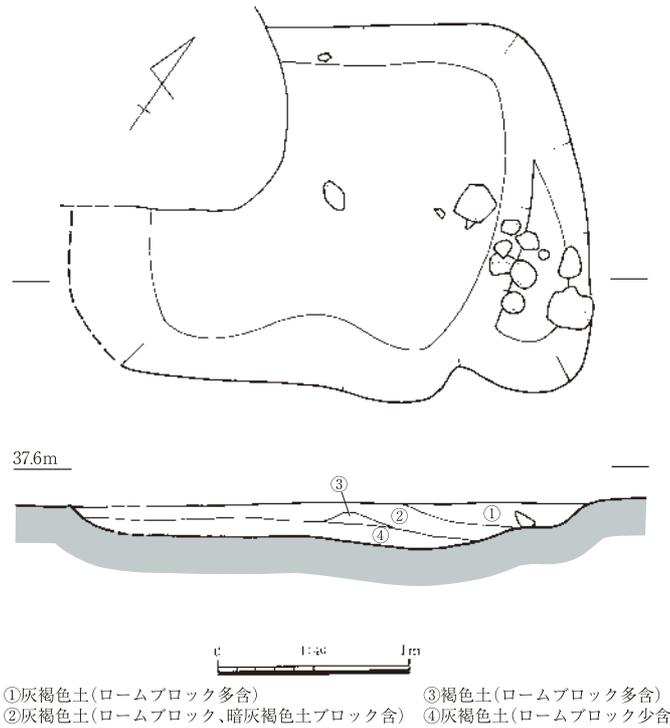
15区J 10グリッドにあり、標高 37.4 m の造成土上にあり土坑 66 に掘り込まれている。

平面は不整隅丸長方形を呈し、長軸 2.7 m、短軸 1.9 m、深さ 37cm 程度と推定される。東側は一部後世に掘り込まれ、埋土中に拳大から人頭大の自然礫が含まれている。埋土は4層に分層できた。

出土遺物には、埋土中から土師器皿 616 ~ 618、土師器坏 619、鍛造円盤状鉄製品 M 108、鑄鉄鍋 M 109・110、鉄器棒状不明品 M 111・112 がある。出土遺物から、16世紀以降のものと考えられる。



第167図 土坑66・出土遺物



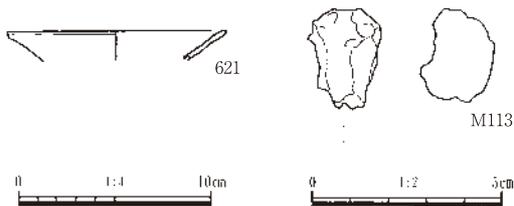
第168図 土坑67・出土遺物

(5) 造成土上面ピット出土遺物(第169図)

ここで、15区造成土上面で検出したピットから出土した遺物について触れることとする。

図化したものは、P 490 から出土した土師器皿 621、鍛冶滓 M 113 である。621 は京都系土師器皿である。

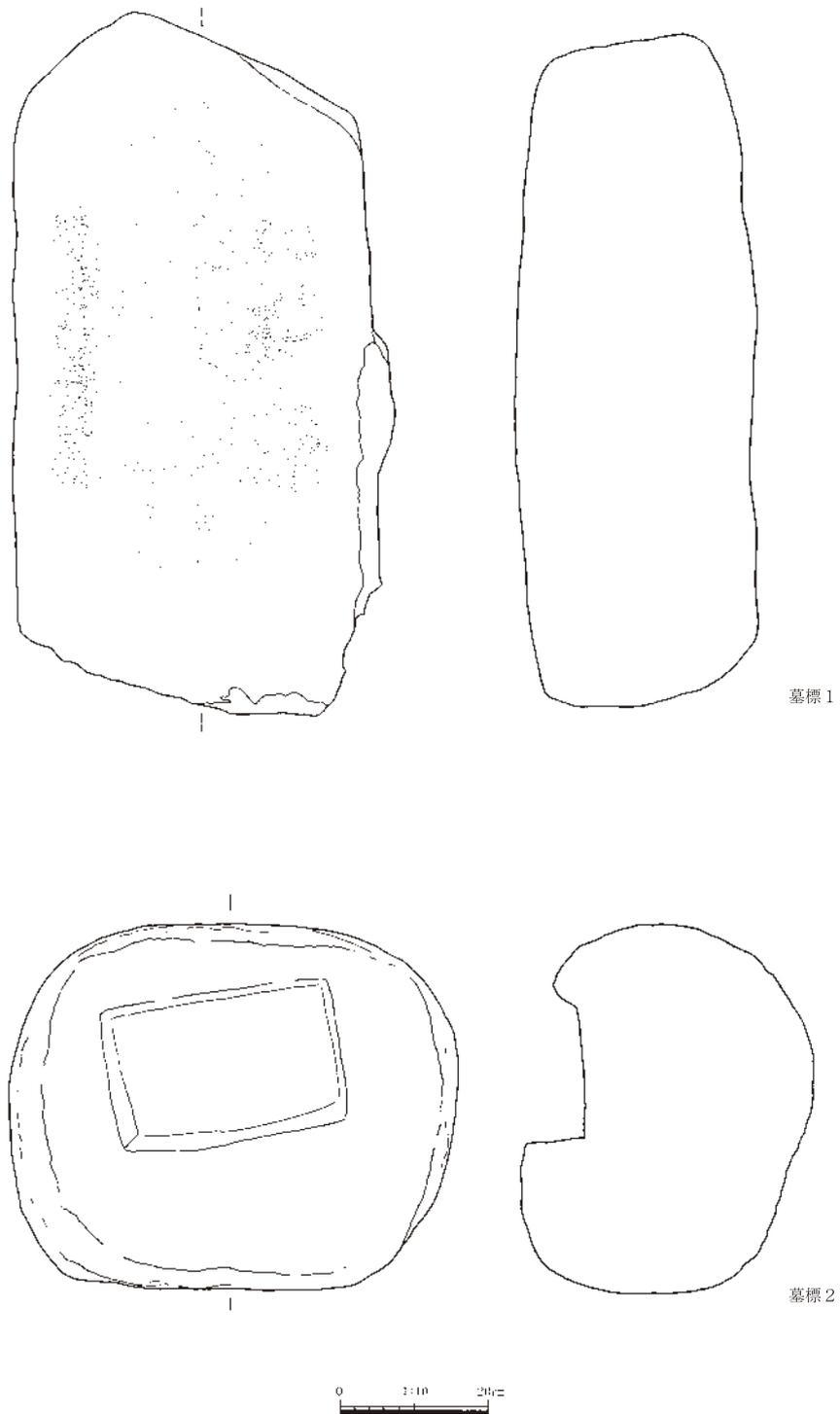
これらは、15～16世紀ごろのものと考えられる。



第169図 ピット出土遺物

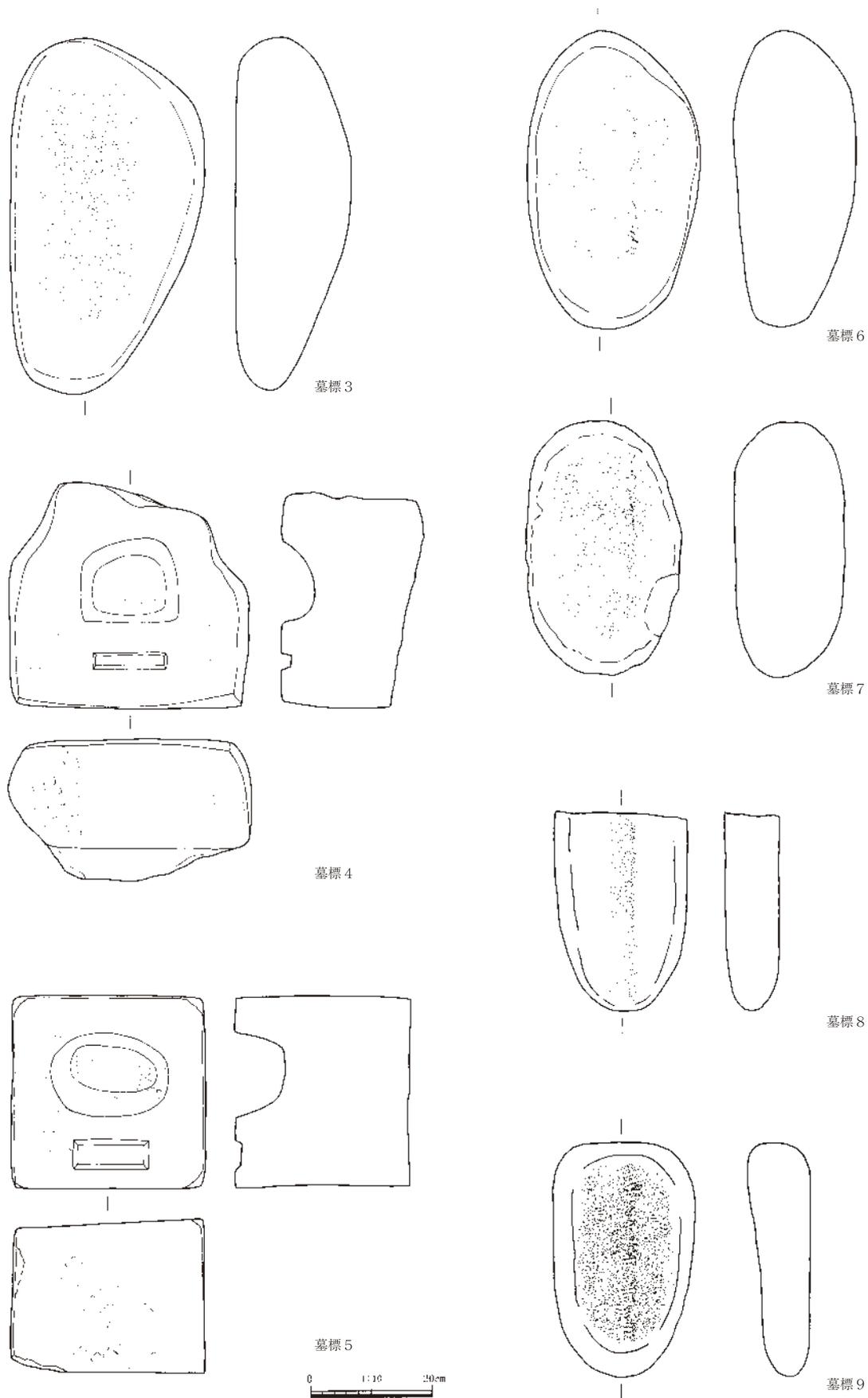
(6) 墓標(第170～172図)

15区南K6グリッド検出作業中に、後世に組まれた石垣上面で転倒していたもの及び石垣に転用されていたものである。墓標6基とそれに付属する台石7基である。

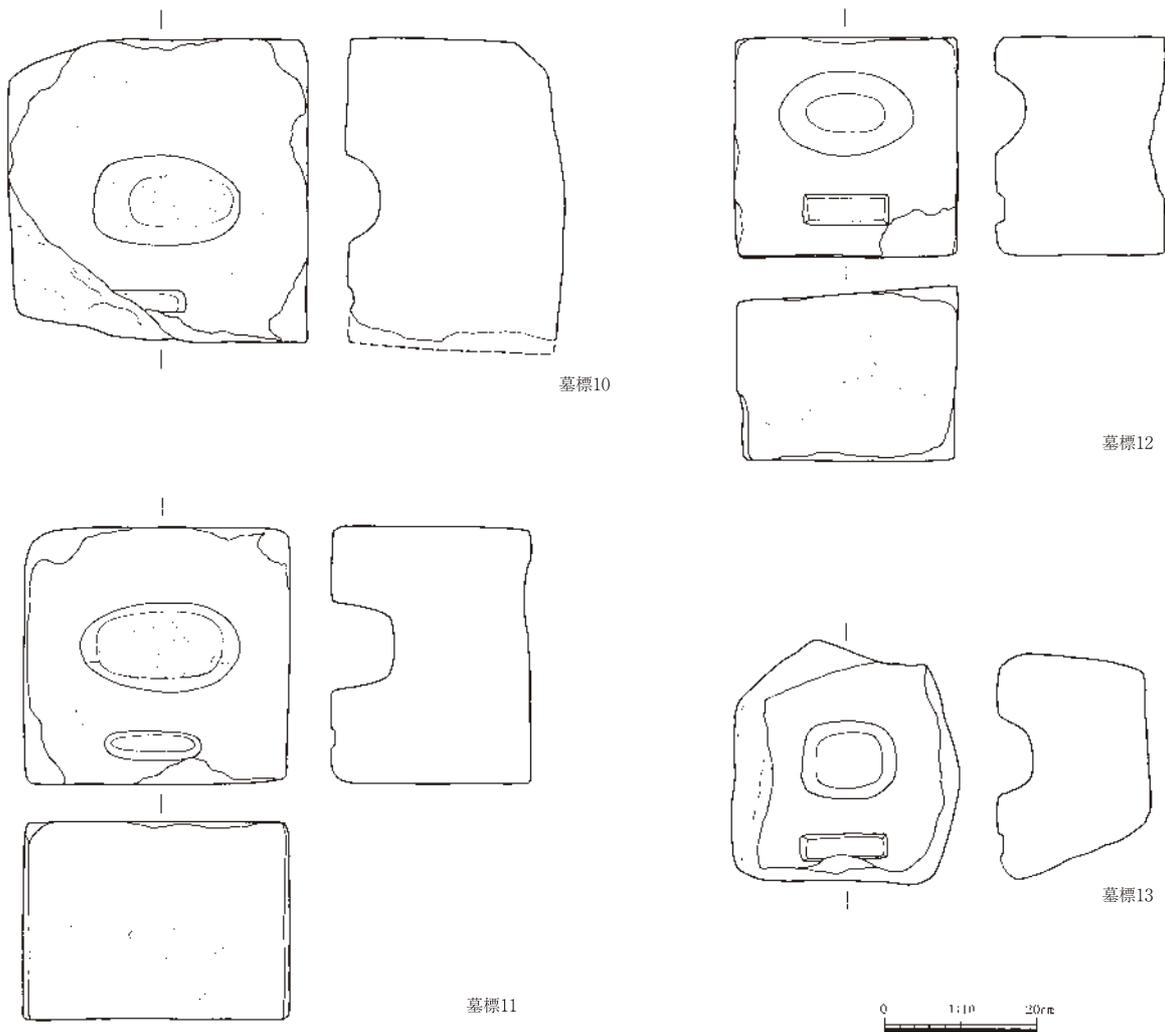


第170図 墓標1・2

墓標はいずれも自然石を用いたものである。台石は、方形に加工したもので中央部分に石塔を安定させるために掘りくぼめ、水鉢を長方形に穿つもの（墓標8・9・10・12）、楕円に穿つもの（墓標11）、ないもの（墓標2）がある。



第171図 墓標3～9



第172図 墓標10～13

これらは、年号から江戸中期享保5年から天保7年にかけてのもので、埋葬施設は伴っておらず、参り墓として集落内に建てられたものが後世石垣等に再利用されたものと考えられる。

現状は、門前集落の希望により、調査区外へ移転して祀られている。

(10) 遺構に伴わない遺物 (第173図、P L.39)

ここで、14・15区造成土上面の表土中及び石列検出中に出土した遺構外遺物について触れることとする。

図化したものは、須恵器口縁部 622、土師器坏 623～625、土師器皿 626～632、瀬戸焼丸皿 633、瓦質土器火鉢 634、瓦質土器火桶 635、青磁碗 636、嘉通寶M 114、寛永通寶M 115・116がある。622は直線的に立ち上がる体部をもつ坏破片で、平安時代ごろのものと考えられる。



文中写真3 墓標検出状況



文中写真4 墓標

土師器皿623～625は静止糸切り底をもち、中森分類によれば、14～15世紀ごろのものと考えられる。

626は在地系の土師器皿、627～632は京都系の土師器皿で、いずれも15～16世紀ごろのものと考えられる。

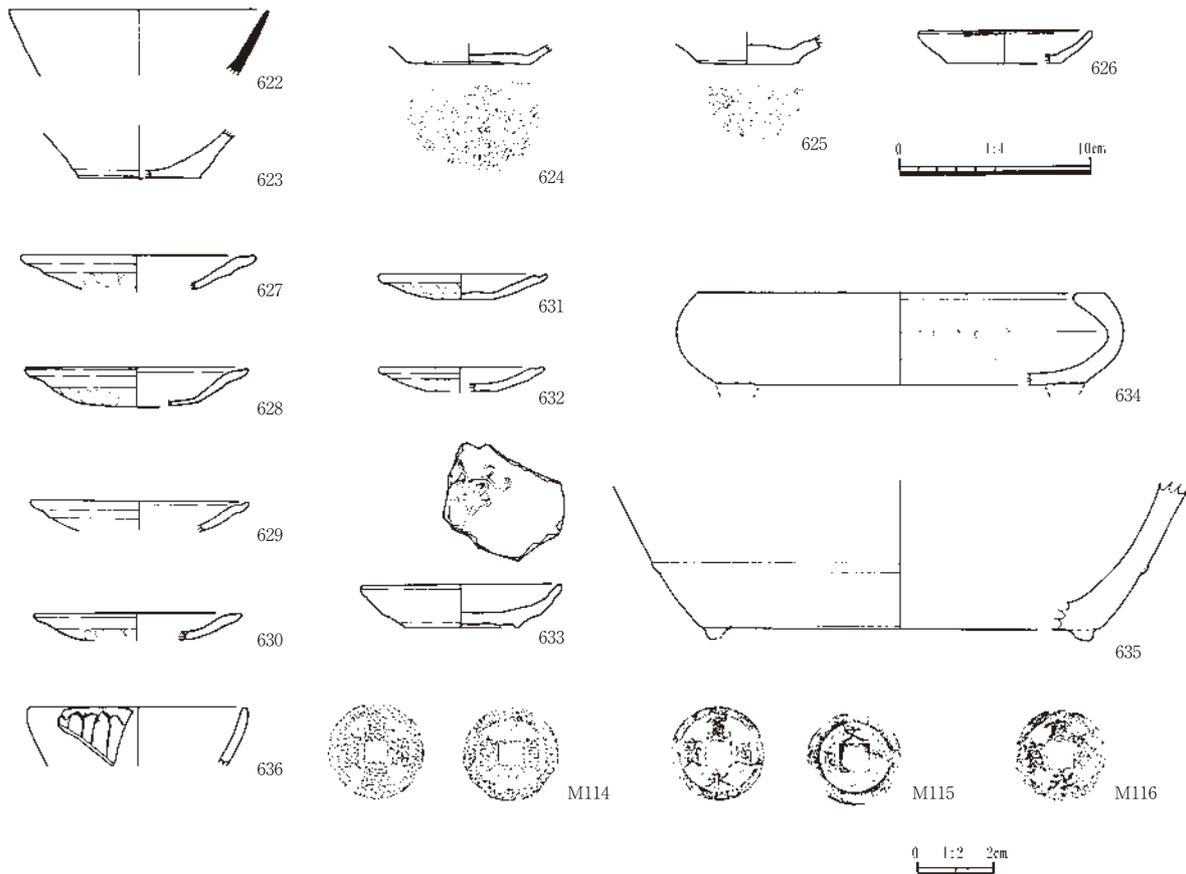
633は内面見込みに印花文が施され、大窯2段階ごろと考えられる。

瓦質土器火鉢634は浅い椀状の体部に脚がつくものである。火桶635は、深い体部に短い脚がつくものである。

青磁碗636は鎬蓮弁をもつもので、青磁碗B-類に分類でき、15世紀ごろのものと考えられる。

M114は背に記号が入る。M15は 期の寛永通寶で、背文である。M116は 期の新寛永である。

これらの遺物は、622、M115・116を除き15～16世紀ごろのものと考えられ、造成土及び造成土上面に営まれた遺構の時期に合致するものである。



第173図 遺構に伴わない遺物

## 第8節 16区の調査

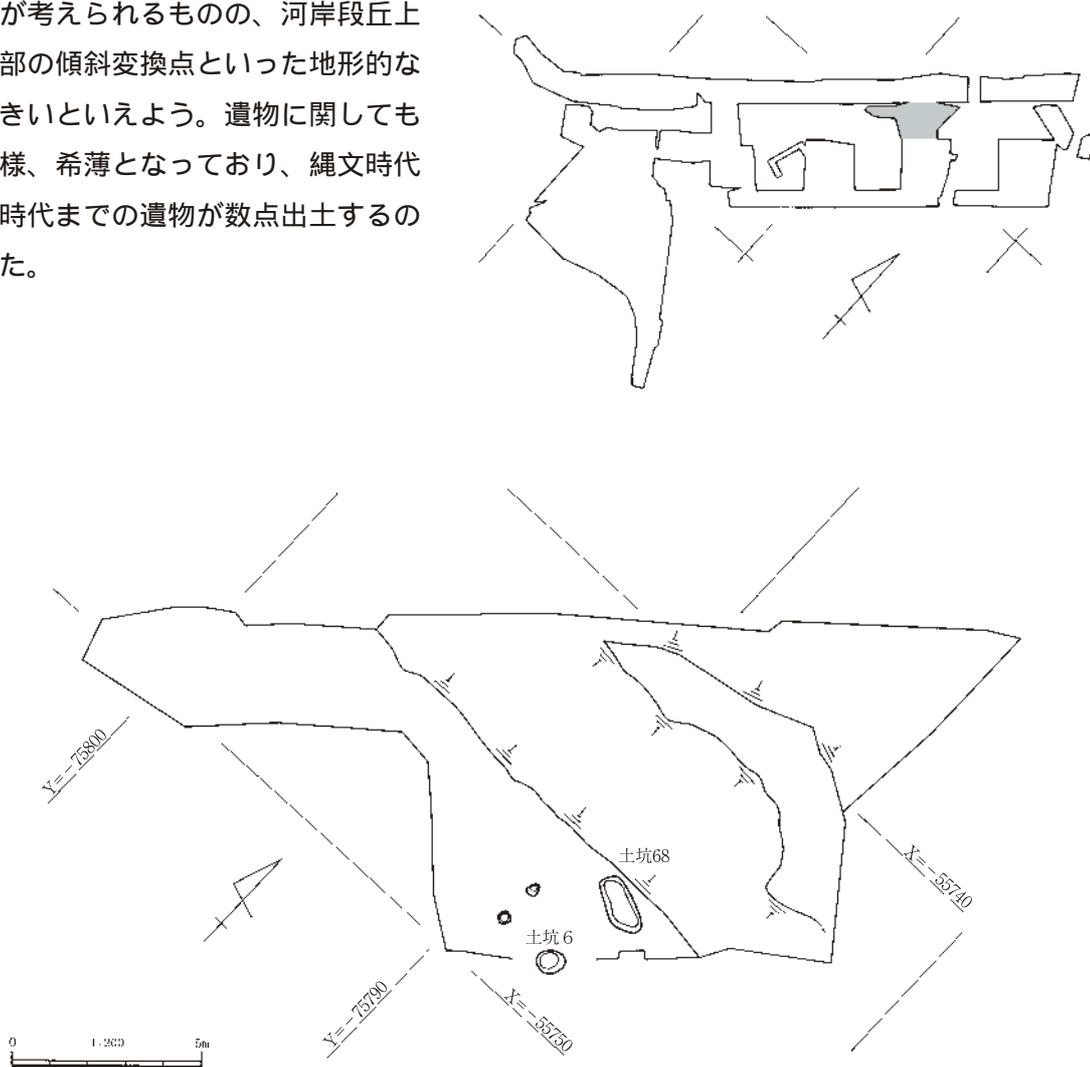
### 1 調査区の概要

遺跡のやや東側に位置しており、河岸段丘上段の縁辺部にあたる。北側は6区、南側は3区と接している。地形は北東方向へ緩やかに下り、調査区北側から段丘中段にかけて急激に落ち込む。この部分は現代の土地造成の際に大幅に削られており、旧地形の様子は大枠でしか捉えることができない。

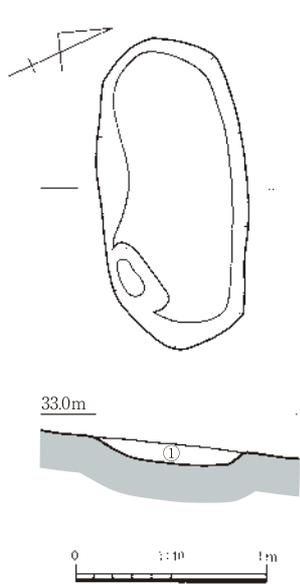
層序であるが、16区では基本層序～層が堆積しており、他の調査区に比べて比較的残りが良かった。遺構の検出作業は～層及びAT上面で行った。遺構を確認できたのは～層及びAT上面であり、～層上面では近世の土坑や溝、落ち込み、・層上面では中世の溝や耕作痕、AT上面では古代以前の土坑やピットを確認した。

### 2 古代以前の遺構・遺物

検出された遺構は土坑2基、ピットのみと希薄であった。このように遺構密度が希薄なのは、後述する中世の溝8・9の掘削によって消失した可能性が考えられるものの、河岸段丘上段の縁辺部の傾斜変換点といった地形的な要因が大きいといえよう。遺物に関しても遺構と同様、希薄となっており、縄文時代から古墳時代までの遺物が数点出土するのみであった。

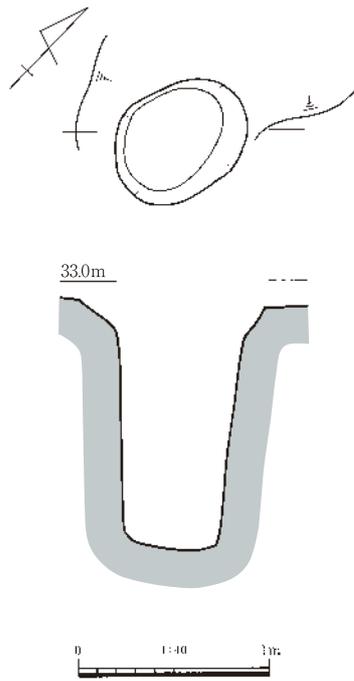


第174図 遺構配置図（古代以前）



①黒褐色土(暗褐色土ブロック、ロームブロック含)

第175図 土坑68



第176図 土坑6

(1) 土坑

土坑68 (第175図、P L.19)

調査区南側に位置しており、A T 上面で検出した。平面形は不定形な楕円形を呈し、規模は長さ 164cm、幅 80cmを測る。底面は比較的平坦であり、南東隅において浅い落ち込みが認められる。断面形は皿状を呈し、深さは 10cmを測る。遺物は出土しておらず時期は不明である。

土坑6 (第176図、P L.19)

調査区南側の調査区境に位置しており、土坑 68 とは 1.5 mほど離れている。平成 16 年度に調査した続きにあたり、北側約半分を A T 上面

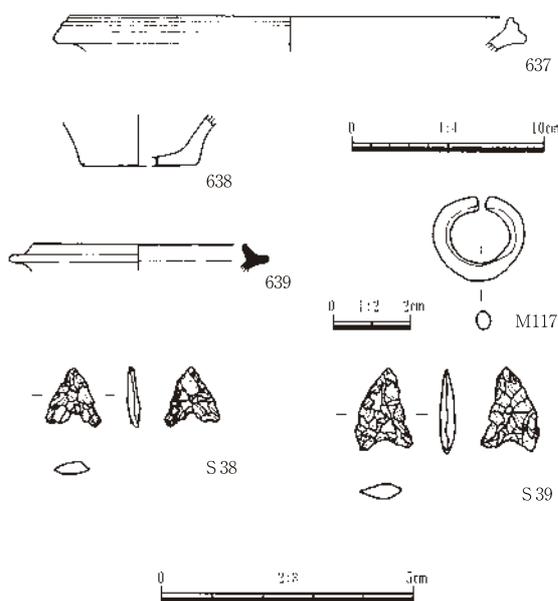
で検出した。

北側は風倒木による攪乱を受けており、上面の一部が消失していた。平面形は不定形な円形を呈しており、規模は長さ 75cm、幅 60cm、深さ 122cmを測る。底面はほぼ平坦であり、底面ピットは認められなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、上面が若干広がっていた。埋土は 層に由来する黒褐色土であり、既刊報告書では色調の違いによって 3 層に分層されている。遺物は出土しておらず時期は不明である。

(2) 遺構に伴わない遺物 (第177図、P L.50)

ここでの遺物量は少なく、当該期の遺物を包含している 層中から出土したものは僅かであり、中世の遺物包含層である ~ 層及び中世以降の遺構中から出土したものが大半を占める。

637 は 層中、638 は 層中、639 は溝 8、M 117 は溝 9、S 38 は土坑 68、S 39 は 層中からの出土である。637・638 は弥生土器の甕で、637 は上下に拡張した口縁端部に 2 条の凹線文ないしは沈線文を施す。638 は底部であり、内外面ともにナデを施し、外面には煤が付着する。639 は須恵器の坏身であり、口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。M 117 は銅製の耳環である。S 38・S 39 は凹基式の石鏃であり、黒曜石製である。



第177図 遺構に伴わない遺物

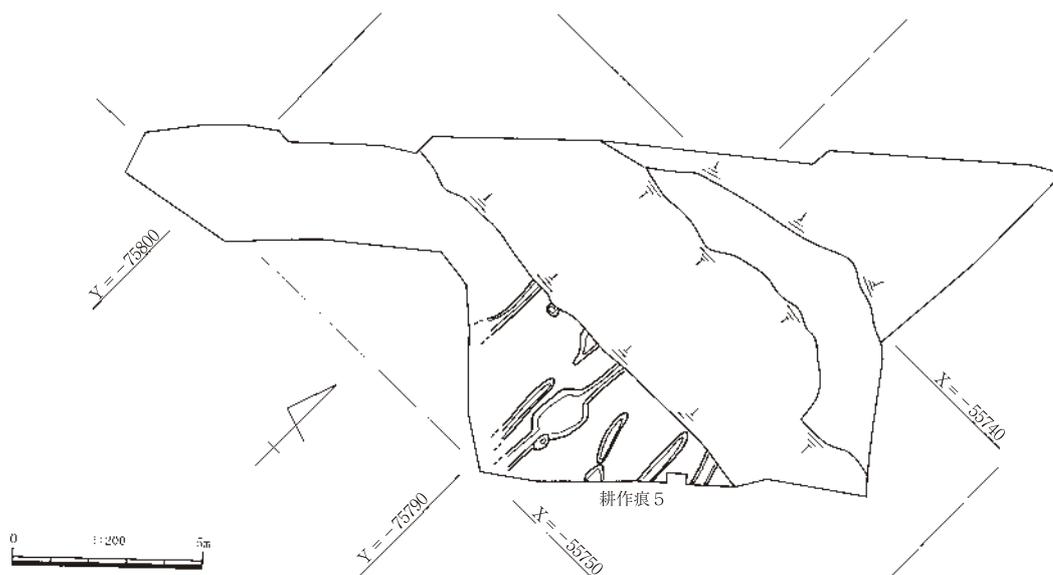
## 2 中世以降の遺構・遺物

調査区の概要のところでも述べたが、この時期の遺構は 層～ 層上面で検出した。調査区の地形が北東方向へ緩やかに傾斜する地形であるため、各層の堆積状況は一様でなく、調査区西側の高い部分にいたっては 層の堆積が認められず、遺構を層位的に捉えていない。しかし、埋土の違いによって各層位で検出されるべき遺構を分離することが可能であり、これをもとに作成した遺構配置図が第178～180図に掲げたものである。これらは第178図 第179図 第180図の順に変遷していくと考えられ、ここでは第178図を下層、第179図を中層、第180図を上層の遺構として報告する。

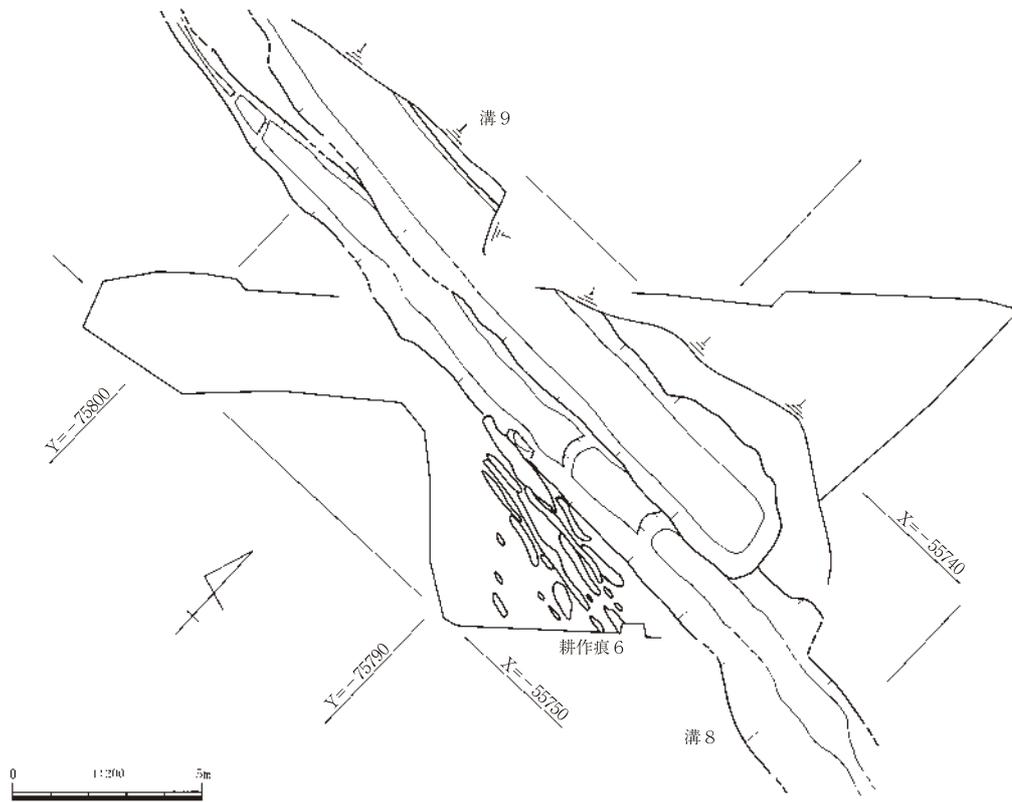
下層の遺構は、溝8・9によって大半が消失しており、確認できた部分は南側の一部である。遺構は 層及びA T上面において検出し、ここでは南北方向に直線的にのびる素掘りの溝を7条確認した。これらは中世の耕作土と思われる 層を埋土にもち、軸の方向がほぼ同じで、形状・規模等に関しても規則性が認められることから、耕作痕5として扱った。

中層の遺構は、 層上面において溝8・9、耕作痕6を検出した。溝8は東西方向に直線的にのびる溝であり、その形状は西側が狭く、東側に行くにつれ広がるものであった。また、底面が東側へ徐所に下っていくことから、排水路としての機能をもっていたと考えられる。埋土中からは棒状不明品や杭など木製品のほか、枝打ち後に廃棄されたと考えられる木の枝、稲の籾殻、種実などが出土しており、当時の排水路の利用状況や栽培植物の様子を知る手掛かりとなると思われる。さらに、この植物の年代を測定したところ、11世紀前後の年代が与えられており、付近から土師器の坏や皿などが出土していることから、在地の土器の年代を決定する手掛かりになると思われる。

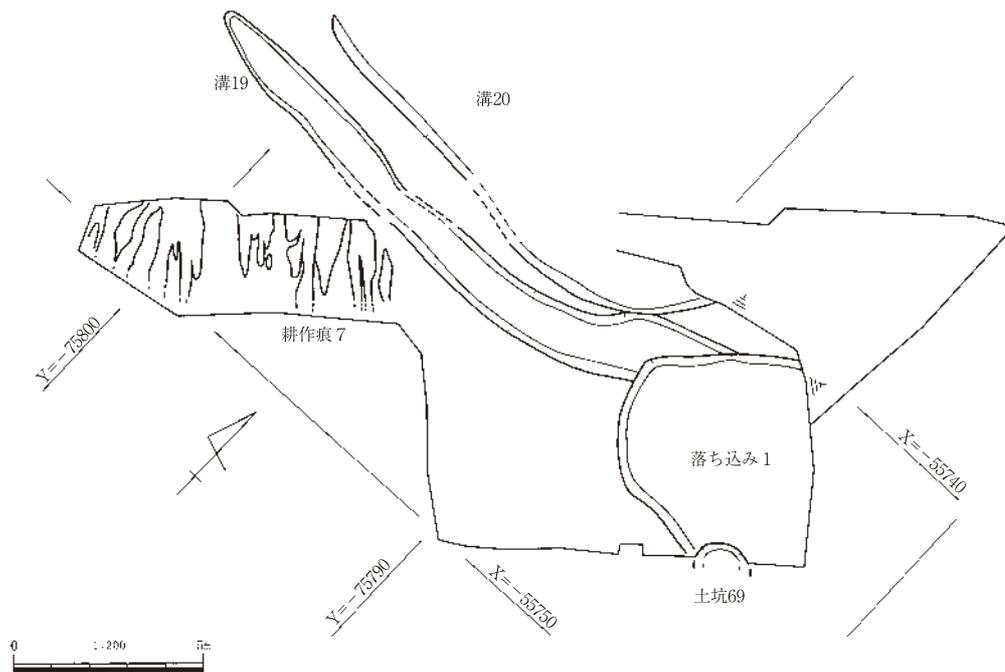
溝9は溝8と重複しており、軸の方向が同じであることから、溝8の段階で形成された地割りを踏襲して築かれた可能性がある。この溝は区画溝ないしは堀としての機能を有していたと考えられ、その東岸においてロームブロックを含んだ土が盛られていたことから、土塁を伴っていた可能性が高い。平成16年度の調査ではこの溝と直交する柵列1が確認されており、この時期には溝や堀、さらには柵列によって区画された集落ないしは屋敷地が形成されていたものと推察される。



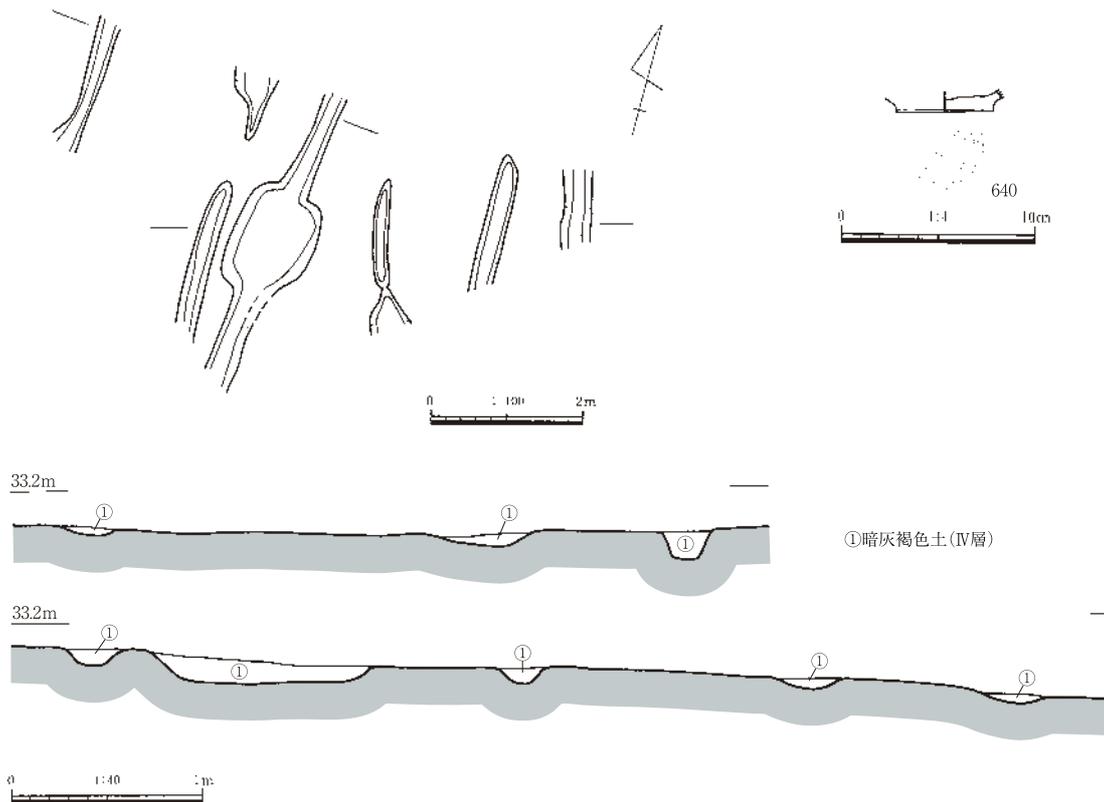
第178図 遺構配置図（中世以降・下層）



第179図 遺構配置図(中世以降・中層)



第180図 遺構配置図(中世以降・上層)



第181図 耕作痕5・出土遺物

耕作痕6は埋土が層からなり、溝9の廃絶後、すなわち集落及び屋敷の廃絶後に形成されたものと考えられる。このよう集落及び屋敷地が耕作地へと転換していく様子は9・14・15区においても確認でき、この遺跡における土地利用の様子を特徴づける遺構といえよう。

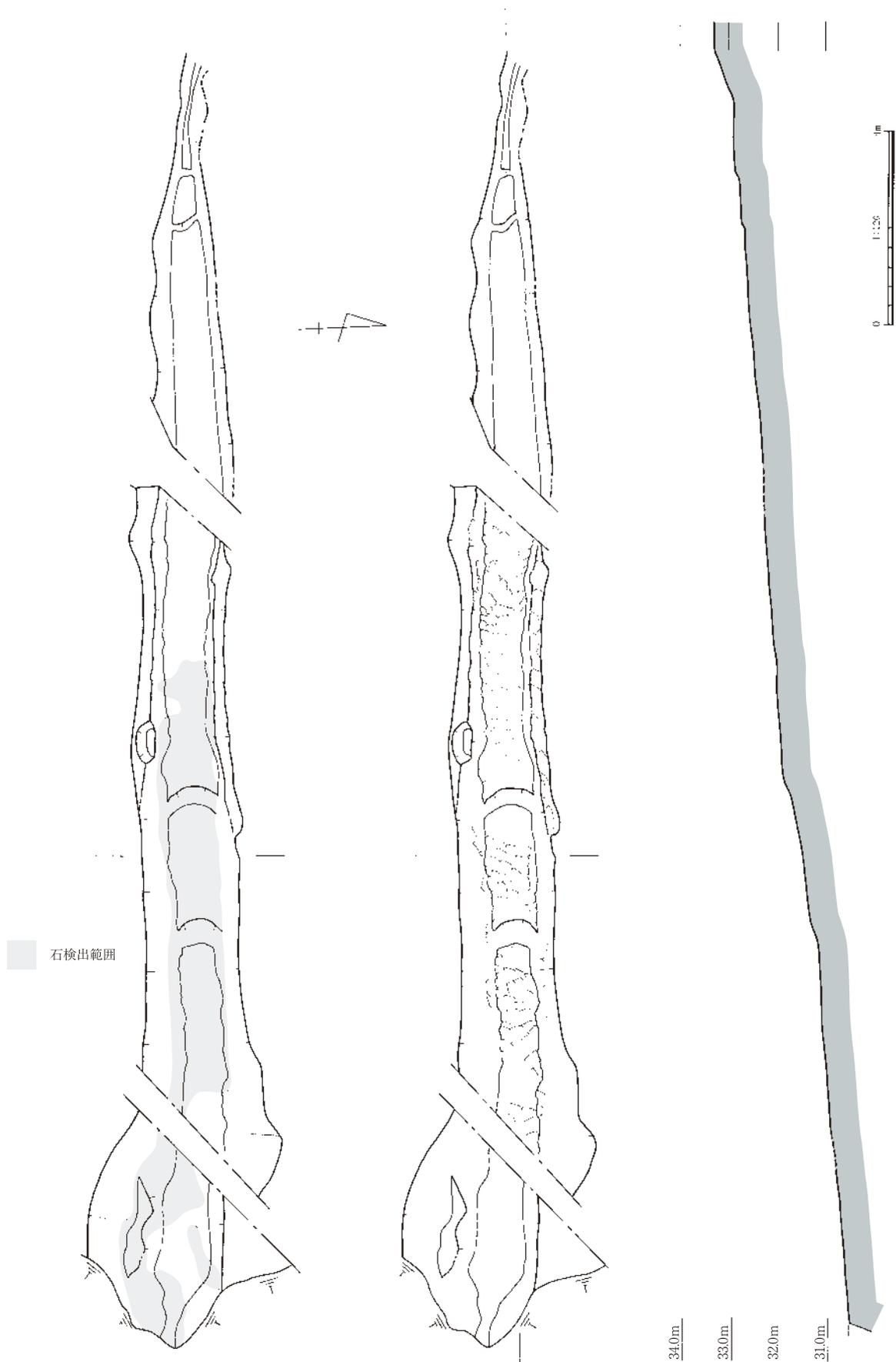
上層の遺構は、層上面において土坑69、溝19・20、落ち込み1を検出した。これらの埋土は層からなるものであり、おおむね近世以降のものと考えられる。このうち溝20は「溝」といった遺構名を冠しているが、落ち込み1と同様、耕作に伴う落ち込みの可能性が高い。

#### (1) 下層の遺構

##### ア 耕作痕

##### 耕作痕5 (第181図)

調査区南側に位置している。北側は溝8・9によって切られており、南側は調査区外にのびている。遺構の検出は層及びAT上面で行い、南北方向にのびる素掘りの溝7条を検出した。溝はほぼ直線的となるが、土坑状ないしは不定形に落ち込む箇所が数箇所認められる。断面形は「U」字状ないしは逆台形状を呈し、規模は幅18～38cm、深さ8～28cmを測る。埋土は層となっており、そこから土師器の坏640が出土している。時期は中世前期と考えられる。



第182図 溝8

## (2) 中層の遺構

## ア 溝

## 溝8 (第182・183図、P.L.19・20・41)

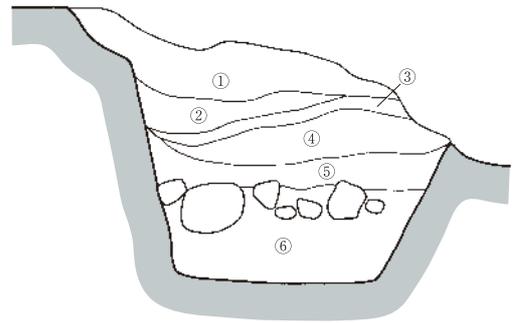
調査区中央に位置しており、東側は3区、西側は6区へと伸びる。平成16年度に調査した続きにあたる。前回の調査では3区にかかる箇所を溝9と報告していたが、今回の調査によって溝8の続きであることが判明した。第182図に掲げたものは前回調査した成果を合成したものである。

層除去後、層上面で検出した溝である。ほぼ直線的にのびており、軸はN-82°-Wとほぼ東西方向を向く。形状は西側が狭くなり、東側にいくにつれ広がっていく。底面は東側に向かって徐々に下り、その傾斜角は6~14°となる。規模は幅40~340cm、深さは10~192cmを測る。底面には工具の痕跡が残っており、凸凹が顕著に認められ、さらに幾つかの箇所において深さ15cmほどの段が形成されていた。

埋土は主に灰褐色土ないしは暗灰褐色系の粘質土であり、底面よりやや浮いた状態で一辺12~55cmほどの円礫を中央より東側において多量に検出した(文中写真5)。この礫群の上下層からは棒状不明品W1・W2、杭、板材といった木製品のほか、枝打ちされた木の枝、稲の籾殻、稲やドングリなどの種実といった植物遺体が出土し(文中写真6)、この中の一部には焼却処分に失敗したと考えられる板材や枝なども含まれていた。このため、ここで確認した礫群や植物遺体などは廃棄された可能性が高いといえる。なお、木の枝の年代を測定したところ、11世紀前後の年代が示されている(第5章第5節参照)。

遺物は溝の底面付近より641~644、礫や植物遺体が多量に出土した5・6層付近からは645~649、W2・W3、それ以上からは650~657、M118~M121が出土した。なお、15区で報告した褐釉陶器の壺408の破片が上層から出土している。641~643・645・646・650~652は土師器の坏である。642・650は体部との境に段が認められ、底部の切り離しは回転糸切りである。646は高台が付くもので古代のものと考え

33.2m



0 1:10 1:m

- ① 灰褐色土(ロームブロック・炭少・鉄分・マンガン含)
- ② 灰褐色土(にぶい褐色土・黒褐色土ブロック僅含)
- ③ 暗灰色粘質土(黒色土・ロームブロック僅含、上面鉄分・マンガン沈着)
- ④ 暗赤灰色粘質土(炭含、上面鉄分沈着)
- ⑤ 暗灰色粘質土(ロームブロック僅・炭含)
- ⑥ 浅褐灰色粘質土(黒褐色土・ロームブロック少・礫多含)

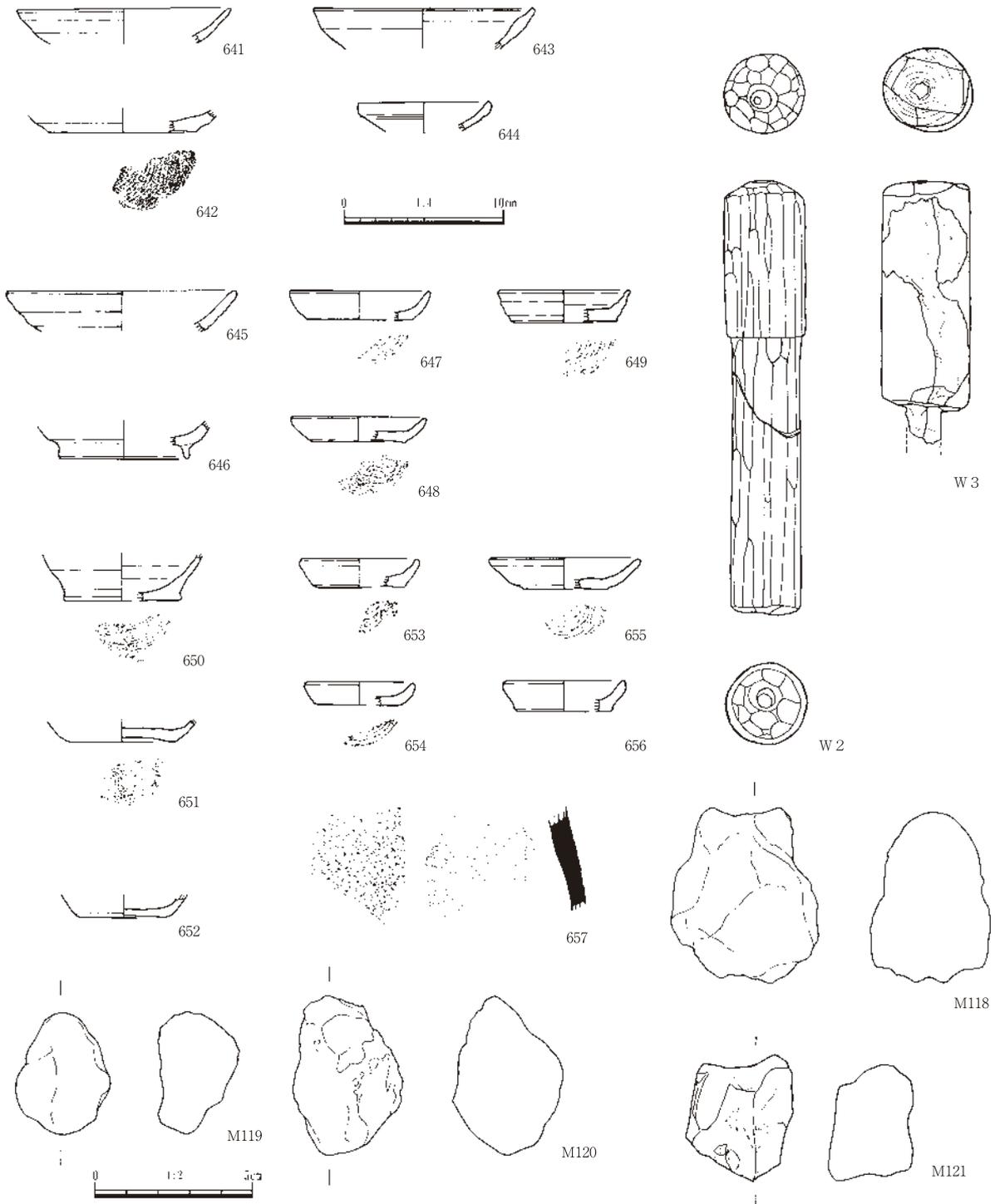
第183図 溝8



文中写真5 溝8石検出状況



文中写真6 溝8出土種実



第184図 溝8出土遺物

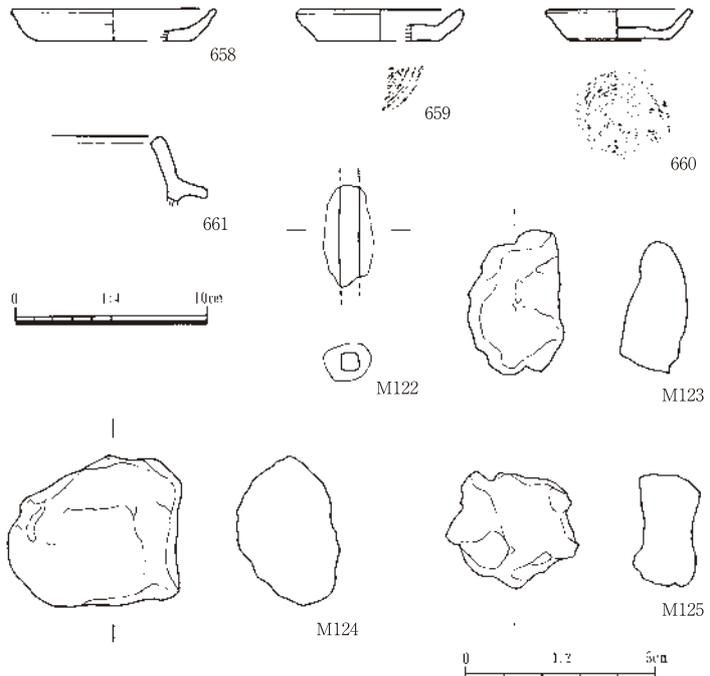
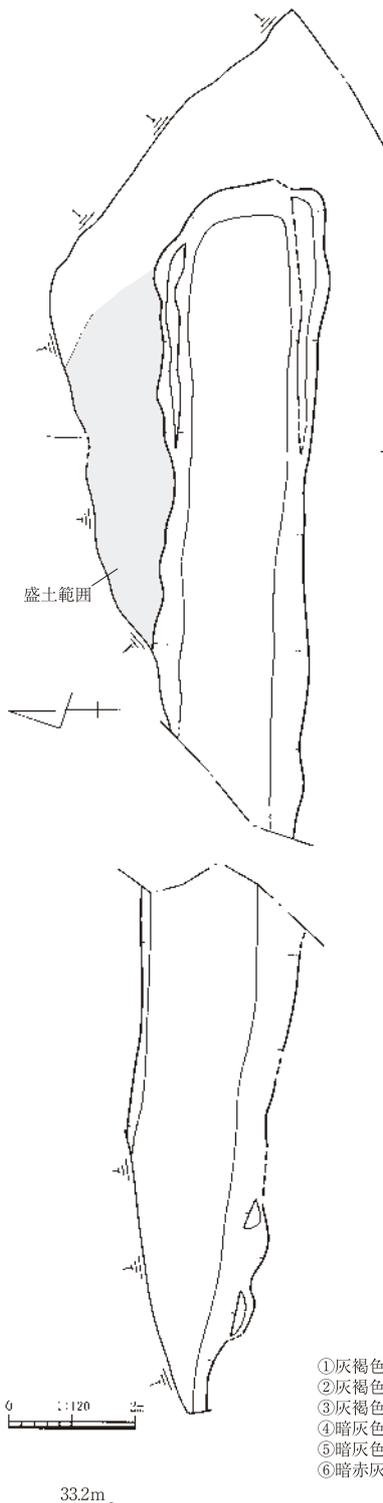
られる。651は底部が上げ底となる。644は白磁皿類であり、玉縁状の口縁部をもつ。647～649・653～656は土師器の皿で、647～649・653～654の底部は回転系切りである。657は中世須恵器の甕で外面には格子状の叩き、内面には横方向のハケメを施す。W2・W3は棒状不明品であり、W2の材質はキブシ、W3はアカマツないしはクロマツである（第5章第1節参照）。M118・M120は椀形鍛冶滓、M119は鍛冶滓、M121は流動滓である。

溝9 (第185・186図、P L.20・40)

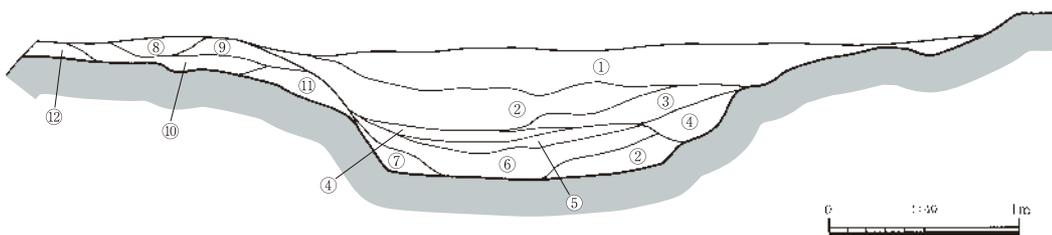
溝8と重複する溝であり、切り合い関係から当遺構が新しい。平成16年度に調査した続きにあたり、層上面で検出した。第185図に掲げているものは前回調査した成果を合成したものである。

ほぼ直線的にのびる溝であり、軸はN - 86° - Wとほぼ東西方向を向く。掘り方は東側で終わっており、その端部は方形を呈している。底部はほぼ水平で平坦である。規模は幅205 ~ 285cm、深さ67cmを測り、断面形は逆台形状を呈している。

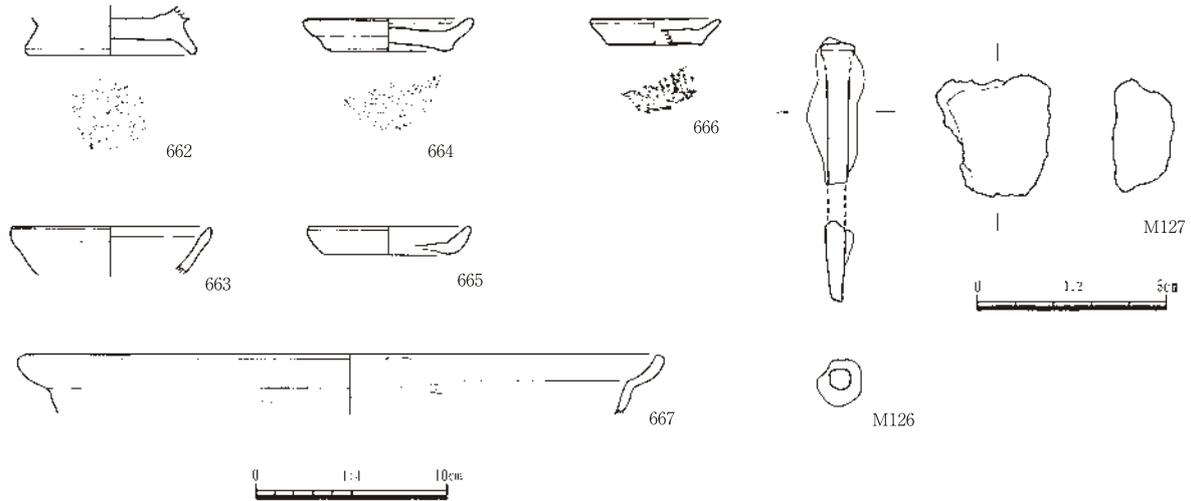
溝の北岸ではロームブロックを含む灰褐色土ないしはロームブロックで構成された土が30cmほど盛られており、土塁を伴っていたものと考えられる。また、溝の下層にはこれと同様の土が厚く堆積しており、溝9は廃絶後において、土塁を壊した土によって埋められたものと捉えることができる。



- ① 灰褐色土(ロームブロック・炭・鉄分・マンガン含)
- ② 灰褐色土(ロームブロック・鉄分・マンガン含)
- ③ 灰褐色土(ロームブロック含、下面マンガン・鉄分沈着)
- ④ 暗灰色土(ロームブロック含、上面鉄分沈着)
- ⑤ 暗灰色土(ロームブロック多・鉄分含)
- ⑥ 暗赤灰色粘質土
- ⑦ ロームブロックと灰色土の混合土
- ⑧ 暗褐色粘質土(ロームブロック少含、盛土)
- ⑨ 灰褐色土(ロームブロック含、盛土)
- ⑩ 灰褐色土(ロームブロック多含、盛土)
- ⑪ ロームブロックと灰色土の混合土(盛土)
- ⑫ 灰褐色土(ロームブロック少・黒褐色土ブロック含、盛土)



第185図 溝9・出土遺物



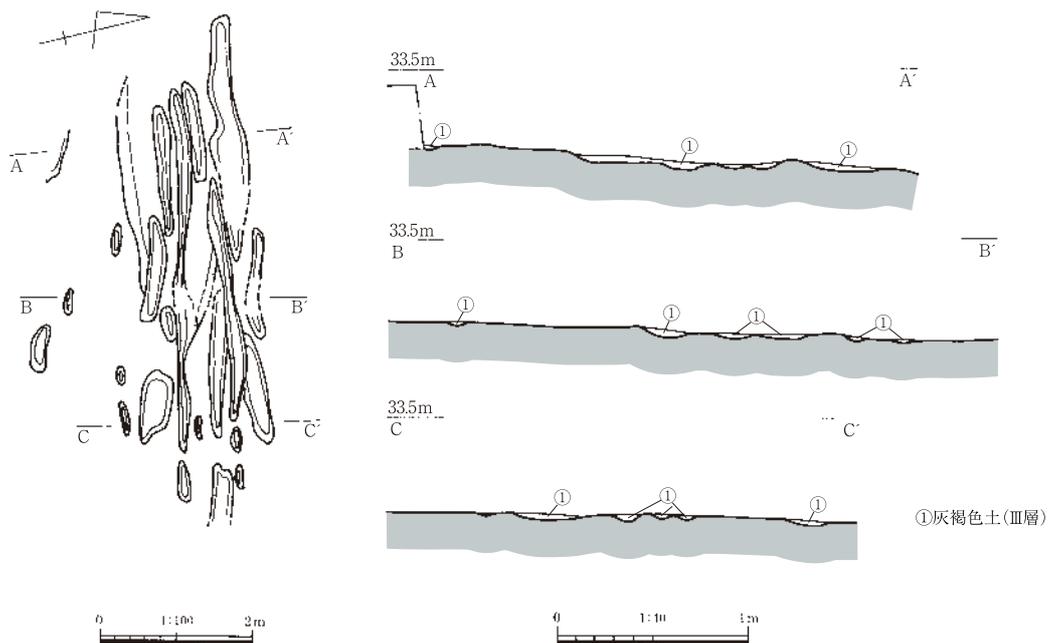
第186図 溝8・9出土遺物

遺物は埋土中から 658 ~ 660、土塁から 661 が出土した。658 ~ 660 は土師器の皿、661 は瓦質の羽釜である。M 112 は鉄製品で棒状不明品、M 123・M 124 は椀形鍛冶滓、M 125 は粘土質溶解物である。この他、溝8と溝9のどちらに帰属するのか判断できなかったものとして、662 ~ 667、M 126・M 127 がある。

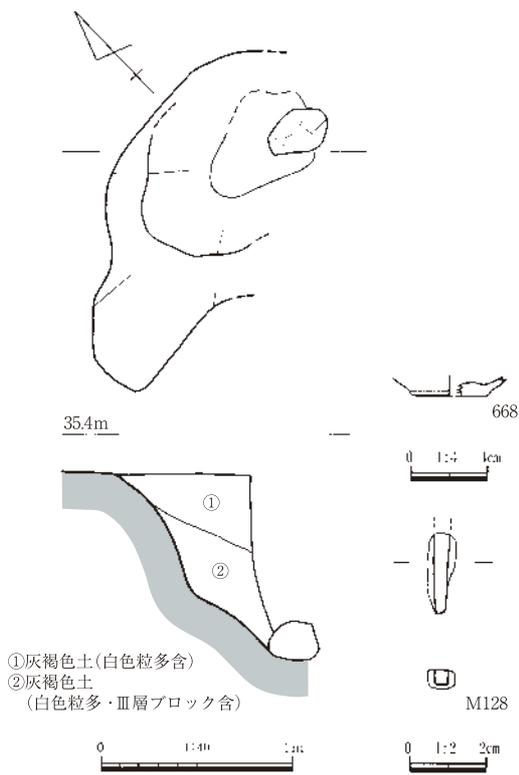
### イ 耕作痕

#### 耕作痕6 (第187図)

調査区南側に位置しており、溝8・9を切っている。遺構の検出は 層上面で行った。遺構は東西方向に直線的にのびる溝群で構成され、軸はN - 76° - Wとやや北に振れている。掘り方は不明瞭であり、断面形は皿状を呈する。規模は幅8 ~ 48cm、深さ4cmを測り、埋土は 層である。



第187図 耕作痕6



第188図 土坑69・出土遺物

(3) 上層の遺構

ア 土坑

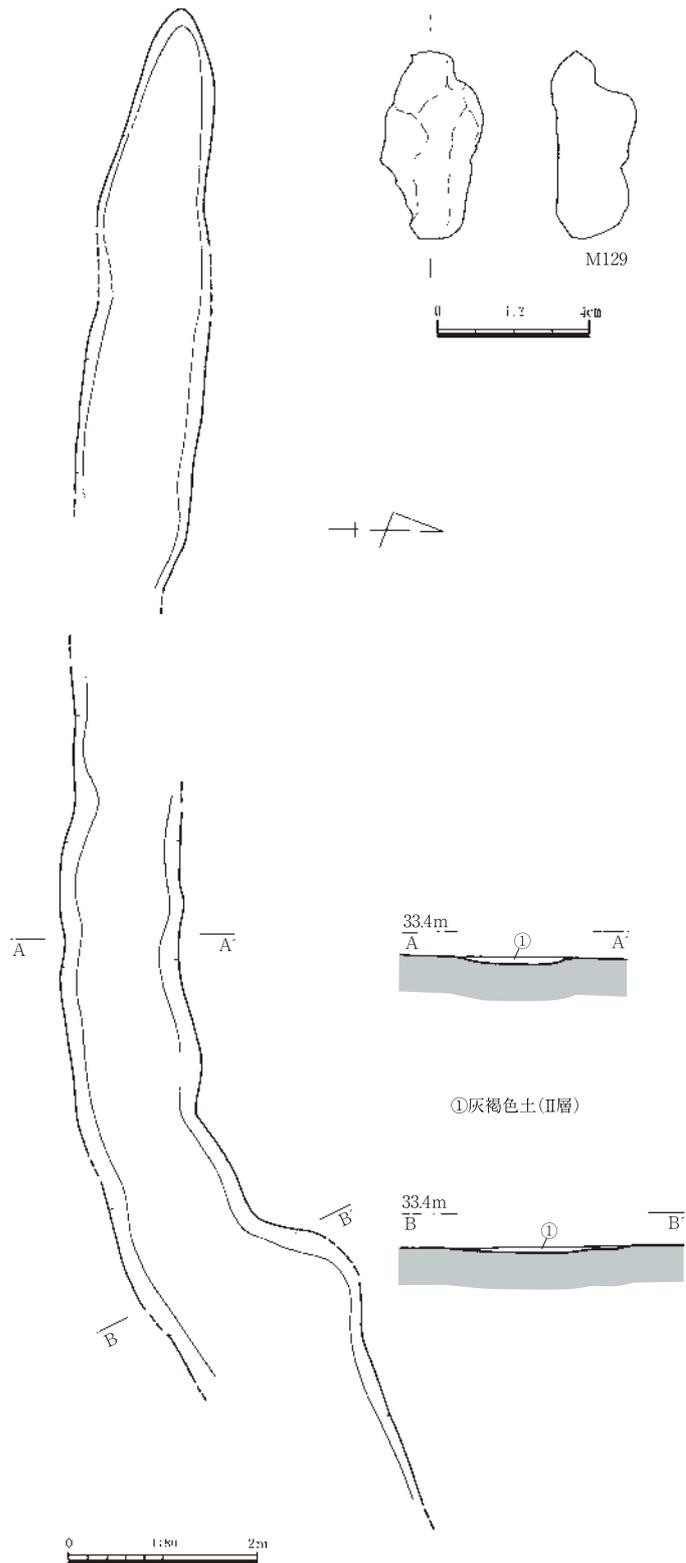
土坑 69 (第 188 図)

調査区西側に位置しており、落ち込み 1 を切っている。平成16年度の調査では溝19の続きと報告されていたが、今回の調査によって土坑であることが判明した。遺構の半分はすでに消失していたため全容は不明であるが、平面形は不定形な円形を呈していたと考えられる。規模は残存長191cm、残存幅92cm、深さ96cmを測る。底面は2段に掘り込まれており、そこで一辺33cmほどの磔を検出した。遺物は土師器の皿668、鉄製の釘と思われるM128が出土した。

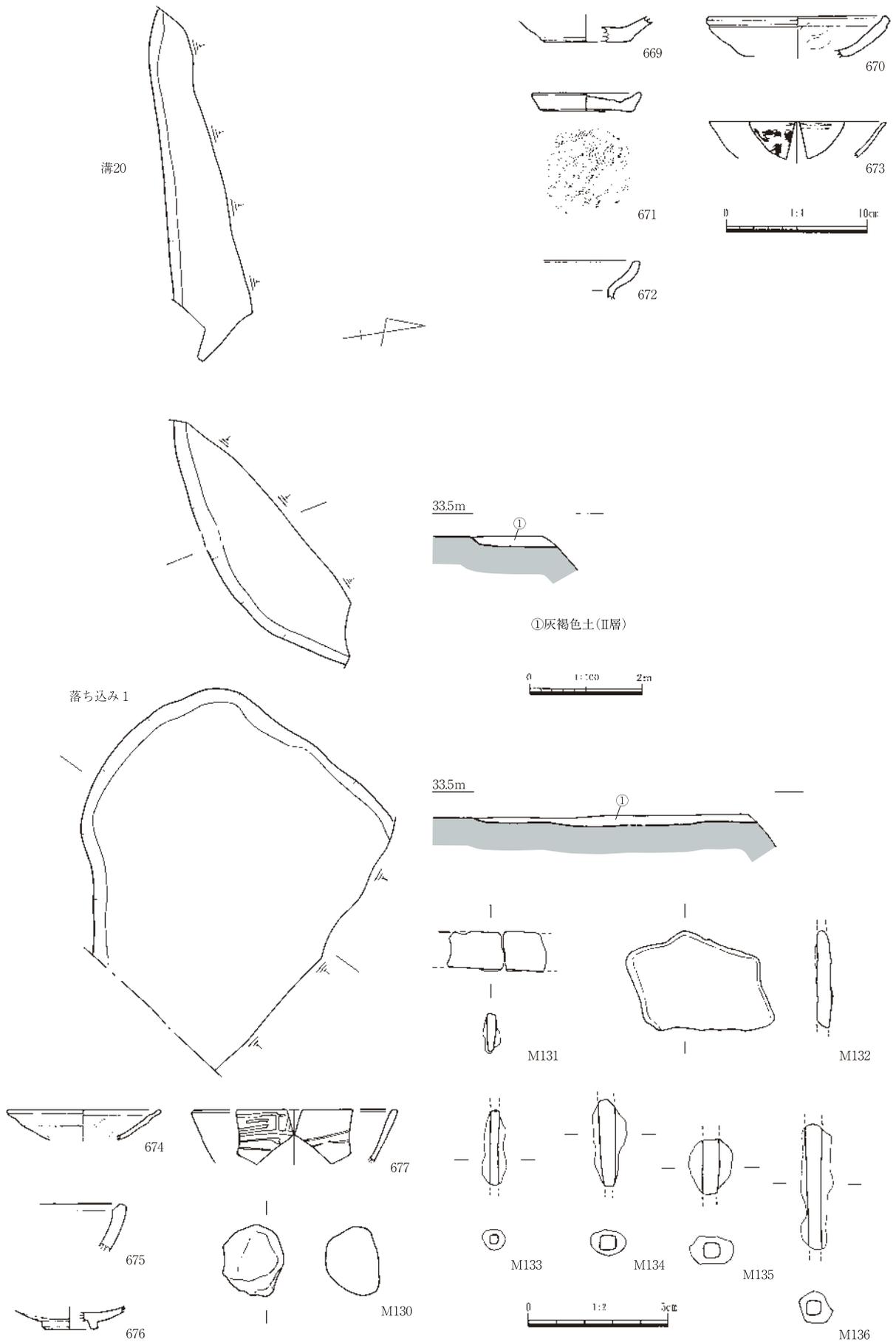
イ 溝

溝 19 (第 189 図)

調査区北側に位置しており、相上面で検出した。平成16年度に調査した続きにあたる。掘り方



第189図 溝19・出土遺物

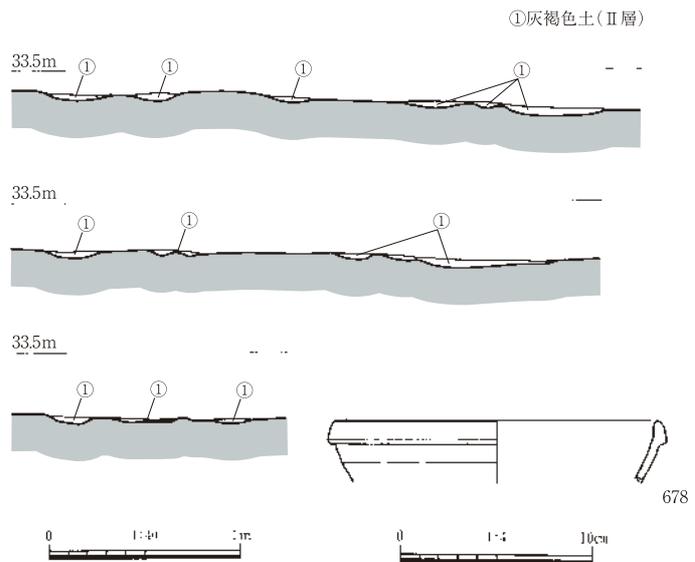
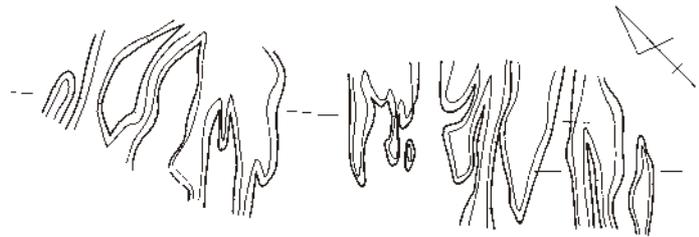


第190図 溝20・落ち込み1・出土遺物実測図

が不明瞭なため、落ち込みの可能性も考えられる。東西方向に湾曲しながらのび、規模は幅 130cm、深さ 12cm、断面形は皿状を呈する。埋土は 層である。

溝20 (第190図、P L.40)

調査区北側に位置しており、 層上面で検出した。平成 16 年度に調査した続きにあたる。遺構の大半が現代の削平によって消失しており、全容は不明である。検出した状況から、溝というよりも耕作に伴う落ち込みの可能性が高く、落ち込み 1 と関連するものと思われる。埋土は 層であり、そこから 669 ~ 673 が出土した。



第191図 耕作痕 7・出土遺物

ウ 落ち込み

落ち込み 1 (第 191 図)

溝 20 の西側約 1.4 m に位置しており、 層上面で検出した。北東側が削平を受けており全容は不明であるが、現状から不定形な楕円形を呈するものと推察される。遺構の掘り込みは浅く、形状などから耕作に伴う落ち込みの可能性が高い。埋土は 層であり、遺物は 674 ~ 677、M 130 ~ M 136 が出土した。時期は出土遺物から近世以降と考えられる。

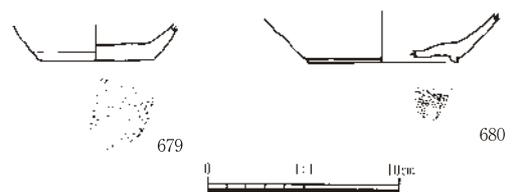
エ 耕作痕

耕作痕 7 (第191図、P L.19)

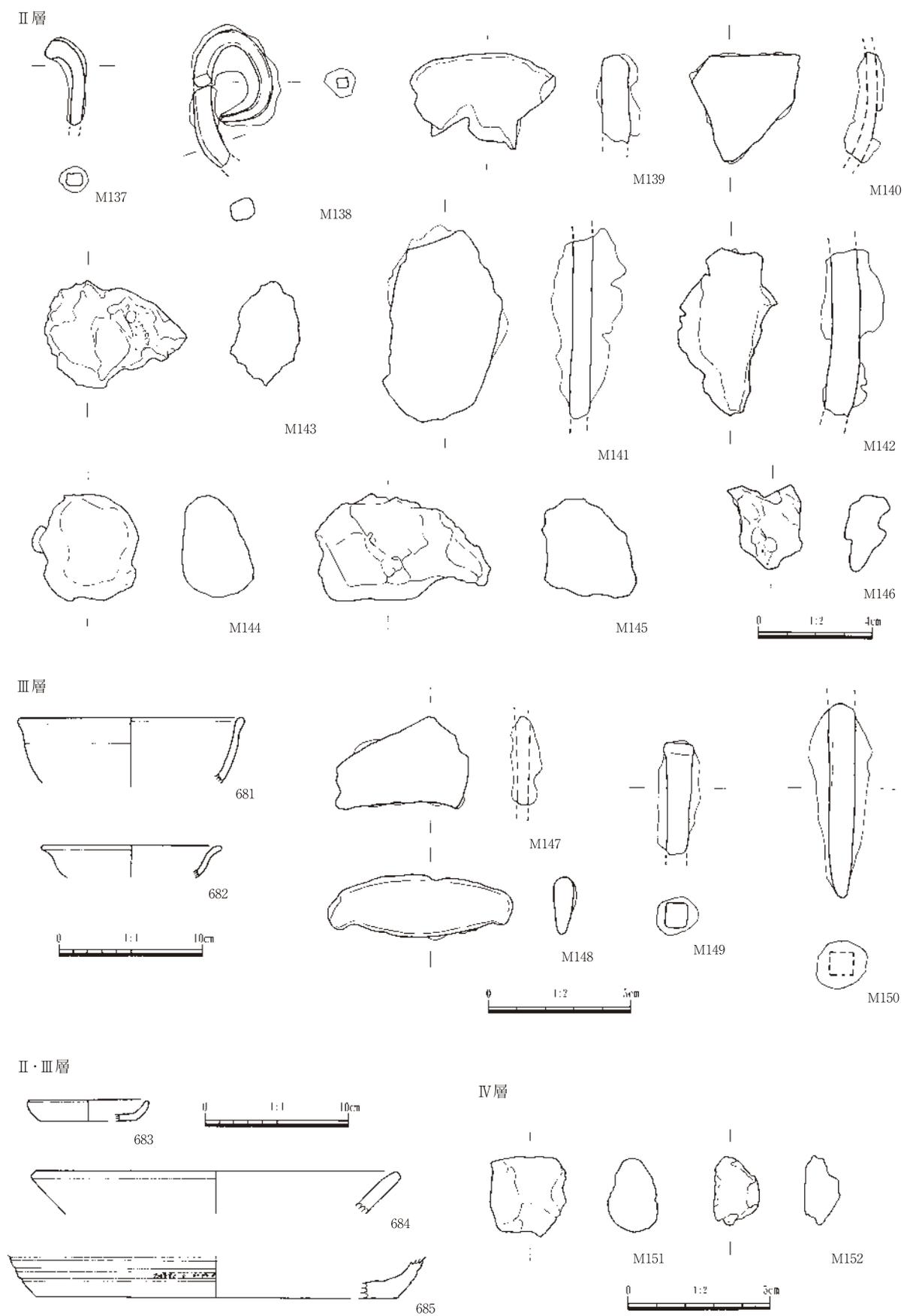
調査区南西側に位置しており、 層上面で検出した。南東から北西方向にのびる溝群で構成され、軸は N - 50° - E となる。掘り方は浅く不明瞭であり、規模は幅 12 ~ 70cm、深さ 6 ~ 12cm、断面形は皿状を呈する。埋土は 層であり、そこから 678 が出土した。678 は白磁碗 類であり、遺構が形成された時期のものではなく、混入したものと思われる。時期は埋土の状況から、近世以降のものと考えられる。

( 4 ) 包含層出土遺物 (第 192・193 図)

概要のところでも述べたが、16 区は中世以降の遺物を包含する 層が比較的良好な状態で堆積しており、遺物の出土層位を捉えることが可能であった。層位ごとに出土した主な遺物をまとめたものが第

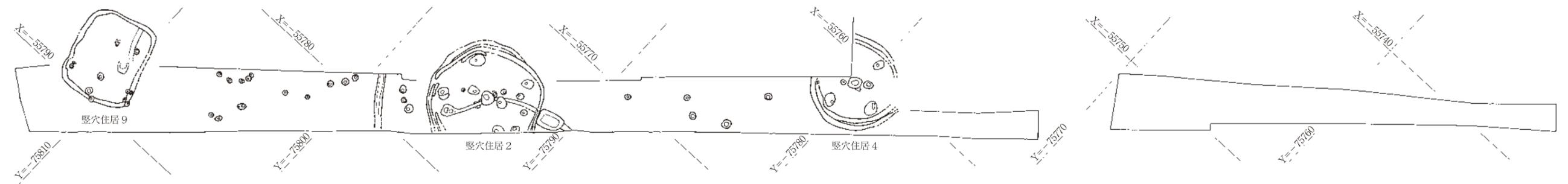


第192図 包含層出土遺物

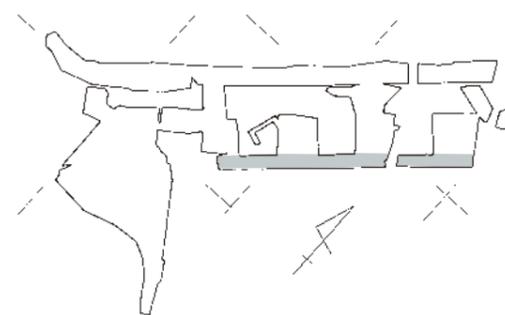
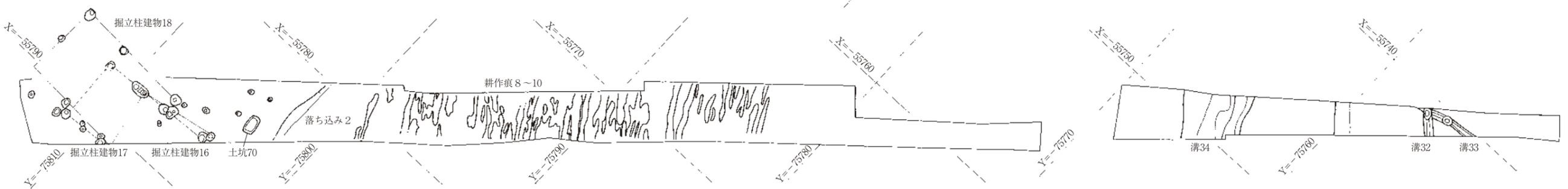


第193図 包含層出土遺物

古代以前



中世以降



第194図 遺構配置図



192・193 図である。以下、各層から出土した遺物について述べていく。

層から出土した遺物は 679・680、M 137～M 146 である。679 は土師器の坏で、外面体部との境に段を有し、底部は回転糸切りとなる。680 は 13 世紀後半の瀬戸美濃産の山茶碗である。底部には糸切りの痕跡が残り、体部との境には短い高台が付く。M 137～M 142 は鉄製品である。M 137・M 138 は鍛造品で、M 137 は釘、M 138 は環状鉄製品である。M 139～M 142 は鋳造品で、いずれも鍋である。M 143 は粘土質溶解物、M 144・M 145 は椀形鍛冶滓、M 146 は鍛冶滓である。

層から出土した遺物は 681・182、M147～M150 である。681・682 はともに龍泉窯系の青磁である。681 は碗 D 類で口縁端部が外反し、火を受けたためか器面には発泡が認められる。682 は坏で口縁部が外反する。M147～M150 は鉄製品であり、M147 は鋳造品の鍋、M148～M150 は鍛造品で、M148 は板状不明品、M149・M150 は釘と思われる。

この他、層と層のどちらに帰属するのか判断がつかなかったものとして、683～685 がある。683 は土師器の皿で、器面が摩滅しており不明瞭であるが、底部は糸切りである。684 は瓦質の鉢、685 は瓦質の火鉢で、外面には 2 条の沈線の間には菊文を連続して押印する。

層から出土した遺物は M 151・M 152 である。M 151 は炉壁であり、M 152 は鍛冶滓である。

## 第9節 17区の調査

### 1 調査区の概要

遺跡の東側に位置する東西に細長い調査区であり、北側は 2・3・4・9 区と接する。調査区が河岸段丘の上段と中段にまたがっているため、その西側と東側で地形や層序の状況が異なっている。河岸段丘の上段にあたる西側は、北東方向に向かって緩やかに傾斜する地形となる。層序は西側 1/3 ほどが後世の削平のために表土直下が A T となっているものの、そこから東側にかけて中世の耕作土が徐々に堆積し、東側 1/3 ほどの上段と中段の境部分では ～ 層、クロボクの漸移層である暗褐色土、A T の堆積が認められる比較的残りの良いものであった。遺構の検出は ～ 層及び A T 上面で行い、このうち遺構を検出できたのは ～ 層、暗褐色土、A T 上面であった。～ 層では中世の耕作痕、暗褐色土ないしは A T では弥生時代から古墳時代の竪穴住居やピット、中世の掘立柱建物や土坑、ピットなどを検出した。

中段にあたる東側は、上段から 4 m ほど下がった場所にある。地形は上段と同様、北東方向に向かって緩やかに傾斜する。中段西側にあたる溝 34 の西岸では、軽石混じりの黄褐色ロームが露出し、川原石と考えられる円礫が堆積していたことから、この溝が氾濫原の境であると考えられ、そこから上段へと急激に立ち上がっていたものと推察できる。層序であるが、淡灰褐色細砂を基盤とし、その上に中世以降に形成されたと考えられる層が堆積していく。ただし、中央付近において中世以降に形成されたとと思われる段が認められ、それを境として東西で堆積状況が異なっている。東側では淡灰褐色砂質土の上に ～ 層が薄く堆積しているのに対し、西側では淡灰褐色細砂の上に ・ 層が堆積している。なお、ここで認められる ～ 層は中世の遺物を包含していることから 2 次的に堆積したものと捉えられ、上段のものとは状況が異なっているといえる。さらに、～ 層の影響を受けたのか、その直下の淡灰褐色細砂は色調が暗くなり、暗灰褐色細砂としても差し支えないものとなっている。これら中世

以降に形成された層の上には、現代の土地造成に伴うローム混じりの土が厚く盛られ、現代の耕作地となる。遺構は淡灰褐色細砂及び暗灰褐色細砂上面で中世以降の土坑1基、溝3条を検出した。

## 2 古代以前の遺構・遺物

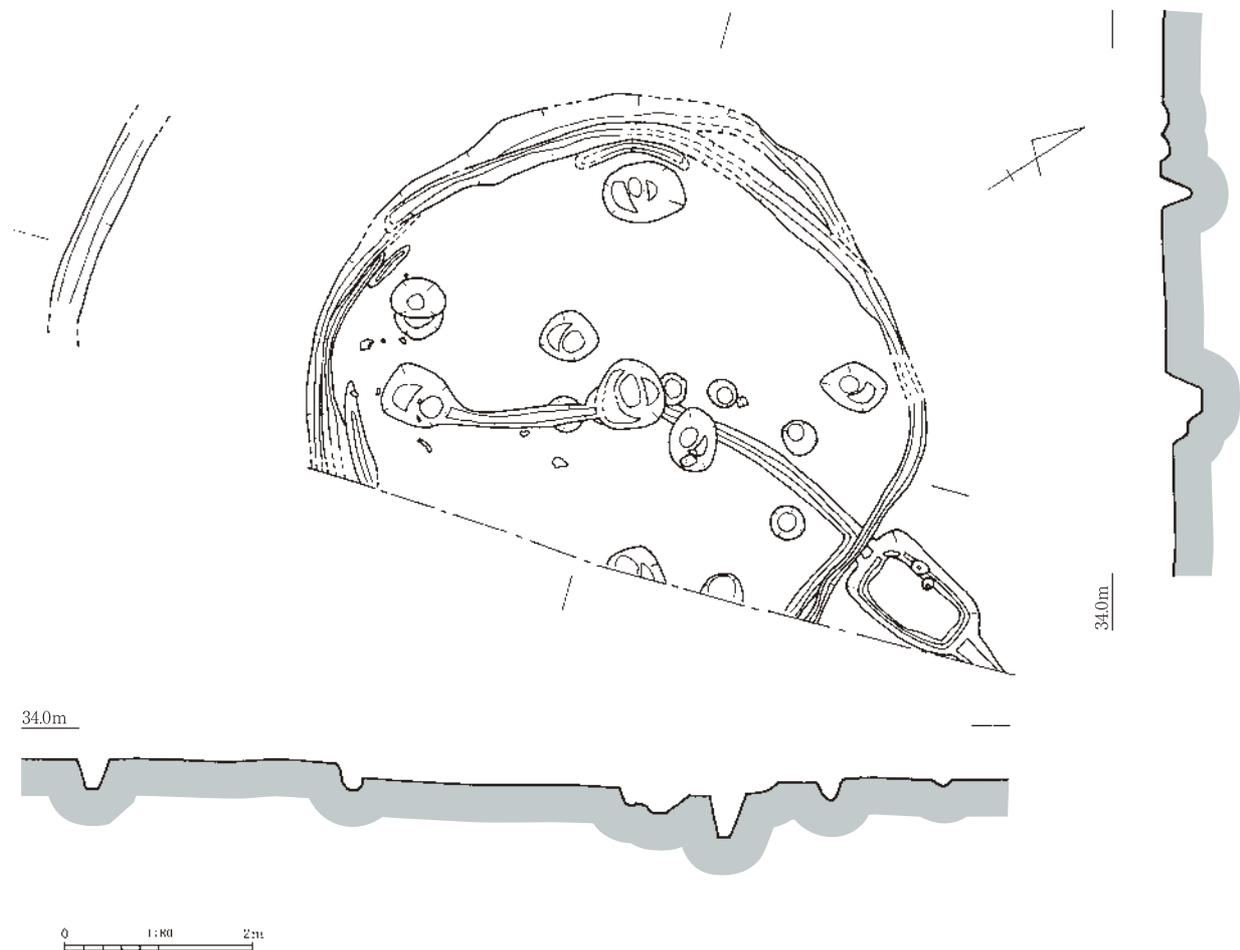
検出した遺構は弥生時代中期の竪穴住居2棟、古墳時代前期の竪穴住居1棟、時期の特定できないピットである。弥生時代中期の竪穴住居はそれぞれ建て替えが行われており、竪穴住居2では2回、竪穴住居4では1回行われている。このうち竪穴住居2では竪穴住居8と同様、周堤溝を伴い、竪穴住居外にある土坑に連結する溝を持つなど、特異な構造をもつものであった。

古墳時代の竪穴住居は貼り床が貼られており、ベッド状遺構を有し、壁際に特殊ピットをもつものであった。また、貼り床除去後には竪穴を掘削した際の痕跡と考えられる「コ」の字状を呈する浅い溝が壁際で認められた。

### (1) 竪穴住居

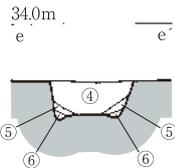
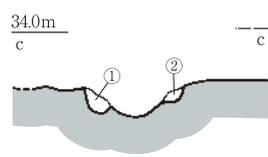
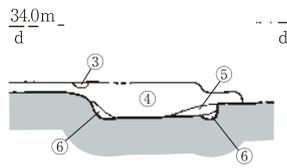
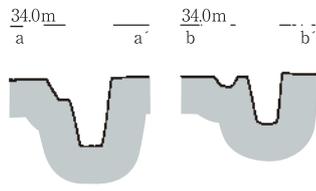
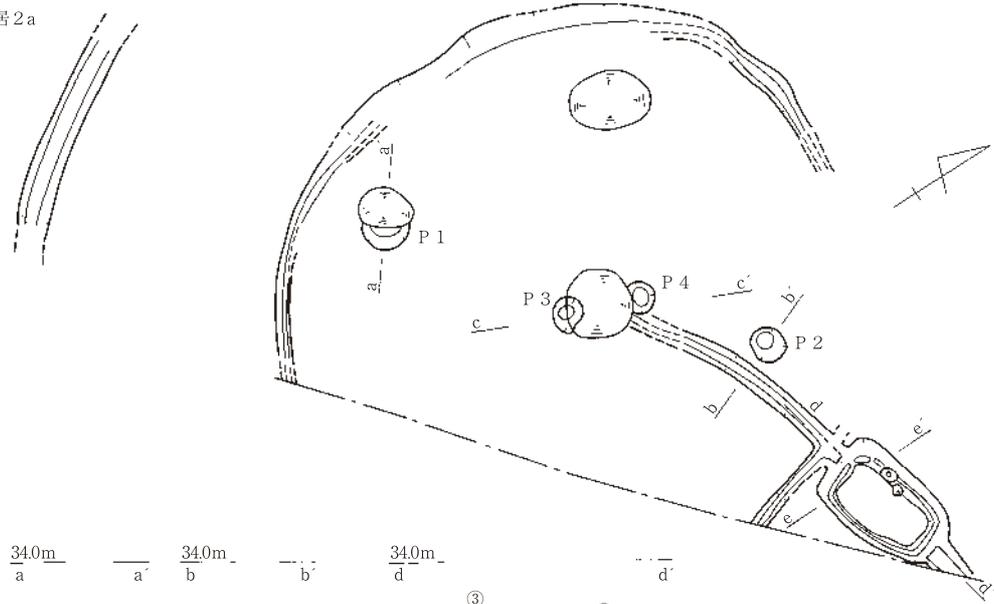
竪穴住居2 (第195~198図、P.L.21・42)

調査区中央、竪穴住居4の西側約14.5mの距離にあり、暗褐色土上面で検出した。平成16年度に調査した続きにあたり、前回の調査部分と合わせて全体の4/5ほどを調査した。残りは調査区外にのびているため、全容は不明瞭である。竪穴住居2は建て替えが行われており、その切り合いから竪穴住居2a 2b 2cの順に築かれたものと思われる。なお、ここから243cm離れたところにおいて



第195図 竪穴住居2a・b・c

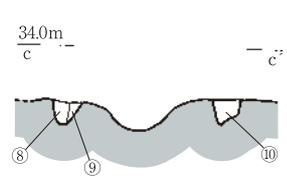
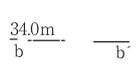
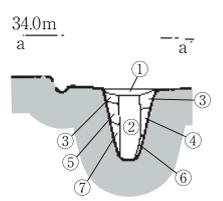
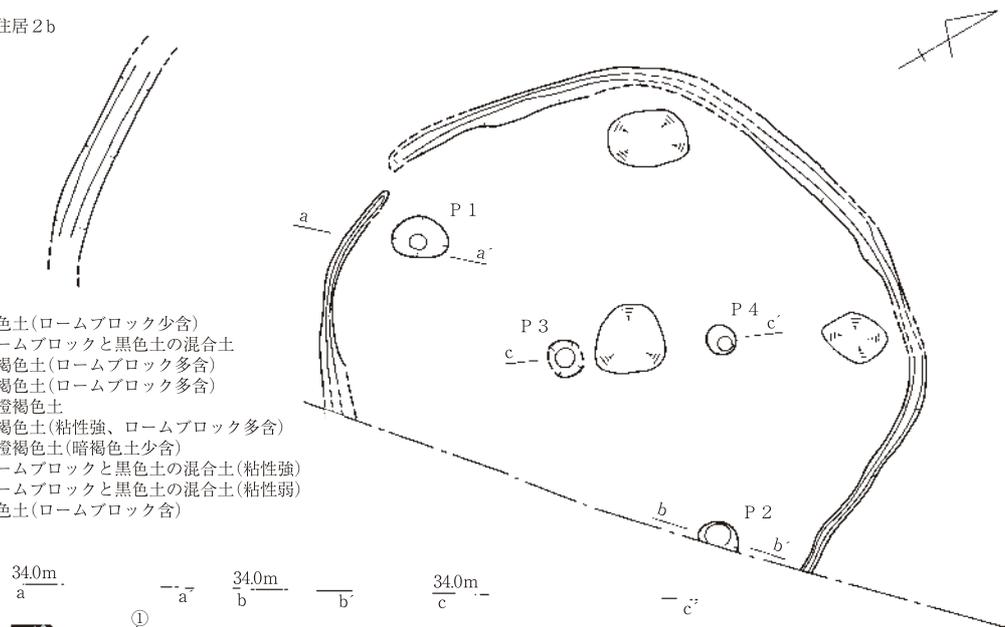
竪穴住居 2a



- ①黄褐色ロームブロックと黒色土の混合土
- ②黒色土
- ③黒色土(2 c 周壁溝)
- ④黒色土(ロームブロック含)
- ⑤暗褐色土(ローム粒含)
- ⑥黒色土(しまり強、粘性強)

竪穴住居 2b

- ①黒色土(ロームブロック少含)
- ②ロームブロックと黒色土の混合土
- ③暗褐色土(ロームブロック多含)
- ④暗褐色土(ロームブロック多含)
- ⑤黄橙褐色土
- ⑥暗褐色土(粘性強、ロームブロック多含)
- ⑦黄橙褐色土(暗褐色土少含)
- ⑧ロームブロックと黒色土の混合土(粘性強)
- ⑨ロームブロックと黒色土の混合土(粘性弱)
- ⑩黒色土(ロームブロック含)



第196図 竪穴住居 2a・b